1. FD 部会

1.1. FD 部会

1.1.1 部会の構成

2005 年度の教務委員会ファカルティ・ディベロップメント部会（以下、FD 部会という。）は、下表のとおり委員 10 名、事務局 2 名の計 12 名で構成されている。事務の負担も大きいので前期と後期で一部異動があった。事業それぞれに、部会員相互の協力が不可欠であるが、責任体制を明確にするために、つぎのように主たる担当事業を部会員に割り当てた。その際、本人の希望、前年度からの経験、部局のバランスを考えた。

表　2005 年度教務委員会 FD 部会員名簿

氏名	所属	職	役割	担当事業
菊沢正裕	情報センター	センター長	部会長	ウエブサイト・研修
新宮　晋	経済学科	助教授	委　員	調査研究
田中求之	経営学科	助教授	委　員	授業公開、研修
日幷隆雄	生物資源学科	助教授	委　員	授業評価
神谷充伸	海洋生物資源学科	助教授	委　員	小浜キャンパス担当
細谷純子	看護学科	講　師	委　員	授業評価・研修
瓦井　昇	社会福祉学科	助教授	委　員	調査研究
片山智彦	学術教養センター	助教授	委　員	調査・書記・報告書
津村文彦	学術教養センター	講　師	委　員	授業公開
松村清雄	教務課	課　長	委　員	
紙谷和子	教務課	総括主任	事務局	
町村正寿	（前期）教務課	企画主査	事務局	
滝波朋子	（後期）教務課	主　査	事務局	

1.1.2 議事概要

FD 部会では、2005 年度は、6 回の対面会議を開催した。定例開催とせず、事業方針や実施方法を決めるために前期は 5 月と 6 月、後期は 11 月に開催した。8 月と 9 月の会議は、事業方針やガイドラインを議論するために、またそれらに関する学内での合意をうるためのセミナー開催（10 月）の準備を目的とした。そして、3 月に年度報告をまとめるための会議を開催した。それ以外は、メーリングリスト（ml-fd@ml.fpu.ac.jp）による電子会議とした。メーリングリストには、上記メンバーのほか、小浜事務室の杉村美奈子主事にも途中から入っていただいた。3 月 16 日現在のメーリングリストへの投稿は 323 件である。対面会議の議事録を以下に示す。

■ 第 1 回議事録（敬称略）

開催月日　平成 17 年 5 月 27 日（金）
開催場所　管理棟評議会室（福井キャンパス）、テレビ会議室（小浜キャンパス）
出席者　　菊澤(議長)、新宮、田中、日幷、神谷、瓦井、片山、津村、松村
欠席者　　細谷
事務局　　紙谷総括主任、町村企画主査
開会時刻　9 時 5 分　閉会時刻　10 時 35 分

議 事
１　部会委員の紹介〔資料１〕
２　第 8 回ﾌｧｶﾙﾃｲ･ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾌﾟﾒﾝﾄ部会議事録（案）の確認
　第 8 回会議事録（案）が承認された。
３　審議事項
①　FD 部会の方針について
　ⅰ記録体制について
部会長から、FD を本格実施とする今年度より、FD に関する全ての行事等を記録し、その活動内容等を報告書として残していきたいとの提案がなされ、了承された。なお、報告書作成に際しては、前年度先進大学の一つとして視察した山形大学の報告書等を参考にする。
　ⅱ実施体制について
部会長から、FD 委員中心の FD 活動から全教員が積極的に参加する FD 活動に進展させる方法として科目グループ（１グループ数名～10 名程度まで）を編成することの提案があり、審議においてつぎの意見が出された。
　･科目グループの果たすべき役割､目的および共通フオーマット等を明確にすべきであり、科目グループはその基盤整備が整ってから考えてはどうか。
　・独自に実践している FD 活動については、FD 部会が支援してはどうか。また全学的な取組みに発展させてはどうか。
審議の結果、グループ体制の構築については、充分な基盤整備が必要との観点から今後検討していくこと、また全学的な取組みが必要とされるプロジェクトについては、FD 部会も支援を行なうことを確認した。
　ⅲ大学改革実践プログラムについて〔資料 2〕
　他委員会と連携しながら活動すること、とくに大学改革実践プログラムの教務委員会担当事項中、FD に関連する項目は FD 部会でも同時並行で調査研究していくことを確認した。
②年間予定行事について〔資料 3〕
　事務局より、資料に基づき平成 17 年度 FD スケジュールが報告され確認された。
　ⅰ新任研修会について〔資料 4〕
　事務局から、資料に基づき新任研修会の内容について報告された。今回の研修会では対応出来なかった講義室機器の操作説明や教育に関する相談に応じる体制など次年度以降の新任教員研修会で実施すべき内容や体制について検討していくものとした。
　ⅱ平成 17 年度前期授業評価実施（案）について〔資料 5、6〕
事務局から、資料に基づき平成 17 年度前期授業評価実施（案）についての説明がなされた。
審議の結果、本年度前期授業評価については、次の案が承認された。
　・実施期間：７月１５日（金）～７月２８日（木）
　・対象者：全教員（非常勤講師を含む）
※非常勤講師の科目については、FD 部会長名で授業評価を実施する旨の文書を発送し、非常勤講師の承諾が得られた科目について実施する。後期は全非常勤科目を対象とする予定であることも案内する。
　・対象授業：前期に開講される全学部の全科目
※但し､授業評価実施にそぐわないと判断される科目については､当該科目の教員が判断し、

実施しない旨を教務課に連絡する。
・実施方法：１）授業時間終了前に　２）授業担当教員が調査票を配布・回収する学生を指名　３）その学生が調査票を配布・回収し、事務局に提出　　４）調査票はマークシート方式
・質問項目：前年度後期と同じ資料６のとおりとする。17 年度後期は未定。
ⅲ公開授業実施方法について
公開授業の実施方法については、次の意見が出されたが、具体的な方法については、今後担当委員（④で協議）を中心に検討する。
・公開授業の意義や目的は、明確に認識しているとは言い難いので、今後 FD 部会がそれらを明確にし、周知していく。
・公開授業の実施は、各部局各学科において１科目が望ましいが、そのためには準備期間や調整が必要である。
ⅳ先進地視察、学外講師による研修会について
前年度は先進地視察と研修会を複数回実施したが、今年度は、それだけにとらわれず、先進の山形大にみられるような合宿セミナーなどの活動も行うことを、研修会担当委員（④で協議）を中心に検討する。
③ 大学改革実践プログラムの一部項目について〔資料 2〕
資料に基づき教務委員会にて諮問項目となっている取組事項の中、FD に関連する項目については、FD 部会においても検討を進めていくこととした。
④役割分担について
・各部局あるいはグループが独自に取り組んでいる FD 活動は、FD 部会において紹介することについて合意された。
・部会長から、主な年間行事は、まず担当委員（2,3 名）を中心に検討してほしい旨の提案がなされ、概ね了承された。同時に、部会長が担当委員案（次の表）を口頭で説明した。なお、分担事業項目と担当委員について協議する時間がなく、また欠席者と途中退席者がいたので今後メーリングリスト（ml-fd@ml.fpu.ac.jp）で協議して決めることとした。

■ 第 2 回議事録（敬称略）

開催月日　平成 17 年 6 月 10 日（金）
開催場所　管理棟評議会室（福井キャンパス）、テレビ会議室（小浜キャンパス）
出席者　　菊澤(議長)、新宮、田中、日弄、神谷、瓦井、片山、松村
欠席者　　津村、細谷
事務局　　紙谷総括主任、町村企画主査
開会時刻　9 時　閉会時刻　10 時 15 分

議 事

１ 平成 17 年度第 1 回ﾌｧｶﾙﾃｲ･ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾌﾟﾒﾝﾄ部会議事録（案）の確認
平成 17 年度第 1 回ﾌｧｶﾙﾃｲ･ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾌﾟﾒﾝﾄ部会議事録（案）が承認された。
２　審議事項
① 平成 17 年度前期授業評価について（教務委員会からの要望事項）〔資料 1〕
部会長から､第 3 回教務委員会において､各学部より前期授業評価の質問項目等に対し、要望事項が出されたことが報告された。
ｉ 実施期間について
部会長から、生物資源学科より約 3 週間前からの前期授業評価の実施の要望があったことが報告され、審議の結果、承認された。なお、前倒し実施の理由を再度、確認するものとした。
ii 質問項目について
ア　部会長から、質問項目 1 について、経済学部には 30 回の授業もあることから、欠席を回数から割合への表示に変更の要望があったことが報告された。審議の結果、パーセントを割合への表示に、また　全部出席をほぼ全部出席に修正することが承認された。なお、学生が回答し易いように、15 回授業、30 回授業を併記し、各授業の欠席回数がどのような割合となるかを例示することとした。
イ　部会長から、質問項目 10 について、看護福祉学部の授業には必修科目が多いが、必修科目の場合はこの質問はあまり意味を成さないとの意見が出されたことが報告された。これついて審議がなされ、結果、必修科目等であっても学生の意見を反映させるべきであると判断し、削除しないものとした。
ウ　部会長から、大学改革実践取組項目に教務委員会担当項目として、C-2 オフィスアワーの設定があるが、そのオフィスアワーの現状を調査するための質問項目を前期の授業評価調査に組み込んで欲しいとの要望があったことが報告された。審議の結果、オフィスアワーに関する質問項目を含めることが承認された。なお、各質問項目の内容等について、本日中にメーリングリストで協議して決定することとした。なお、メーリングリストでの協議の結果、下記のとおりに修正することとした。
・質問の趣旨説明「本学では、シラバスのオフィスアワー欄にあらかじめ記載された時間帯に科目の担当教員の研究室を訪れ、質問や相談などコミュニケーションできる機会を設けています。このオフィスアワー制度に関する次の質問に答えてください。
・質問 12 この講義に関して、オフィスアワー制度を利用しましたか？
選択肢　1 利用した　2　利用しようとしたができなかった　3　利用しなかった
・質問 13　質問 12 で 3 と答えた人はその理由を次の中から一つ選んでください。
選択肢 1　授業中や直後に質問等を行なっているから　2　メールや WebCT などを利用しているから　3　自分の都合の良い時に､質問できる(または質問したい)から　4　質問や相談がなかったから　5　その他
・質問 14　このオフイスアワー制度の改善すべき点や利用しなかった理由などを自由に書いてください。また　教室環境に対する質問項目への対応・改善の結果については、今後、各教員に対し、事務局教務課からフィードバックを行なうものとした。

② 事業担当者ならびに責任者の決定について〔資料 2〕

部会長から、資料に基づき事業担当者編成（案）についての説明がなされ、審議の結果、承認された。なお、前期公開授業については、委員である田中求之助教授を講師として実施することが承認された。実施内容等については、田中委員を中心として準備を進め、7月の教務委員会に報告することが確認された。

③ 今後の事業の進め方について〔資料 3〕

部会長から、資料に基づき今後の FD 部会事業の実施スケジュールが説明され、承認された。なお、今後の先進地視察、研修会の実施については、計画がある場合は、迅速な対応を図ることが確認された。

④　その他

3　協議事項

① 大学改革実践プログラムに係る FD 部会の担当項目について〔資料 4〕

部会長から、大学改革実施計画についての今後のスケジュールおよび FD 部会が関連部局となる各取組項目についての説明がなされた。続いて、各取組項目について、FD 部会が担当するかについての協議がなされた。協議の結果、C-1 ファカルテイ・ディベロップメントの実施ならびに C-7 教育の成果の検証･評価体制の検討については担当することとしたが、C-19 成績評価の厳格化については、成績評価と授業改善との関連性が明確とされていない等を理由として、FD 部会においては担当しないものとした。

②　その他

■ 第 3 回議事録（敬称略）

開催月日　平成 17 年 8 月 2 日（火）
開催場所　管理棟評議会室（福井キャンパス）、テレビ会議室（小浜キャンパス）
出席者　　菊沢(議長)、新宮、田中求之、日幷、瓦井、神谷、細谷、片山、津村、松村
事務局　　紙谷総括主任
開会時刻　14 時 40 分　閉会時刻　17 時 30 分

議　事
１　第２回 FD 部会議事録確認
　　津村　出席→欠席
２　ホームページの取扱いについて
　　会議内容、会議資料、事業報告等の資料を共有する目的で HP を作成。当面は、各自作成した資料ファイルを菊沢に集め、菊沢が HP にアップする。また、時期をみて、委員の了承のうえで、本学トップページの「本学の取組み」にリンクする。アドレスは http://www.s.fpu.ac.jp/fd/
３　授業評価について
(1) 前期の実施状況について（紙谷）
　資料１（17 年度前期授業評価実施状況）に基づいて報告。実際と多少異なる。参加率が低いとの意見があったが、助手や前期には授業をもたない教員を含むこと、申告用紙の集計結果であるため申告なしに参加した教員がいることに留意。参加数を参加者数に訂正。教員数に注釈として、「助手を含まない」（対応する数字に変更）」および「前期授業をもたない教員を含む」とする。2 週間後に回収される評価用紙整理する際には、開講科目数と参加科目数およびその割合をいれる。
(2)後期の実施方法について（日幷）
　日・神谷・細谷による資料２について説明。設問決定を 11 月一杯することを追加して、作業スケジュールを了承。
　授業の基本方針については、協議の結果、受講者にとっての授業改善を目的とすること、教育プログラムの改善のための基本データの収集と分析に利用すること、対象を原則全科目とすること、原則として全学部共通の設問とすること、原則公開とすることを了承した。文語は、同班でもう少しつめることとした。
　アンケートの調査については、全員を全科目に訂正する、設問は、全学共通のほか、授業の特性に応じて２，３種類の追加設問を用意する、など。改善要求や各部局への依頼については資料の方針で進めることとした。
４　　公開授業について
(1)前期の実施状況について（田中）
　資料１および田中・津村による資料（当日配布）の公開授業概要について報告。
(2)後期の実施方法について(津村)
　田中・津村による資料（当日配布）び「今後の公開授業」について説明。これまで 2 件実施した。FD 委員による公開授業は後期も行うが、自主的な公開授業の実施を促す。そのために、公開授業の制度あるいは枠組み（これまでの検討会の内容や、他大学のノウハウを参考にしながら実施のためのマニュアルを作成配布、アドバイスなどの FD による支援方法）を作成する。なお、後期は小浜キャンパスでも実施する（神谷主導）。
５　大学改革への取組みについて
(1)GP 等プログラムへの取組み促進について（新宮、片山）
　資料５および新宮・片山による GP 関連資料に基づき、GP に関する説明と促進の方法について提案があった。情報提供して学内にこの制度を周知すること、採用大学の中身を紹介するなど本学から応募するための下地をつくること、そのうえで、本学から応募する仕組みを考える（各部局からの応募調整、有志グループの支援など）

(2)教育の成果の検証・評価体制の検討について

資料５の後半に基づき説明があった。授業評価、公開授業とも連携しながら教育成果の検証方法を考える、教員の成績評価方法のばらつきをどうするかを考える一方で、本学の教育プログラム（テストの仕方、履修ナビゲーション、１コマの時間数や学期制、など）を検討していく。

GPA について資料をもとに説明。GPA の性格と、導入の意味について検討を進める。教務委員会の大学改革取組みテーマでもあるので、教育成果とともに教務委員会でも積極的に検討するよう申し出る。

６　その他の事業計画について（菊沢）

資料４に基づき研修予定案を説明。10 月上旬までに第４回 FD 部会を研修会形式（今回より長めの会議と、講師招聘）で実施し、本来の研修会（講師を招聘し、研修する）は、講師を模索しながら冬場に実施する。第４回 FD 部会（研修会）の講師として、金沢工大の学務部次長の招聘を依頼中。事務職員の招聘なので実現するかどうか確証はないが、実現する場合は、本学事務職員の参加も考える。日程は未定。ただし FD 部会員の都合上、10 月 2 日以降、できれば週末とする。

■ 第 4 回議事録（敬称略）

開催月日　平成１７年９月２８日（水）午前 9:00～12:00
開催場所　管理棟評議会室（福井キャンパス）、CTC 会議室（小浜キャンパス）
出席者　　菊澤(議長)、新宮、田中、日弄、神谷、瓦井、片山、細谷、松村
欠席者　　津村（海外出張）
事務局　　紙谷総括主任、町村企画主査

議　事

１、ＦＤセミナーについて

１０月３日（月）に開催される第１回ＦＤセミナーの各テーマについて、それぞれを担当する教員グループから、資料の提示と説明が行われ、以下のような議論があった。

(1)授業評価の現状と今後の展開について

生物資源学科日弄隆雄助教授から、ＦＤ部会内の授業評価グループでの授業評価の基本方針、実施方法についての検討結果について報告があり、今後の授業評価の在り方について議論された。授業評価アンケート項目原案が示され、各学部での審議の後、その結果を踏まえて、設問を２０問程度に絞り込むこととされた。授業評価の基本方針、実施方法についても学内の意見集約を図ることとされ、海洋生物資源学科の神谷充伸助教授が検討事項のまとめを作成されることになった。

(2)公開授業の現状と今後の展開について

経済学科の田中求之助教授から、ＦＤ部会内の公開授業グループでの公開授業の現状と問題点についての検討結果について報告があり､今後の公開授業の進め方について議論された。今後公開授業のハンドブックの作成を行うこととされた。

(3)福井県立大学の教育改革の展開について

経済学科の新宮晋助教授から、ＦＤ部会内の教育改革グループでの、教育改革についての検討結果について報告があった。

(4)当日の役割分担について

ＦＤセミナーの際の役割分担が確認された。

(5)その他

２、ＦＤ研修について

全教員対象のＦＤ研修について、事務局から、研修の委託が可能な業者と研修の内容について説明があった。ＦＤ研修については、研修の委託先も含め、次回のＦＤ部会でさらに検討することとされた。

３、その他

大学基準協会主催の「｢特色ある大学教育支援プログラム」フォーラム」の案内があり、各教授会で、ＦＤ部会委員以外の教員の参加を募ることとした。

前期の授業評価アンケートの実施結果について後日事務局から結果の公表時期が示されることになった。

■ 第 5 回議事録（敬称略）

開催月日　平成１７年 11 月 21 日（月）
開催場所　管理棟評議会室(福井キャンパス)、テレビ会議室（小浜キャンパス）
出席者　　菊澤(議長)、新宮、田中、日弄、神谷、瓦井、片山、津村、細谷、松村
事務局　　紙谷総括主任、滝波主査
開会時刻　10 時 40 分　閉会時刻　12 時 15 分

議　事
議事録（案）の確認
　平成 17 年度第４回議事録（案）が承認された。
【報告事項】
・2004 年後期の授業評価結果は来週中までにウエブに開示
・2005 年前期の授業評価については，結果を教員に配布し、教員のコメントを収集中．ウエブ開示は近日予定．
・GP フォーラムには，経済学部 1 名，生物資源学部 2 名，看護福祉学部 1 名が参加予定．
【審議事項】
（１）授業評価の内容について
・授業評価アンケート項目の原案について議論がなされた。追加的に ML で協議を加えて決定し，教務委員会（12 月 6 日）に上げる。それまでならば意見も受け付けられるので FD 委員まで連絡を。最も大きな変化としては、各教員ごとに個別の設問を 1 問設定できるようになったことがある。
・回答の集計と開示方法等については，12 月教授会で FD 部員から提示し、出された意見をふまえて最終的に実施する。
・原案では次のようになっている：
　(a) 各教員へは「各設問の平均と分散と過去４年の変動」「自由記述回答全て」を開示
　(b) 学内公開に用いる解析データは「全授業について各設問の平均と分散」「各部局について各設問の平均と分散」「各授業について各設問の平均と分散」「それらの過去４年の変動」
　(c) 教員の要望に応じて行われる学内公開は「各授業後との各設問の平均と分散と過去４年の変動」「自由記述回答の掲載」「教員自由設定設問の内容および集計結果の掲載」
（２）成績評価の検証について
　学生の学期あたりの履修登録科目数と取得科目数などのデータが示され、ドロップアウト率（登録しながら単位取得しない率）が高いことが指摘されたが、諸事情を考えると、必ずしも単位取得数に縛りを設けることが必要とは思われない。よって,「中期計画」は無訂正としながらも，GPA や CAP に関する
事項を具体的な年次計画として今回明記しないこととする.ただし､その他の方法も含めて、成績評価の厳格化、履修科目数などに関する具体案については今後も FD 部会で議論することが確認された。
（３）ＦＤ研修の実施について
第２回 FD 研修会：平成 17 年 12 月 22 日（木）13:00-17:00
　場所：福井県立大学
　講師：独立行政法人メディア教育開発センター
　　研究開発部メディア活用系研究主幹　佐賀啓男・教授
　内容：大学授業の自己改善法…なぜ FD をするのか
第３回 FD 研修会：平成 18 年２月予定
　場所：福井県立大学
　講師：独立行政法人メディア教育開発センター　内田実・特任教授
　内容：インストラクションデザイン…教育設計、授業をいかに構成するか

その他、（株）話し方研究所によるより方法論的な研修会も企画中。
（４）公開授業について
　基本方針とガイドラインを作成。今年度後期の実施案を策定。12 月教授会で基本方針・ガイドラインを教授会で意見を調整し、最終決定する。今年度後期は、全体から公開可能な授業を募集し、それを周知のうえ、１月第三週を公開授業ウィークとして、自由に公開授業に参加する形態をとる。形態としては前半 70 分程度が授業で、後半 20 分程度が検討会。参加者は簡単なアンケートに記入し、議論に参加する。
　またこの様式に従わない従来型の公開授業も了承する。海洋生物資源学科は現在準備中で、また一部にしか公開しない公開授業も認めるものとする。
[議事録外事項]
第２回 FD 研修会の講師に正式に依頼したところ，次の研修概要をお知らせいただいた.
　「ＦＤをめぐる内外の概況、よい授業の条件を概観したうえで、授業におけるメディア利用の効果の問題、動機づけの教授デザイン、ＦＤ促進の方略について概説する。なお、授業改善とＦＤ促進策についてのグループ作業を行う。」

■ 第 6 回議事録（敬称略）

開催月日　平成 18 年 3 月 1 日（月）
開催場所　管理棟評議会室(福井キャンパス)、テレビ会議室（小浜キャンパス）
出席者　　菊澤(議長)、新宮、田中、日弄、神谷、瓦井、片山、津村、細谷、松村
事務局　紙谷総括主任、滝波主査、杉村主事（小浜キャンパス）
開会時刻　9 時 30 分　閉会時刻　12 時 05 分

議　事

1　平成 17 年度第 5 回ﾌｧｶﾙﾃｲ･ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾌﾟﾒﾝﾄ部会議事録（案）の確認
平成 17 年度第 5 回ﾌｧｶﾙﾃｲ･ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾌﾟﾒﾝﾄ部会議事録（案）が承認された。

2　報告事項
（1）後期授業評価結果について
事務局から資料 1 および別表に基づき報告がなされた。菊澤部会長から、アンケート回収率を算出する際の母数が､出席者数ではなく受講登録者数となっているため､本来の｢回収率｣より数値が下回ることが指摘された。
（2）後期授業公開結果について
津村委員から資料 2 に基づき報告がなされた。委員から、今回授業の後半で討論会の時間を設けたが、参加教員の中から、90 分間の授業の配分や流れを見たいため、討論会の時間を別に設けて欲しいとの意見が出されたことが報告された。
（3）ＦＤワークショップの結果について
菊澤部会長から資料 3 に基づき報告がなされ、それぞれのワークショップの報告書については、インターネットのサイトに掲載されていることが報告された。開催時期が卒業論文指導の時期と重なり生物資源学部の教員が参加困難となったことおよび小浜での開催ができなかったことについては、来年度対処していくことが報告された。
委員から､今後は開催日程を早めに決定し周知すべきとの意見が出された｡菊沢部会長から、開催日程を学科単位で調整して決定すること、学内での研修は開催時間をできるだけ短くすること、研修内容を大学教員向けに構成すること等、今後の検討課題が提案された。
（4）ＧＰフォーラムなどへの参加報告について
菊澤部会長から資料 4 に基づき報告がなされた。事務局および委員から、ＦＤ研修フォーラムでの参加配付資料を他の教員が閲覧できるよう 1 箇所に集めることが提案され、情報センター内に閲覧場所を設置することで検討していくこととした。
（5）その他

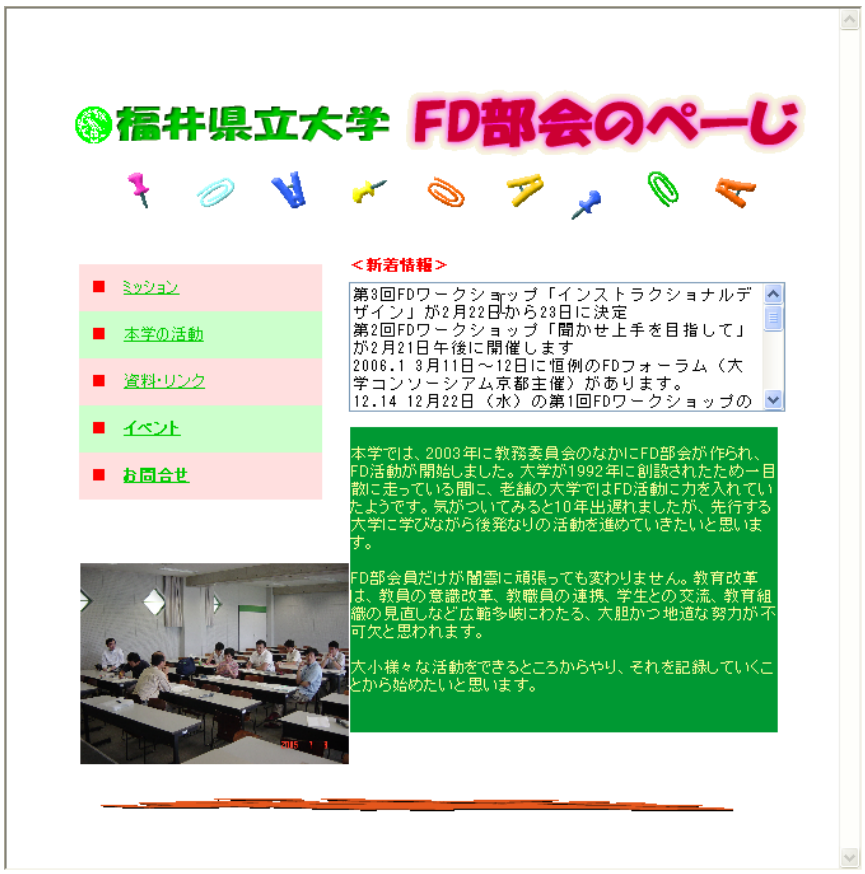
3　審議・協議事項
（1）授業評価の公開基準について
日弄委員および菊澤部会長からこれまでの経緯が説明され、新宮委員から経済学部教授会にて出された意見が報告された。審議の結果、平成１７年度後期については、前回ＦＤ部会で提案した基準から変更し、平成１６年度前期と同じ基準に戻ることが決定された。結果の公開・検証方法等、今後の方針については、授業改善におけるＦＤ部会の役割を含めて、来年度以降検討していくこととした。
（2）大学実践取組について
新宮委員から資料 6 に基づき説明がなされ、大学改革実践プログラムのＣ-７およびＣ-１９の年度内取組計画についてＦＤ部会案の取りまとめがなされた。GPA 制度、CAP 制度について導入の可否が検討されたが、議論が十分でないまま、導入の可否を決定するのは拙速であるとの見解から、結論は先送りにされた。今後も各部局ごとでも導入の可否について議論することになった。

（３）平成１７年度ＦＤ活動成果報告書作成について
菊澤部会長より資料７に基づき説明がなされ、活動成果報告書の執筆分担が決定された。報告書の内容は本学教員向けとすることが確認された。
（４）平成１８年度ＦＤ活動計画について
　平成１８年度のＦＤ活動計画について下記のとおり決定された。
・新任研修について
本年度同様総務課主催の事務手続き等に関するオリエンテーションの中で菊澤部会長からＦＤに関する説明を行うこととした。委員から、本年度新任研修には、小浜キャンパスの新任教員は参加できなかったため、今後はＴＶ会議室等を利用して行って欲しいとの意見が出された。
・ＧＰの応募について
　教育ＧＰ、現代ＧＰの応募について、各学部ごとに応募の可能性について意見を集約することとした。
（５）その他
　これまで、ＭＬにより審議されてきた内容については、決定事項があいまいになっていたため、今後はそれらを明確にすることとした。さらに、ＦＤ部会および教務委員会との位置付けについても、これまで混乱が生じていたため、「ＦＤ部会で提起された事項については、ＦＤ部会で各部局の意見を集約し、その結果を教務委員会で審議し、決定する」という位置付けを来年度の教務委員会の中で明確にしていくこととした。
　また、委員から県大ホームページの学内向け情報のトップページに授業評価アンケート結果へのリンクを貼って欲しいとの意見が出され、検討を行うこととした。

1.2. FD サイトと資料棚

FD 部会では、速報性と情報の蓄積を目的として、2005 年 7 月より、FD 部会のホームページ（以下、FD サイトという）を運営している。本学ウェブ・サイトのトップページの「大学の取組み」から「ファカルティ・ディベロップメント」を経て入ることができる。以下に、FD サイトのトップページ及びサイトマップを示す。この中で、授業評価の結果などは、学内の専用サイトに置いたので学外者には見えない。講演や研修で使用した資料は、講師の許可を得て pdf の形でサイトに置いている。個人利用には問題はないので利用されたい。

また情報センター 1 階閲覧室の入口右側の棚に、FD 資料コーナー（写真、科学研究費関連資料の右側）を設けた。ご利用願うとともに、FD 関連資料等があれば、ご提供下さい。



FD サイトの
トップ・ページ

サイトマップ　アドレス：http://www.s.fpu.ac.jp/FD/

- ミッション
- 本学の活動
  - FD部会
    - 名簿
    - 部会の議事録
  - 授業評価
    - 2004前期と後期、2005前期と後期の結果
    - 2005年度授業評価実施に関する経緯
      - 設問と回答用紙
  - 授業公開
    - 2005年前期　結果
    - 2005年後期　結果
      - 公開授業リスト
      - 実施案内
      - 実施マニュアル
      - 検討会調査票
      - 結果
  - FD研修
    - 一覧
      - 第1回FDセミナー
      - FDワークショップ(1)
      - FDワークショップ(2)
      - FDワークショップ(3)
      - GPフォーラム参加報告
      - 金沢大コアカリキュラム参加報告
      - その他案内
- 資料リンク
  - 文部科学省GP関係
    - GPナビ等
    - フォーラム参加報告
    - 公募書類
    - 応募書類
  - 本学の資料
    - 授業履修科目数データ
    - 授業評価結果
  - 他学の資料
    - 北海道大学、金沢工業大学、信州大学、大阪府立大学
    - 大学コンソーシアム京都
    - メディア教育開発センター
- イベント
  - 一覧
- お問合せ

2. 授業評価

2.1. 2005 年度前期

2.1.1 指針

設問内容は、大学改革実践プログラム取組事項に対応するためオフィスアワー利用に関する設問を追加したが、次頁のとおり基本的に 2004 年度後期のアンケートを踏襲した。

2.1.2 方法と結果

・実施期間: ７月１５日（金）～７月２８日（木）

・対 象 者 : 全教員（非常勤講師を含む）

※非常勤講師の科目については、FD 部会長名で授業評価を実施する旨の文書を発送し、非常勤講師の承諾が得られた科目について実施する。

・対象授業：原則として全ての講義科目

※事務局に実施する授業名、実施日を事前に届け出るものとする。

・実施方法：原則マークシート方式とする。(1)授業時間終了１５分前に、 (2)対象者が授業評価実施の趣旨説明等をした後、(3)対象者が指名した学生に、(4)調査票を配布させた後、退室、(5)受講学生にその場で記入させた後回収させ、(6)教務課（小浜事務室）に提出させる。

※ 「１５分」は対象者の判断で延長、短縮できる。

※オムニバス授業については、教員個人に関する質問（質問 4-6）は回答の必要無しとした。

・結果等の公開：以下の項目について学内 LAN 内のウエブページ（http://w3inside.fpu.ac.jp/kyomu/tyousa-h17/hyoka-top.html）にて公開した。

(1)全体集計結果（平成 16 年度後期試行時に同じ）

(2)個別授業ごとの結果は、公開について同意が得られた教員のみ公開とした。(授業名、教員名、質問ごとの平均点)

※調査票その２（自由記述欄）への記載内容は公開せず、担当教員にのみ開示した。

(3)結果（自由記述欄の記載内容を含む）を受けての教員の感想・コメント

※評価結果は担当教員のみに開示し、評価に対するコメントは E-mail などで事務局に提出とした（期日指定)。

・担当教員への評価結果の開示内容：

(1)全集計表（平成 16 年度後期試行時に同じ）

(2)担当授業の質問ごとの平均点

※希望があれば担当科目の集計データ（エクセルファイル）を閲覧可能

(3)調査票その２（自由記述欄）

※調査票その２（自由記述欄）については、感想・コメントの提出後、事務局に返却した。(期日指定)

―検討項目－

1) 授業評価の実施期間を 3 週間へ延長。

前期は従来どおり２週間で実施。後期までに検討。

2) 質問項目の点数化（数値を公開することを前提）

（授業評価調査票）

2005 年度前期調査票（表頁）

2005 年度前期調査票（裏頁）

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマークしてください。

質問1　週1コマで行なう通常の15回授業を授業A、週2コマの30回授業を授業Bとして、この講義にどれくらい欠席しましたか？

①3割（授業Aでは5回、授業Bでは10回）以上欠席　②2割（授業Aでは3～5回、授業Bでは5回）程度欠席　③1割（授業Aでは1～2回、授業Bでは3回）程度欠席　④ほぼ全部出席

質問2　授業の予習や復習をしましたか？

①全くしなかった　②あまりしなかった　③時々した　④毎回した

質問3　授業はどの程度、理解できましたか？

①ほとんど理解できなかった　②あまり理解できなかった　③おおむね理解できた　④十分に理解できた

質問4　授業の速度はどうでしたか？

①速い　②やや速い　③ちょうどよい　④遅い

質問5　先生の授業の方法（話し方や板書など）はどうでしたか？ 不備な点は質問15（自由記述欄）で具体的に記載してください。

①不適切　②やや不適切　③まずまず適切　④適切

質問6　授業に対する先生の積極的な取り組みや工夫を感じましたか？

①感じなかった　②あまり感じなかった　③やや感じた　④感じた

質問7　この授業によって得たものはありましたか？

①得るところは全くなかった　②あまり得るところはなかった　③少しは得るところがあった　④得るところが多かった

質問8　この授業によって授業に関連する学問分野への関心は高まりましたか？

①高まらなかった　②あまり高まらなかった　③少し高まった　④高まった

質問9　教室環境（照明、空調、マイク音声、書画カメラ、パソコンの調子など）はよかったですか？ 不備な点は質問15（自由記述欄）で具体的に記載してください。

①不備が多かった　②不備はある程度あった　③まずまずの環境だった　④快適な環境だった

質問10　この授業を友人や後輩に推奨したいですか？

①推奨しない　②どちらかと言えば推奨しない　③どちらかと言えば推奨する　④推奨する

質問11　この授業を総合的に評価してください。

①良くない　②あまり良くない　③まずまず良い　④良い

本学では、シラバスのオフィスアワー欄にあらかじめ記載された時間帯に科目の担当教員の研究室を訪れ、質問や相談などコミュニケーションできる機会を設けています。このオフィスアワー制度に関する次の質問に答えてください。

質問12　この講義に関して、オフィスアワー制度を利用しましたか？

①利用した　②利用しようとしたが、できなかった　③利用しなかった

質問13　質問12で3と答えた人は、その理由を次の中から一つ選んでください。

①授業中や直後に質問等を行なっているから　②メールやWebCTなどを利用しているから　③自分の都合の良い時に、質問できる（または質問したい）から　④質問や相談がなかったから　⑤その他

質問14　このオフィスアワー制度の改善すべき点や利用しなかった理由などを自由に書いてください。

質問15　受講しての感想などを自由に書いてください。

ご協力ありがとうございました

点数化は、前回の授業評価から既に実施。前回と同様、教員が公開を承諾した授業に限り、評価結果を公開するとした。

3) 結果の開示対象

授業評価結果を学外に開示している大学もあるが、授業評価本来の目的はあくまで授業改善であるため、開示対象は学内（教職員および本学学生）に限定することとした。

―今後の課題・その他―

1) 今回から非常勤教員の授業も評価の対象になったが、今後契約の際に評価実施を告知し協力を正式に依頼すべき、非常勤教員への対応のルートやルールを決めておくべきとの意見があった。
2) 集計結果について web 上に公開。参加率が低いとの意見があったが、助手や前期には授業をもたない教員を含むこと、申告用紙の集計結果であるため申告なしに参加した教員がいることに留意する必要がある。
   また、公開したリンクの場所が分かりにくいので、教員・学生が簡単にアクセスできるよう改善すべき。
3) 参加数を参加者数に訂正。教員数に注釈として、「助手を含まない」（対応する数字に変更）および「前期授業をもたない教員を含む」とする。
4) 2 週間後に回収される評価用紙を整理する際には、開講科目数と参加科目数およびその割合をいれる。

2.1.3　全体集計

平成17年度前期 学生による授業評価全体集計結果

		質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9	質問10	質問11
全体平均		**3.3**	**1.9**	**2.6**	**2.6**	**2.9**	**3.0**	**3.1**	**2.9**	**3.1**	**3.0**	**3.1**
学部学科別	**経済学部**	**3.0**	**1.8**	**2.5**	**2.6**	**2.8**	**2.9**	**2.9**	**2.7**	**3.0**	**2.9**	**2.9**
	経済学科	3.0	1.8	2.5	2.6	2.8	2.9	2.9	2.7	2.9	2.8	2.9
	経営学科	3.0	1.8	2.5	2.6	2.8	3.0	2.9	2.7	3.0	2.9	3.0
	生物資源学部	**3.4**	**2.1**	**2.7**	**2.7**	**2.9**	**3.1**	**3.2**	**2.9**	**3.2**	**3.0**	**3.1**
	生物資源学科	3.4	2.1	2.7	2.7	3.0	3.1	3.1	2.9	3.2	3.0	3.2
	海洋生物資源学科	3.4	2.1	2.7	2.6	2.8	3.0	3.2	2.9	3.2	3.0	3.1
	看護福祉学部	**3.5**	**2.0**	**2.7**	**2.6**	**3.0**	**3.2**	**3.3**	**3.1**	**3.2**	**3.2**	**3.2**
	看護学科	3.6	2.1	2.7	2.6	2.9	3.2	3.3	3.1	3.2	3.1	3.2
	社会福祉学科	3.4	1.9	2.8	2.7	3.1	3.3	3.3	3.1	3.1	3.2	3.3
	科目等履修生・聴講生	**3.7**	**2.1**	**3.1**	**2.7**	**3.2**	**3.1**	**3.1**	**3.1**	**3.3**	**3.2**	**3.4**
入学年次別	**97生**	**1.2**	**1.7**	**0.9**	**0.8**	**1.0**	**0.8**	**1.1**	**1.0**	**0.9**	**0.9**	**0.9**
	98生	**0.0**	**1.3**	**0.0**	**0.0**	**0.0**	**0.0**	**0.0**	**0.0**	**0.0**	**0.0**	**0.0**
	99生	**0.8**	**1.8**	**1.0**	**0.8**	**1.2**	**1.3**	**1.4**	**1.2**	**1.5**	**1.4**	**1.4**
	00生	**0.6**	**1.2**	**0.6**	**0.6**	**0.7**	**0.7**	**0.7**	**0.6**	**0.7**	**0.7**	**0.8**
	01生	**2.7**	**1.5**	**2.3**	**2.1**	**2.6**	**2.5**	**2.9**	**2.5**	**2.8**	**2.6**	**2.8**
	02生	**2.2**	**1.5**	**2.1**	**2.1**	**2.4**	**2.5**	**2.5**	**2.3**	**2.4**	**2.4**	**2.5**
	03生	**3.4**	**2.0**	**2.7**	**2.7**	**2.9**	**3.2**	**3.2**	**3.0**	**3.1**	**3.1**	**3.2**
	04生	**3.3**	**1.9**	**2.7**	**2.7**	**3.0**	**3.1**	**3.1**	**2.9**	**3.1**	**3.1**	**3.1**
	05生	**3.4**	**2.0**	**2.6**	**2.6**	**2.9**	**3.0**	**3.1**	**2.8**	**3.1**	**2.9**	**3.0**
部局別	**経済学部**	**3.0**	**1.7**	**2.4**	**2.5**	**2.7**	**2.9**	**2.9**	**2.7**	**2.9**	**2.8**	**2.9**
	生物資源学部	**3.4**	**2.1**	**2.6**	**2.6**	**2.8**	**3.0**	**3.1**	**2.9**	**3.1**	**3.0**	**3.1**
	看護福祉学部	**3.7**	**2.1**	**2.8**	**2.6**	**3.1**	**3.3**	**3.4**	**3.3**	**3.3**	**3.3**	**3.3**
	学術教養センター、情報センター	**3.1**	**1.9**	**2.7**	**2.7**	**2.9**	**3.0**	**3.0**	**2.8**	**3.1**	**2.9**	**3.0**
規模別	**100人以上**	**3.2**	**1.7**	**2.5**	**2.6**	**2.8**	**3.0**	**3.0**	**2.8**	**3.0**	**2.9**	**3.0**
	60人以下	**3.4**	**2.2**	**2.7**	**2.6**	**2.9**	**3.1**	**3.2**	**2.9**	**3.1**	**3.0**	**3.1**

＜全体集計結果の見方＞

○質問１から11は、質問１から11に対応しています。

〔共通〕
　質問１から11の回答選択肢「１、２、３、４」をそれぞれ「1点、2点、３点、４点」と得点化し、項目ごとの全回答者の得点合計を求めました。その合計を項目ごとの回答者数で割った平均値がそれぞれの数値です。

〔個別〕
　全体平均　…全回答者の平均
　学部学科別…学生の所属（どの学部学科の学生か）に着目し、学生の所属ごとに回答をまとめ平均値を出したもの
　入学年次別…（学部学科の枠を越え、）学生の入学年次に着目したもの。集計したもの。西暦年の下２桁を表示
　部局別　　…授業の開講部局（その授業がどの部局の授業として開講しているか）に着目したもの
　規模別　　…授業が行われた教室の収容人数に着目し集計したもの

2.2. 2005 年度後期

2.2.1 指針

これまでの授業評価ではその基本方針が明確にされていなかった。授業評価の目的を明確にするため、授業評価の定義に踏み込んで議論を行った。授業評価の基本方針として、受講者の一般教養・専門的能力修得に必要な授業全般の改善を目的とし、その目的達成のための活動指針について定めた。

この基本方針に従い、授業評価に必要なものとして、1）授業に関する受講生の意見の収集（アンケート実施)、2）評価結果の解析（問題点の抽出と授業改善の検証)、3）評価結果の公開（評価結果に基づく授業改善要求）を挙げた。

さらに授業評価アンケートの設問設定、実施方法、結果公開方法に関する議論を進めた。まず、能力修得の達成手段として適切かどうか、全学で共有可能か、という観点から設問を設定すべき項目を列挙し、項目ごとにバランスよく配置されるように具体的な設問の案を作成していった。設問数については、授業や学生にかける負担を最小にするという観点と、授業評価に必要であるという観点の２つのバランスをとる形で決めることにした。そうした負担を直接定量することは困難なため、大学の授業評価の現状について調査し、これを参考とすることにし、結果として２０問を超えるところは少ないことが分かったので、設問を最終的に２０問程度に絞り込むことを目標とした。

授業評価結果は教育効果と抱き合わせて経年変化をみることで改善への足がかりとなる。長期の授業評価に耐えうるよう、学内の合意を得ながら設問を吟味した。また調査対象を、非常勤を含む原則全科目に拡大した。大学改革実践取組の一つとしてオフィスアワーの活用についての実態調査を授業評価のなかで実施した。以下、最終的に設定した基本方針・設問項目について詳細を記す。

–授業評価基本方針の設定–

大学の授業の目的は（広い意味での）高度な専門的能力を受講者に修得させることにあります。知識レベルや能力の異なる多様な受講生に対応して、高度な専門的能力を修得させるには様々な困難が存在します。しかし、その困難の原因として存在する問題点を顕在化し客観的に評価することは、多忙な教員にとって必ずしも容易な作業ではありません。

そこで、より良い能力修得機会を提供するのに必要な基本データとして、アンケートを実施し受講者の授業に対する意見を集約すること、及びこれらの意見を解析して授業に活用できるデータとして提供することが授業評価の目的ではないかと思います。さらに、受講者の立場から言えば、授業評価は授業に対する改善要求行使の一手段でもあり、教員と受講者の相互利益につながる活動であることが望まれます。

1．授業評価基本方針

1) 授業評価の目的：授業評価は、受講者の一般教養・専門的能力修得の向上に関わる授業全般の改善を目的とする。

2) 授業評価の活動：

(a) 授業評価アンケートは、受講者の授業に対する意見を集約し、より良い能力修得機会を受講者に提供するのに必要な基本データを収集するため、原則として全授業科目において実施する。

(b) 得られた評価結果は全ての教員に開示する。

(c) 評価結果を解析して得られるデータは、授業改善に活用するための必要に応じて教職員に提供する（教員評価のデータとはしない)。

(d) FD 部会では、将来にわたって特定の授業にのみ偏り、他の授業で関わる可能性がない項目の評価は原則として行わない。

2．評価実施方法に関する方針

1) 授業評価アンケート調査

(a) 設問設定の基本方針の提案

a-1) 能力修得達成の手段として適切かどうかという観点から必要な評価項目を決定する。

a-2) 全学で共有可能な評価項目について設問を設定する。

a-3) 教員や受講生への物理的・精神的負担が小さくなるように設問方法や設問数等に配慮する。

(b) 具体的な設問の設定については 9 月を目処に原案を作成、FD 部会に諮る。

(c) アンケート回答の方式や回答数については、教員・学生の負担が最小限となるよう他大学の FD などを引き続き調査し、取りまとめ提案する。(必要なら暫定措置として回答方法が適当かどうかアンケート調査する)

2) 調査結果解析

(a) 個々の設問に関する統計の取り方等については設問設定後に詳細を検討。

(b) 年度ごとに評価をまとめ、さらに授業科目ごとに経年変化についても評価結果の変動を取りまとめ改善の指標とする。

3) 教員への開示・一般公開

(a) 一般公開は、冊子の作成および Web 公開を通じて行う。

(b) 評価結果は、原則として教員の了承を経て全て一般公開するが、教員または受講者が希望し、評価にそぐわないなど合理的な理由が認められる場合は非公開を認める。

(c) 結果の公開は出来る限り速やかに行う。

4) 改善要求・検証（他の FD 活動との連携）

−アンケート項目の設定−

1) 受講者自身への設問

(a) 出席回数

(b) 受講に対する準備　−予備知識、予習・復習、目的の理解など

(c) 質問したかどうか

(d) 自立度

(e) オフィスアワー制度の利用

2) 授業実施方法に関する設問

(a) 計画性（シラバスの適切性や達成度を含む）

(b) 積極性・熱意

(c) 速度

(e) 授業進行方法

(f) 公平性

(g) 質問への対応

3) 授業環境に関する設問

(a) 教材

(b) 講義室の装備・環境

(c) 資料の整備

4) 授業内容に関する設問

(a) 難易度

(b) 理解度・達成度

(c) 満足度
(d) 授業内容の有用性　－興味や関心が深まったか、将来役に立つと思うか、
最新の情報が授業に反映されているか

5) 総合評価
(a) 総合評価
(b) 改善要求

2.2.2 問題点の検討

2.2.1 の基本方針とアンケート項目、及び提案する設問について行った議論は以下の通りである。

A）今回提案の設問について
【この授業に毎回出席しましたか？】
○この設問に関しては以下のようなネガティブな意見が挙がった。
・授業によってコマ数が違うので欠席コマ数を問うような質問は使えない授業がある。
・必須で 2/3 の出席が必要といっているのだから必要ない。
・欠席してもよいといっているように思えるのでいらない。
・正直に答えるか疑問である。
○この設問は、出席回数とまじめに意見を返す学生とはある程度相関するということを前提に、学生に自分がどのような学生かの自覚を促すことも含めて、回答の信頼性を高めようという意図と、「評価のときのみ出席して、回答する学生もいた。」ということを防ごうという意図がある。
○コマ数が違う授業に配慮して、「15 回授業では 5 回、30 回授業では 10 回以上欠席・・・」などのように具体例を挙げて選択肢を設定しようとしたが、全ての授業で何回欠席したかを正確に覚えている学生がどれだけいるか疑問であり、授業評価の参考項目（点数評価には加えない）ということもあり、選択肢 3 つに絞って簡略化することとした。
【この授業でわからなかった箇所について担当教員に質問しましたか？】
○「質問の余地がなかった」を追加してはどうかという意見があったが、教員側の見地（完璧な授業をしたというような）が少なからず入った意見のようにも見える。質問をしなかった理由について特別なものがあれば、自由記述に記入してもらえばよいと思われる。
○以下のような選択肢を提案したが、選択肢の②にポジティブな人とネガティブな人が混ざっていて不鮮明という意見があったため、現行案に改訂した。
① 聞きたいことはあったが質問しなかった　②　質問が思いつかなかった
③　ある程度質問した　④　必ず質問した
【質問しやすい雰囲気でしたか？】
○最近、教員のアカデミックハラスメントについていろいろと議論されており、特に実験・実習・ゼミなどの少数講義では学生に与える影響が大きいため、この設問を設ける必要があると思われる。
【この授業内容に対する自分自身の学力到達度に満足していますか？】
○理解度に関する設問と重複ではないかとの指摘があったが、確かに理解度と満足度に正の相関が強いとすると重複と言える。本学の大多数の生徒については相関するのが普通と考えてよいと思われるので、どちらか一方でも大きな問題にはならないかもしれないが、本当にそうかどうかは調べる価値があると思われる。その相関から外れた学生がどの程度いるのか、

つまり、理解できるがつまらないという学生や、面白そうだが分からないといった学生が多くいる場合にはやはり問題があると思われる。今回検証してみた上でどちらか一方でよいかどうかを判断すればよい。

B）前回までの授業評価や議論の中で浮上したが採択しなかった設問について
【この授業の基礎となることを高校や大学で学んだか？】
○教養・基礎段階の授業では、高校までの基礎知識の確認と再構築から行わないと、新しい知識を詰め込めないレベルの学生が少なくないというのが現状。もちろん個々の授業で対応するのが理想なので、（特に専門科目では）必要の無い質問かもしれないが、この点を抑えて授業をされていない授業があるのであれば根本的な点で改善する必要がある。
【授業の予習や復習をしたか？】
○無いと答える学生がほとんどで、アンケートしても意味が無いという意見があったが、学生に対して「予習・復習をするのは当然」というメッセージ効果は期待できる。
【私語等への対応により授業に集中できる環境、学びやすい雰囲気が作られたか？】
○教員へのメッセージ効果も期待できたため、候補として挙げた。
【授業の内容の分量、事前・事後課題の分量は適切であったか？】
○今後の授業をどう組み立てるか考える際に役立つと思われたため、候補として挙げた。
【成績評価の基準が明確であったか？】
○本学のシラバスに「評価基準」という項目があるので、大部分の授業はクリアできていると考えて良いと思われる。もしもっと明確・詳細な評価基準が必要ならば、シラバス作成時に各教員にそれを示すよう指示すればよいのではないか。
【授業の内容は、受講前に予想したものと比べて難しいと感じたか？】
○「難しい」か「易しい」に関わらず、「理解できた」か「理解できなかった」かが授業改善の基準となるように思われる。仮に「易しかったが理解できなかった」という学生が多かったとしたらより易しくせざるを得ないし、「難しかったが理解できた」という学生が多かったら易しくする必要はないため難易度を評価してもあまり授業改善に貢献しないのではないか。
○受講科目への先入観は科目の難易度として捉えられていることが多いと思われるので、授業によりそれがどのように変わるかを知るのは有用と考えられる。確かに理解度が授業改善の基準だが、どこが理解できなかった原因なのか、そしてそれは授業の改善で対応可能かどうかを知ることができるかどうかが鍵と思われる。難しいと指摘された部分を授業方法の改善で対応できる場合には問題ないが、心理的な影響でいくら優しくしたつもりでも理解が進まない例もある。概念を教えることが特に重要な化学や物理などを生物の学生に教えていると、成績が悪いわけではないのに「むずかしい」から「解るはずがない」とする学生がいる。とても難しくて解らないか、思ったより簡単だったのかを問うことで苦手意識や心理的な前提を確かめることは、改善すべきが授業の方法なのか、学習意欲の改善を目指す方向に内容を切り替えざるを得ないのかということを示してくれると期待される。
【この授業で学習した内容を将来役立てることができると思うか？】
○役立つものばかりを求めるのは問題であるとの指摘があった。役に立ったかどうかは後になってみないと分からない場合も多く、「関心が高まったか」というやや抽象的な表現の設問のほうが授業評価では判断がしやすいと判断し、置き換えることにした。
【この講義を友人や後輩に推奨したいか？】
○学生が講義の質をベースに回答してくれるとすれば、ある意味、授業に対する最も率直な印象がわかる設問かもしれないが、「出席を取らないから」とか「成績があまいから」という

不純な理由から「推奨したい」と回答する学生もいるかもしれず、正確な評価が得られない可能性がある。学部によってはほとんどの科目が必須であるため、この設問は意味がないという意見もあった。今回は見送りということにして、必要であれば自由設問で設定してもらい、要望が多いようであれば復活させることとする。
【シラバス記載の学習目標はどの程度達成できたと感じたか？】
○この設問は、「シラバス記載の学習目標」を把握できていない学生は答えられないため、「この授業内容に対する自分自身の学力到達度に満足しているか？」という設問に変更することとした。
【実験・実習・ゼミ形式の講義を受講した学生に対して】
○学生の自立性、協調性、計画性、発言力などがどの程度向上したかを設問に加える予定だったが、今回は設問数を限定するために、実行力についての設問のみに限定した。

C）その他
【成績評価の公平性や妥当性について】
○成績評価の公平性や妥当性についても学生がどのように感じているのか聞いてみたいが、アンケート実施時点ではまだ最終評価の結果が出ていないので、授業評価とは別の時期にアンケートをとる必要がある（あるいは「目安箱」で意見収集する）。
【中間評価の必要性について】
○年２回の授業評価だけでは現実の授業改善には結びつきにくいため、中間時期に別途小アンケートを実施し、当該授業の改善にすぐ役立てることが理想である。全体としての負担は増えるが、期末のアンケートの項目数も絞り込むことができるため、評価システムとしては効果的になる上に、実験・実習への対応もしやすくなると思われる。中間評価に関してはインターネットによる回答だけに限定するなど、負担の軽減を図る必要がある。
【設問に適切な選択肢が見当たらない場合】
○設問の選択を教員にさせないことに対する配慮として、「設問に適切な選択肢が見当たらない場合は特に答えなくても良い」という趣旨の文言を質問用紙に入れた場合、適当な選択肢がない場合に回答者を惑わせなくて済むというメリットがある反面、無選択の回答が増加する恐れがある。今回は、適切な回答がどうしても見あたらない場合は（０）をマークできるように選択肢を増やした。
【授業評価アンケートに関する設問】
○授業評価の実施方法、実施期間、設問数、設問内容について、学生の意見を収集する必要があるが、今回までは試行段階であり、設問項目や実施方法が確定するまでは学生の意見を仰ぐのは時期尚早と思われる。実際にきちんとした形で情報公開され、授業評価の結果がフィードバックされてから実施してはどうか。
○授業評価は学生の権利であり、本来学生主体でやるものだという意識付けをしていくことが重要になってくると思われるので、自主投票のような形で答えてもらう仕組みを考えるのも一手と思われる。この場合は、インターネット上の掲示板で答えてもらうという形が望ましいが、回収率を上げる工夫が必要であり、最初は義務づけることも必要かもしれない。

以上の議論を踏まえて最終的に決定し、実施に用いた質問要旨と回答用紙を次頁以降に示す。

2005 年度後期質問票（表頁）

福井県立大学 平成17年度 後期
授業に関する調査

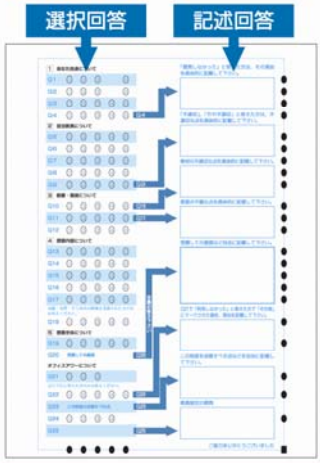
質 問 用 紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受講しているこの授業について、調査にご協力ください。

回答は、別紙回答用紙に記入してください。

表 面
あなたの入学年度、所属学部・学科を**マークシート記入**してください。

裏 面
選択回答の場合は**マークシート記入**を、**記述回答の場合は右側空欄に記述**してください



あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述してください。
ただし、Q１からQ19について、選択肢①～④の中に適切な回答がどうしても見当たらない場合は⓪をマークしてください。

1 あなた自身について

Q1 この授業に毎回出席しましたか?
①半分以上出席しなかった ②6-8割程度出席した ③ほとんど毎回出席した

Q2 この授業の目標や目的（シラバスに記載）についてどの程度知っていましたか?
①知らなかった ②漠然と知っていた ③明確に知っていた

Q3 この授業（課題・レポートを含む）に意欲的に取り組みましたか?
①意欲的ではなかった ②あまり意欲的に取り組まなかった ③ある程度意欲的に取り組んだ ④意欲的に取り組んだ

Q4 この授業でわからなかった箇所について担当教員に質問しましたか?
質問しなかった場合は、その理由を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。
①内容が理解できないので質問しなかった ②聞きたいことはあったが質問しなかった ③よく理解できたので質問しなかった ④質問したことがある

2005 年度後期質問票（裏頁）

2 担当教員について

Q5 授業に対する先生の積極的な取り組みや工夫を感じましたか？

①感じなかった ②あまり感じなかった ③ある程度感じた ④感じた

Q6 質問しやすい雰囲気でしたか？

①しやすい雰囲気ではなかった ②あまりしやすい雰囲気ではなかった ③ある程度しやすい雰囲気だった ④しやすい雰囲気だった

Q7 授業中の学生に対する態度は公平でしたか？

①不公平 ②やや不公平 ③まずまず公平 ④公平

Q8 先生の時間の使い方や授業の速度はどうでしたか？

①不適切 ②やや不適切 ③まずまず適切 ④適切

Q9 先生の授業の方法（話し方、板書、プロジェクターの使用、WebCTの活用など）はどうでしたか？また、不適切な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

①不適切 ②やや不適切 ③まずまず適切 ④適切

3 設備・環境等について

Q10 教材（教科書・配布資料・実習要綱・オリエンテーション資料など）は役立ちましたか？また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

①役立たなかった ②あまり役立たなかった ③ある程度役立った ④役立った

Q11 教室の環境や設備等（照明・空調・マイク音声・プロジェクター・パソコン・実験実習用機器類の調子など）に不備はありましたか？また、不備な点を回答用紙空欄に具体的に記載して下さい。

①不備が多かった ②不備がある程度あった ③まずまずの環境だった ④快適な環境だった

Q12 この授業の予習・復習やレポート作成に必要な資料は大学にありましたか？

①無かった ②あまり無かった ③まずまず揃っていた ④揃っていた

4 授業内容について

Q13 シラバスに含まれる情報は授業（予習・復習を含む）で役立ちましたか？

①役立たなかった ②あまり役立たなかった ③ある程度役立った ④役立った

Q14 講義はシラバスに沿って計画的に行われましたか？

①計画的ではなかった ②あまり計画的ではなかった ③ある程度計画的だった ④計画的だった

Q15 授業の内容はどの程度理解できましたか？

①理解できなかった ②あまり理解できなかった ③ある程度理解できた ④理解できた

Q16 この授業内容に対する自分自身の学力到達度に満足していますか？

①満足できなかった ②あまり満足できなかった ③ある程度満足できた ④満足できた

Q17 この授業に関連する学問分野への関心は高まりましたか？

①高まらなかった ②あまり高まらなかった ③少し高まった ④高まった

実験・実習・ゼミ形式の講義を受講した人に質問します。それ以外はQ19に進んで下さい。

Q18 この実験・実習・ゼミで、自分自身で考え実行する力が養われたと思いますか？

①思わない ②あまり思わない ③やや思う ④思う

5 授業全体について

Q19 この授業を総合的に評価してください。

①良くない ②あまり良くない ③まずまず良い ④良い

Q20 受講しての感想などを自由に書いて下さい。

本学では、シラバスのオフィスアワー欄にあらかじめ記載された時間帯に科目の担当教員の研究室を訪れ、質問や相談などコミュニケーションできる機会を設けています。このオフィスアワー制度に関する次の質問に答えてください。

Q21 この講義に関して、オフィスアワー制度を利用しましたか。

①利用しなかった ②利用しようとしたが、できなかった ③利用した

Q22 Q21で①と答えた人は、その理由を次の中から一つ選んでください。

①授業中や直後に質問等を行っているから ②メールやWebCTなどを利用しているから ③自分の都合の良い時に、質問できる（又は質問したい）から ④質問や相談がなかったから ⑤その他（理由を記述して下さい）

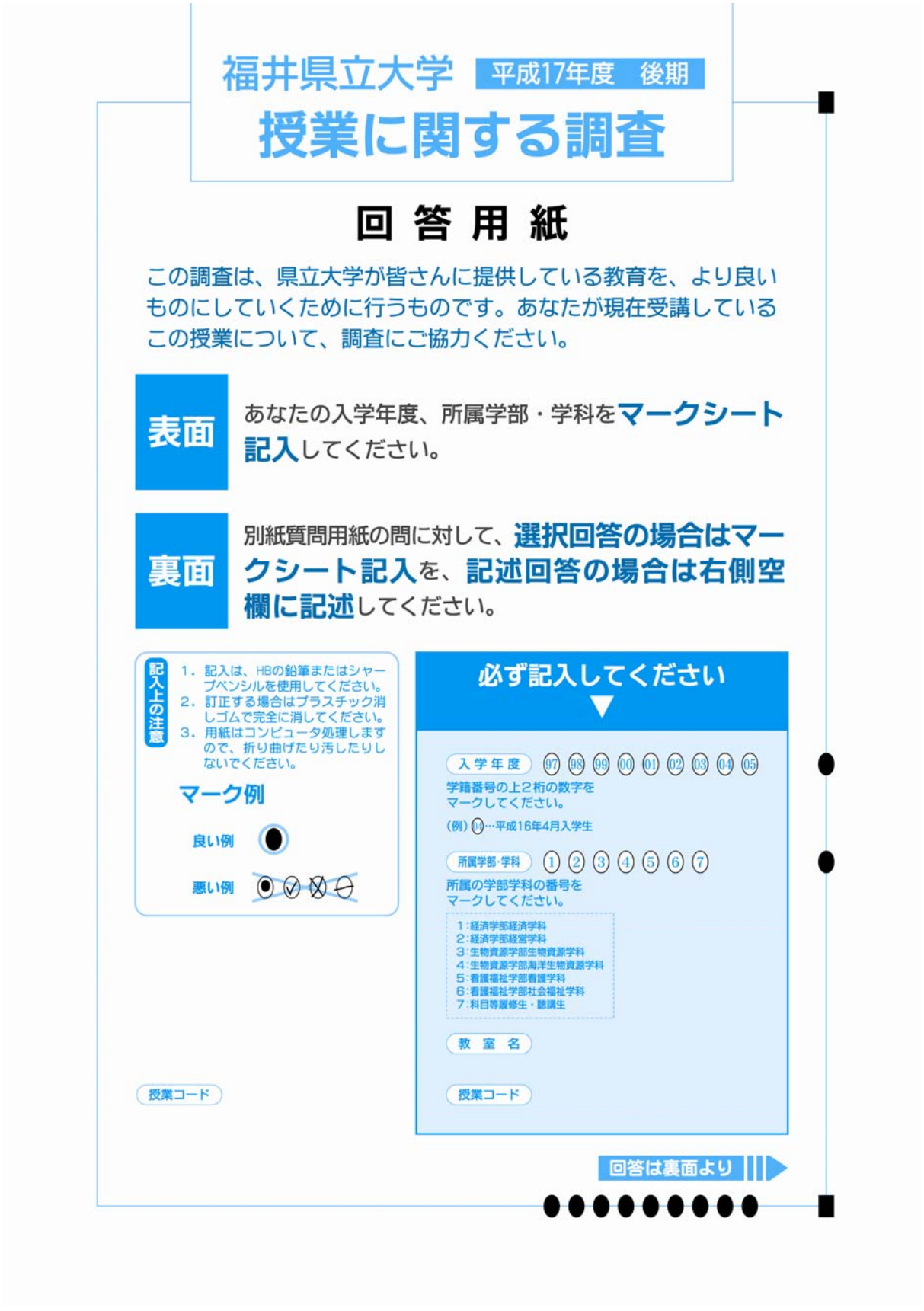
Q23 この制度の改善すべき点などを自由に書いてください。

Q24 教員設定の質問

① ② ③ ④

Q25 教員設定の質問

ご協力ありがとうございました



福井県立大学 平成17年度 後期

授業に関する調査

回 答 用 紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために行うものです。あなたが現在受講しているこの授業について、調査にご協力ください。

表面 あなたの入学年度、所属学部・学科を**マークシート記入**してください。

裏面 別紙質問用紙の問に対して、**選択回答の場合はマークシート記入**を、**記述回答の場合は右側空欄に記述**してください。

記入上の注意

1．記入は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用してください。
2．訂正する場合はプラスチック消しゴムで完全に消してください。
3．用紙はコンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例

良い例 ●

悪い例 ⊘ ⊗ ⊖

授業コード

必ず記入してください

入学年度 97 98 99 00 01 02 03 04 05

学籍番号の上2桁の数字をマークしてください。

（例）04…平成16年4月入学生

所属学部・学科 1 2 3 4 5 6 7

所属の学部学科の番号をマークしてください。

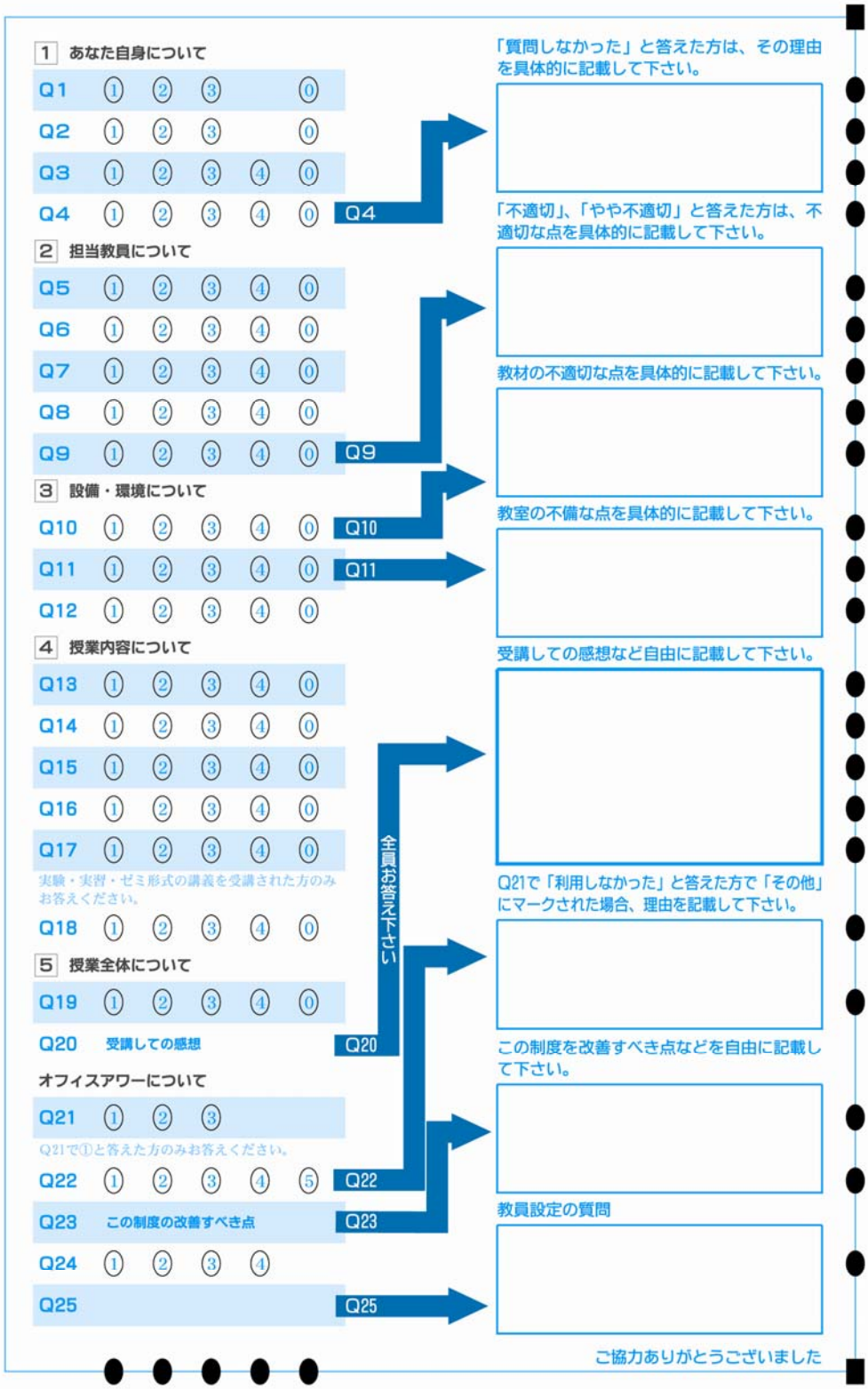
1：経済学部経済学科
2：経済学部経営学科
3：生物資源学部生物資源学科
4：生物資源学部海洋生物資源学科
5：看護福祉学部看護学科
6：看護福祉学部社会福祉学科
7：科目等履修生・聴講生

教室名

授業コード

回答は裏面より

2005 年度後期回答票（裏頁）



2.2.3 方法と結果

—実施方法作成の経緯—

1．議論した内容と結果

1） 実施期間

原則として全ての講義科目を実施対象として、実施期間を試験３週間前から１週間前までの期間とした。ところが、すでに、実施期間外に講義が終了したものがあり、そのような教員からの問い合わせがあった。

2） 実施方式

原則としてマークシート方式を採用した。なお、WebCT の使用の希望が出されたので、アンケート用テンプレートの使用と、所定のファイル形式での提出という条件付きで WebCT によるアンケートを可能とした。WebCT の回収率低下を懸念して、回収率が 50%未満の場合は用紙による授業評価を再度行うことが提案されたが、ダブルスタンダードになる恐れがあるとの指摘があり、見送ることとした。

3) 教員への開示および学内公開の時期

昨年度後期の授業評価結果の公表が遅くなった。リアルタイムに結果がでないと、授業改善に役立つ資料となりにくい。また、このようなことが続くと学生も協力する意欲が萎える恐れがある。そこで、後期はアンケート実施期間終了後２週間以内を目安として、集計後速やかに行うこととした。

4）授業評価の目的

FD 部会が目指す「学生による授業評価」は授業間の絶対評価が目的では無く、継続的な内容の改善が目的である。そこで、学生による授業評価、授業公開、FD 研修会と連携しながら、授業改善に役立つ資料となることを目標とした。

2．今後の課題

1) 実施期間

(追加案) 実施期間外の場合：当該期の前期に実施したアンケート設問に順ずる。但し、大幅な変更を施した場合のみ評価からはずす。

2) 成果の検証

授業評価結果がその後の授業にフィードバックされたかどうかを、教員と学生双方から検証する必要がある。また、授業評価の経年変化を指標とし、一定期間または一定程度改善されない授業に関しては何らかの措置をとる必要がある(この期間や程度については今後の評価結果の解析に基づいて適当な時期に話し合う必要がある)。

3) 授業公開、FD 研修会と連携

今後、検討が必要である。

—アンケート実施に関する反省点—

1) 学年や所属学部の記載が不十分な回答が多かったので、実施方法の事前説明や回収担当の学生への周知を徹底する必要がある。

2) 回答が該当しない場合の選択肢 0 を設けたにもかかわらず、無記入のものが多かった。無記入の回答の取扱いについて検討する必要がある。また、選択肢 0 についても説明を周知徹底するようにしなければならない。

3) 実験・実習・ゼミの定義があいまいなので、この点を明確にすべき。

4) 実施期間を３週間としたことで早めに実施を終える授業が多くなった。本来の主旨に合

わないのではないか。

2.2.4 全体集計

平成 17 年度後期の学生による授業評価について、前期と同様に、学科別、入学年次別、部局別、授業規模別に集計した結果を次ページの表に示す。

また、前期と後期の実施状況を比較して、次にまとめた。

	前　　期	後　　期
実施期間	平成17年7月15日(金) ～7月28日（木)	平成18年1月23日（月） ～2月10日（金)
参加教員数（*)	(人) 157 （30）	(人) 152 (31)
実施授業数	248	296
調査票回収枚数	(枚) 8,655	(枚) 8,010
コメント公開教員数	(人) 103	(人) 7(3月27日現在)

(*) 参加教員数には、オムニバス授業の全教員を含む。
（ ）内の数字は、うち非常勤講師数。

集計グループ(集計数)	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
全体平均 (7967)	**2.69**	**2.15**	**3.03**	**2.83**	**3.31**	**2.95**	**3.51**	**3.22**	**3.21**	**3.20**	**3.23**	**3.00**	**2.81**	**3.17**	**3.03**	**2.87**	**3.12**	**3.30**
学部学科別 (7967)																		
経済学部 (3659)	2.59	2.15	2.96	2.75	3.26	2.86	3.48	3.18	3.15	3.14	3.19	2.92	2.80	3.12	2.95	2.80	3.03	3.26
経済学科 (1904)	2.62	2.16	2.97	2.73	3.27	2.82	3.49	3.18	3.16	3.13	3.18	2.94	2.81	3.12	2.95	2.81	3.03	3.28
経営学科 (1755)	2.57	2.15	2.94	2.77	3.25	2.90	3.48	3.19	3.15	3.15	3.19	2.89	2.80	3.13	2.96	2.79	3.03	3.23
生物資源学部 (2111)	2.75	2.18	3.05	2.84	3.27	2.95	3.51	3.23	3.20	3.20	3.28	3.03	2.76	3.20	3.03	2.87	3.10	3.21
生物資源学科 (1107)	2.77	2.26	3.06	2.84	3.32	2.97	3.57	3.30	3.30	3.24	3.33	3.12	2.84	3.25	3.10	2.97	3.15	3.21
海洋生物資源学科 (1004)	2.73	2.09	3.04	2.84	3.22	2.93	3.44	3.15	3.09	3.16	3.22	2.93	2.66	3.14	2.96	2.76	3.03	3.21
看護福祉学部 (2166)	2.78	2.11	3.12	2.96	3.42	3.09	3.56	3.28	3.31	3.30	3.25	3.10	2.88	3.23	3.13	2.96	3.27	3.52
看護学科 (1253)	2.79	2.09	3.10	2.88	3.38	3.01	3.53	3.25	3.30	3.30	3.29	3.12	2.88	3.25	3.08	2.92	3.21	3.45
社会福祉学科 (913)	2.76	2.13	3.15	3.07	3.46	3.21	3.60	3.32	3.33	3.29	3.18	3.06	2.88	3.21	3.21	3.02	3.34	3.58
科目等履修生・聴講生 (31)	2.87	2.39	3.32	2.87	3.70	3.48	3.84	3.60	3.74	3.60	3.52	3.14	3.35	3.69	3.32	3.30	3.58	—
入学年次別 (7967)																		
97生 (6)	2.67	2.33	3.00	3.00	3.67	3.33	4.00	3.33	3.33	3.67	3.33	3.33	3.33	3.33	3.67	3.67	4.00	—
98生 (6)	2.00	1.67	3.00	1.00	3.00	2.00	3.00	2.00	2.00	4.00	3.00	—	2.00	3.00	2.00	2.00	4.00	—
99生 (17)	2.50	1.59	3.00	3.50	3.67	3.17	3.83	3.33	3.33	3.17	3.17	2.67	2.25	3.60	2.67	2.33	2.83	—
00生 (19)	2.58	2.06	2.89	3.06	3.26	2.47	3.61	3.11	3.00	3.44	2.94	2.63	2.58	3.21	2.95	2.63	3.28	3.14
01生 (194)	2.40	2.00	2.99	2.78	3.13	2.66	3.42	3.06	3.10	3.13	3.41	3.01	2.67	3.24	2.82	2.68	2.89	3.40
02生 (354)	2.70	2.10	3.20	3.22	3.47	3.12	3.68	3.27	3.33	3.25	3.13	2.88	2.72	3.12	3.20	2.94	3.30	3.33
03生 (969)	2.69	2.25	3.07	3.02	3.43	3.12	3.56	3.21	3.27	3.27	3.19	3.08	2.86	3.20	3.12	2.95	3.27	3.42
04生 (2775)	2.70	2.13	2.98	2.79	3.31	2.90	3.49	3.21	3.20	3.21	3.17	2.94	2.78	3.16	3.00	2.84	3.09	3.15
05生 (3627)	2.69	2.15	3.04	2.77	3.27	2.94	3.50	3.24	3.20	3.17	3.28	3.04	2.84	3.18	3.01	2.87	3.09	3.34
部局別 (7967)																		
経済学部 (1970)	2.61	2.18	2.92	2.72	3.24	2.78	3.47	3.15	3.12	3.12	3.13	2.89	2.79	3.11	2.92	2.77	3.02	3.25
生物資源学部 (1333)	2.79	2.19	3.07	2.80	3.28	2.92	3.52	3.22	3.21	3.23	3.28	3.06	2.75	3.26	3.01	2.85	3.12	3.17
看護福祉学部 (1475)	2.79	2.12	3.13	2.97	3.40	3.05	3.57	3.25	3.31	3.32	3.23	3.12	2.87	3.23	3.14	2.95	3.30	3.60
学術教養センター、情報センター (3189)	2.64	2.13	3.03	2.85	3.32	3.02	3.50	3.25	3.22	3.18	3.27	2.98	2.82	3.16	3.04	2.89	3.08	3.28
規模別 (7967)																		
100人以上 (4602)	2.63	2.08	2.93	2.63	3.26	2.79	3.51	3.20	3.16	3.13	3.19	2.96	2.79	3.16	2.95	2.81	3.04	3.60
60人以下 (3365)	2.77	2.23	3.16	3.09	3.37	3.17	3.51	3.25	3.28	3.29	3.28	3.05	2.85	3.20	3.13	2.95	3.22	3.27

アンケート実施授業率=283/347=81.6%
アンケート回答率=7685/16008=48.0%

＜全体集計結果の見方＞
集計数は回答された全てのアンケート(8071件)から学部・学科・入学年度の何れかが不明のデータ(61件)を除いたものです。
Q1からQ22は、アンケートのQ1からQ22に対応しています。
Q22の回答対象者は、Q21で①と回答した人のみを対象としていますが、Q21で①と回答せずにQ22に回答した人がいましたので、参考までに当該データをQ22･Rとして集計しています。

〔共通〕
質問1、質問2および質問21は、回答選択肢「1、2、3」をそれぞれ「1点、2点、3点」と得点化、
質問3～質問19および質問21は、回答選択肢「1、2、3、4」をそれぞれ「1点、2点、3点、4点」と得点化、
質問22は、回答選択肢「1、2、3、4」をそれぞれ「1点、2点、3点、4点」と得点化(回答選択肢「5」は得点化せず)、
質問に対して「該当なし」で回答された場合と無回答の場合、および質問22での回答「5」は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していません。
上記の得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値がそれぞれの数値です。
「—」の欄は有効回答が無かったことを示しています。

〔グループ別集計〕
全体平均 …全回答者の平均
学部学科別…学生の所属(どの学部学科の学生か)に着目し、学生の所属ごとに回答をまとめ平均値を出したもの
入学年次別…(学部学科の枠を越え、)学生の入学年次に着目し集計したもの。西暦年の下2桁を表示
部局別 …授業の開講部局(その授業がどの部局の授業として開講しているか)に着目したもの

3. 授業公開

授業公開とは、従来学生のみに公開されてきた授業を他の教員に公開し、授業の方法論についての授業後の検討会で意見交換することにより、参加する個々の教員の授業改善を目指すものである。

当初「公開授業」という呼称を用いていたが、この呼称は「オープンカレッジ（公開講座）」や「模範授業」と誤解されやすいので、「授業公開」か「授業参観」のいずれかとすることを議論した結果、前者に改めた。以下の記述では全て「授業公開」と記述する。2005 年度 FD 部会において授業公開を主に担当したのは田中求之助教授・津村文彦講師の両名である。

2004 年度後期における試行段階（2005 年 1 月 20 日, 宗教学, 津村文彦講師）を経て 2005 年度前期・後期に形式を変えながら実施した。2005 年度の授業公開に関するスケジュールは以下の通りである。

【2005 年度】

2005 年 7 月 8 日：	授業公開（情報システム, 田中求之助教授）・授業公開検討会
2005 年 12 月 2 日：	授業公開の基本方針・ガイドライン作成
2005 年 12 月 22 日：	【福井キャンパス】授業公開実施予定について周知、公開する授業を募集
2006 年 1 月 13-20 日：	【福井キャンパス】授業公開期間（12 コマの授業公開）
2006 年 1 月 30 日：	【小浜キャンパス】授業公開（水産資源学, 富永修助教授）
2006 年 1 - 2 月：	授業公開の報告を Web 上にて公開

3.1. 2005 年度前期

3.1.1. 概要

2005 年 7 月 8 日（金）2 限に「情報システム」田中求之助教授（L208）の公開授業が、公開授業の検討会が同日 3 限（L208）に開催された。形式は 2004 年度後期の試行段階と同じく、一教員の一コマの授業を「授業公開」として設定し、その授業の公開・参観と授業後の検討会を行った。

写真　前期授業公開（福井キャンパス）

(1) 授業公開：参観教員 19 名

授業前に教室入口で、「公開授業へ参加の教員の皆さんへ」（A4, 1 頁）という資料（田中求之助教授作成）が配布された。資料には、授業の概要、本日の講義の予定、予備知識などについて説明がなされていた。同時に「公開授業・調査票」が配布され、3 限の検討会に参加する人は検討会に持参、それ以外の人は退出時に提出か、e-mail で感想などを提出してもらうように指示があった。

（前期授業公開開催案内）

平成１７年７月４日

教員各位

教務委員会ファカルテイ・デイベロップメント部会
部会長 菊澤 正裕
担当委員 田中 求之・津村文彦

平成１７年度前期の公開授業を下記の要領で実施しますので、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

記

１ 授業
（１）日 時：７月８日（金曜日）２時限目（10:40-12:10）
（２）教 室：福井キャンパス Ｌ２０８教室　小浜キャンパス Ｍ２０８教室
（３）科 目：情報システム （経済学部・専門科目）
（４）担 当：田中求之助教授

２ 検討会
（１）日 時：７月８日（金曜日）３時限（13:00-14:30）
（２）場 所：福井キャンパス Ｌ２０８教室　小浜キャンパス Ｍ２０８教室

＊「情報システム」は、経済学部生向けに、パソコンやネットワークあるいは情報機器の原理・仕組みや有効な利用のための知識、あるいは情報関連業界の現状などを講義する科目です。７月８日は MP3 などのデジタル音楽データの圧縮原理、携帯オーディオプレイヤー、ネット音楽配信などを取り上げる予定になっています。当日は参加される教員向けの説明資料を用意する予定です。平均出席数 20-30 名の講義です。

公開授業について

●公開授業は、模範授業ではありません。
今年度から本格実施となった公開授業ですが、本学において、授業改善のためにどのような公開授業が必要で有効なのかについては、実際に公開授業を行いながら探っていく、というのが部会の基本的な立場です。公開授業は、理想の授業方法を示すためのものではありません。大学の教育に一つの理想の型などありえないでしょう。公開授業は、自分以外の授業に参加し、また授業の担当者を含めた検討会での議論を通じて、自分の授業を改善するためのヒントを得るための機会です。

●検討会にもぜひご参加ください。
お互いに刺激を受け、自分の授業の改善のヒントを得るには、授業を見るだけでなく、他の教員の皆さんと意見を交わすことが大切だと考えて、検討会を設けています。検討会は、公開授業担当者の批判の場ではなく、公開授業をもとに、お互いに良い授業の在り方について建設的な議論をするためのものです。是非参加してください。また、授業等で検討会に出席できない場合には、メール（宛先 fd@fpu.ac.jp）で公開授業の感想をおよせください。公開授業の概要、検討会で話し合われた内容、あるいはメールで頂いた感想は、後日、報告書としてまとめて、教員のみなさんにお配りする予定です。

（前期授業公開調査票）

公開授業調査票

公開授業にご参加いただき、ありがとうございます。本日３限にL208教室にて行います公開授業検討会での参考にさせていただくため、本公開授業についてのアンケート調査にご協力ください。本公開授業終了後、または午後の検討会開始前にご提出ください。

なお、検討会に出席できない場合は、メール<ml-fd@fpu.ac.jp>でもご意見・ご感想を受け付けます。公開授業の概要・検討会で話し合われた内容、本調査票・メールでいただきましたご意見などは、後日報告書としてまとめ、教員のみなさんにお配りする予定です。

所属部局：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

（１）自分の授業に取り入れたい点、参考になった点について、お書きください。

（２）改善の余地があると感じた点について、お書きください。

（３）そのほか、気づいた点・疑問点などありましたらお書きください。

（４）今後の公開授業を行うにあたって、ご意見がありましたらお書きください。

公開授業への参加者は、学生 23 名、教員 19 名ほどで、学生のうち２−３名は授業開始後に遅れて出席。途中退席者は教員を除いていなかった。授業の開始は 10 時 40 分ごろ、終了は「きりがいいところ」で、11 時 55 分ごろであった。その後、学生に授業についての意見を求めたあと、３限に検討会が実施された。

(2) 検討会：参加教員 12 名

(a) 学生からの聞きとり

授業の最後に、学生に対して検討会への参加を呼びかけたところ、１名が参加。学生から意見を聞く間は、授業担当教員の田中先生は一時教室から退席した。学生の意見は以下の通り：

・前回の「情報科学」もそうだったが、「情報システム」は少し内容が難しい
・板書の量が多く、書き写すだけで精一杯
・学生が完全に受け身で、同じ調子で授業が進行するので、途中で飽きてしまう
・もう少し余裕を持って授業をして、途中余談などでクッションを入れて欲しい
・質問する機会がない

写真 前期授業公開検討会（福井キャンパス）

このような意見が出たが、「１人の学生からの意見なので個人差があるだろう。学生によっては難易度もちょうどいいという学生もいるはず」（情報 C・山川）という声が教員の側から出た。公開授業についても、学生からの意見の聞きとりは必要だろうが、そのやり方などはもう少し検討する余地がありそうである。

(b) 検討会の議論より

公開授業の際に配布した「公開授業・調査票」を参照にして議論が進行した。１つの項目について多様な意見が入り交じっているので、内容ごとに分類して以下まとめて記述する。なお発言の順序は編集のなかで入れ替わっている部分がある。

I. 授業の構成

・前回までのあらすじと繋がりが明確で、導入部分が良い（海洋・神谷）
・最初にポイントを示して、授業の流れを示すようにするとより分かりやすくなる（海洋・神谷）
・内容も構成も非常にわかりやすい。ただ最初にポイントを示してもらうと全体の流れがもっとわかりやすくなった（学教Ｃ・片山）
・ときどき余談などを入れて、緊張を解くようにしたらどうか（経営・木野）
・全体の授業の構成のなかで、今回の授業のコマがどこに位置づけられているかをいかに示すかというのは考えないといけない。（経済・清水）
・筋道だっていて非常にわかりやすいが、簡略化することで話がおおざっぱになるというリスクもある。だが逆に、詳しく説明すればするほど、結論が不透明になって学生にとっては消化しきれない可能性が高まることもあるだろう。前者のわかりやすくする方向

で田中先生の授業は非常に良く構成されていた（経済・清水）

・自分にとって興味のある内容だったのですごく面白く聞けたのだが、そうでない学生にとっては難しすぎるかも。板書だけではつまらないと感じる学生がいるかもしれないので、板書以外の手法も用いるとよい（学教Ｃ・亀田）

田中助教授「普段はもう少しリラックスした形で授業をしているので、自分の経験なども話せているが、今日は教員がたくさんいるので普段通りにはできなかった」「全体の授業のなかでどういった部分の話かというのは、４月に配布されたシラバスで示しており、その順番で話が進んでいる（ときどき時事ネタが入ってくることもあるが)。ただ指摘しておきたいのは、授業によっては、１回目から積み上げてきて初めて途中の回の話がわかるものと、毎回が独立した話でその回だけを聴講してもわかる授業との２種類があるだろうということ。この授業はその後者の方である。」

II. 板書・配付資料など

・説明が理路整然としていて、板書がとりやすい（海洋・神谷）

・黒板を４分割して利用するのが良い（経済・清水）

・板書は取りやすく、書いている間は話さないというのも、リズムがはっきりして良かった。板書の量が多いので、学生に対しては少し厳しいのかも。ただこれぐらいの分量の板書は取ってもらわないと甘すぎるという気もする（海洋・東村）

・板書は理想としては授業の最後に書くべきと教育実習のときに習ったが、今回の田中先生の授業では話が変わる毎にキーワードが書かれて効果的に説明が加えられており、非常にわかりやすかった。（看護・細谷）

田中助教授「板書をしながら授業をすることで、リズムを取りながら、学生の注意も引きつけるという意図がある。ただ「板書が多い」という指摘は以前からあり、漢字のミスが多いという自覚もある。この点については４月初めのころに、板書では誤字もあるので注意して欲しいというアナウンスを学生にしながら、注意して進めている」

・黒板の使い方が非常にうまい。詳しく書いたレジュメを渡すべきかどうかというのは以前から悩んでいる。これまでの経験では、「ここのところは大切だから書きなさい」というレジュメの評判が良い。（看護・畑野）

・語学と一般講義の二つを担当している。語学は積み上げなので、教科書と板書の両方を使って丁寧に進める。一方一般講義の方は、プリントを使って、重要なポイントのみ板書をするやり方を取っている。重要なポイントについては、「その理由は…」などと敢えて書かなかったり、穴埋め形式にしたりして、学生の興味を引きつけるようにしている（学教Ｃ・亀田)。

・それを読むだけでは理解できないような配付資料を作るよう心がけている。配付資料やノートは学生がテスト対策として用いるもの。だがそれだけを読んでもわからないようにして、自分で調べて初めて理解できるようなものにすると、学生の学習意欲を促進させられるのでは（生物・日並)。

・板書については以前から難しいと感じている。塾講師をやっていたときに板書を丁寧にするよう指導されていたため、現在でも板書は非常に丁寧にしてしまう。学生が疲れているときにはメモだけして帰り、元気なときにはもう少し集中して聞いてもらうというように、学生の状態に応じていろいろな受講の仕方が許容できるというメリットがある。

だが社会人の受講生から「社会に出たら、会議などでも丁寧な板書などはしてくれないのだから、今のうちから話を聞いて自分で板書を取るような訓練をさせるべきだ」という意見が出たことがあり、どうすべきかは今でも悩んでいる（経営・木野）

・自分の授業では、内容の要約を示したA4１枚と資料を配付している。それに加えて説明の道具として板書を使っている。でも要点までプリントや黒板に書く必要があるかどうかは疑問である。「ノートを取りやすくしてくれ」という意見は以前からあるが、学生ごとにばらつきがあるので､聞き取って理解できる学生もいれば､そうでない学生もいる。ばらつきがあるということであきらめている部分がある（経済・原田）

・学生に不親切にするという手法も必要であろう。全ての授業がその方向に進むのは良くないのだが、ある種の授業では板書を簡略にして、学生が自主的に考えながらノートを取っていくような授業を、部局単位などで検討しても良いのでは。そのようにノートを取れるような学生を育てるのもわれわれの仕事（情報C・山川）

田中先生「自分が学生のころは、丁寧に板書してくれる先生なんていなくて、口頭で喋ったことをメモするのが当然であった。だがこの大学ではそのようにやっても誰もノートを取ってくれない。そういう経験がありいまは全部書くようにしている」

III. 講義ノート、ウェブの使用

・ネット上の資料と授業内容との連携はどうなっているのか？自分の授業ではネット上に資料を載せているが、授業内容とはあまり重ならないものもあって、学生がそれを閲覧しているとは思えない。（経済・清水）。

田中助教授「講義ノートを事前に準備してきており、授業の残り時間を見ながら、そのなかで話す内容と省略する内容を臨機応変に決めている。そのため、講義ノートに載っていながらも話していない内容もあるし、その逆もあり得る。時事ネタなどはノートには載せないが授業で話すこともある。講義ノートはウェブ上に授業後、掲載することにしている」

「講義ノートは授業が終了時に初めて載せるもので、それまでは授業の直前まで情報がアップデートされている。授業の内容とあわせて考えると、多少ノートの方が大きかったり、ノートにないことを話すこともあるが、ネット上の情報だけをテスト前に勉強したとしても、それだけでおそらく合格点は取れるだろう。登録者が９０名近くいるが、毎回の出席者は30人程度。これが本当に良いのかどうかはわからないが、いまはそのように進めている。」

・ネット上に情報を載せてそれで学生がより理解するのであれば何の問題もないのではないか（学教Ｃ・中村）

・理解が促進されるという点ではいいのだが、ただ資料を見るだけで理解したと思っている学生には問題である。大学での勉強では、ある情報に対してそれがいかに確証があるものなのかを対話的に考えることが重要である。ネットであれば、対話的といってもタイムラグがあるし、学生自身はその情報の確からしさについては自分で調べることはまずしないだろうから、一方的に情報を垂れ流すことになりかねない。どれだけ学生が理解していて、どれだけ理解していないのかを知りながら、授業をする必要がある。(生物・日並)

田中助教授「この授業に関しては、主な対象は３−４年生で、「情報科学」を受講している学生であるが、それ以外の授業の受講を前提にするようなものではない。いわば教養科目と同じような立場。」

・だが授業の内容によって学生の理解についての考え方というのは大きく異なる（情報Ｃ・山川）
・情報処理の授業などでは頻繁に小テストを行うことで確認を行っている（情報 C・菊沢）
・理解しているかどうかを知るために、最近では授業の最初に「質問メモ」の様なものを配る。授業を受けたときにその問いに答えられるようになっていれば、その授業は理解しているものだと学生が個別に判断できる材料になるものである。その質問に答えられるようにノートを取りなさいと指導しているが、その効果がどんなものか、まだよくわからない（経済・清水）。

田中助教授「テストの直前に予想問題集のようなものを配布して、その答えについては配布しない。授業での板書やウェブの講義ノートを見れば分かるようになっているので。テストは穴埋めや計算など。」

IV. 質問の受付
・授業の最後に質問カードを出席代わりに出してもらっているが、その場合、次回の授業の冒頭 30 分ほど質問に答えるのに要してしまう。ほかになにかいいやり方はないものだろうか（学教Ｃ・片山）
・授業の最後に質問カードを出してもらっているが、答えるのにかかる時間は質問の内容による（看護・畑野）。
・WebCT を使って質問を受け付ける。その際、成績に若干の＋α を設けるなど、何らかのインセンティブを学生に与えることで、より質問が出やすくなる（情報Ｃ・山川）
・携帯電話のサイトで掲示板を作成して、そこに学生が質問を出せるようにしておく。そうすると授業の時間内にも質問を書いてくる学生もいるほど、質問が出やすくなる（学教Ｃ・中村）
・質問カードなどを使って、学生の意見を取り込みながら授業をやることで双方向性が得られるのでよい（情報Ｃ・菊沢）

V. プロジェクター・PowerPoint の使用
・情報量が多いので、例を入れるなどして理解を促す。たとえば８ビットと 16 ビットの音声サンプルを聞かせるとか、圧縮を繰り返すと音源がどのように劣化するかとか、そのほか CD の仕組みなどを図などで示すなど（海洋・神谷）
・パソコンからプロジェクターを使ってスクリーンに映写して普段から授業をしているが、いくつかの教室では暗くしなくても見えるようになった。それまでは真っ暗なまま授業をすることになり学生から苦情も出ていた。ただいまでも教室によってはプロジェクターを使うときには暗くしないといけない（黒板が使えない）教室が多くある（学教Ｃ・片山）

田中助教授「PowerPoint と黒板を一緒に使えるような教室があれば、板書しながら資料を見せるということも出来る。だが、多くの教室では暗くしないとプロジェクターが使えないので、暗くすると眠くなる学生が出てくる。単純にメリットばかりでもない。書くことによって学生の意識がそこに向くので理解が高まると思っている」

VI. 今後の公開授業について

田中助教授「いつもと同じ部屋でやらないと学生の雰囲気も通常通りではないし、黒板なども使いにくかったりする。小浜への放送ということもあるだろうが、できればビデオを通常講義の部屋に持ちこんでやるほうがやりやすい」

・参加しやすい時間帯を考えて欲しい。（海洋・東村）
・授業を 60 分だけにして、残りの 30 分を検討会にするなど、授業全体への参加が難しい教員などへの配慮が必要。（海洋・神谷）
・学生の反応も見たいので、学生が座る席を決めておいて欲しい（学教Ｃ・亀田）
・学生の座る席と教員の座る席をはっきり分けておくという工夫もありうる（情報 Ｃ・菊沢）
・学生の顔・反応が見えないので、参観する教員の席を左右に置いて向きを工夫するなどして欲しい（学教Ｃ・片山）
・授業には積み上げが必要なものと、そうではなく単発で理解できるような授業もあり（「NHK 公開講座」みたいなもの）、どういうタイプの授業であるかを示した方が公開授業とその検討会が実りのあるものになる。でないと検討会の論点がずれたものになりかねない（生物・日弄）
・授業をタイプで分けるか、部局で分けるか、方法はいろいろありそう（情報 Ｃ・菊沢）
・他の先生の授業を自由に聞けるようにして欲しい。たとえば特定の授業を指定して、いつ参観してもいいようにするなど（学教Ｃ・中村）
・普段の授業でも自由に出入りするような環境作りが必要なのであって、必ずしも制度化を先にするかどうかは議論の余地がある。有志の先生たちで自主的に参観を増やしていくという手もある。その上でときどき集まって情報交換をする場を作るなど（経済・原田、情報Ｃ・菊沢ほか）
・公開授業を部局単位で回すというより、１年に１回の授業参観とその報告を義務づけるようにすればどうか（生物・日弄）
・もっと改善の余地がありそうな教員の授業を見せて欲しい（学教Ｃ・中村）

(3) 担当教員の感想（田中求之）

自分の授業のやり方について色々と考えさせられる意見が聞けて、非常に刺激になった。自分が思ってもみなかったところを高く評価してもらえたり、一方で「これで良い」と思っていた点を批評されたりと、授業に関して考える視点を広げてもらえたのが何よりの収穫であったと思う。その意味で、やはり検討会あっての授業公開であると強く感じた。他学部の教員と「教えること」という共通の話題で意見を交わすだけでも得るものは少なくないだろう。

レジュメや配布資料を使うべきか、実際にデジタル機器を操作して見せるべきなのか、あるいはパワーポイントで予めスライドを作り込んで置くべきなのか等、検討するべき課題をたくさん与えられたので、そうした課題を検討しながら、自分なりの「良い授業」にしていきたいと思う。

3.2. 2005 年度後期

3.2.1. 指針

(1) 「基本方針」等の趣旨

2005 年度後期より福井キャンパスでの授業公開を、より多くの教員に行ってもらうため、授業公開の主たる目的と方法について明確・簡潔に示す必要が生じた。そこで 2005 年 11-12 月に FD 部会授業公開担当教員を中心に基本方針とガイドラインを作成し、2005 年度後期の授業公開時に学内に配付し授業公開への理解を促した。

作成した基本方針・ガイドラインは以下の通りである。

(2) 基本方針

［授業公開は授業改善への関心を高めることを目的とする］

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得るための機会を提供することを第一の目的とする。

授業公開は模範授業ではない。大学教育において一つの理想型などあり得ず、教育の自由が保障されるなかでこそ、より良い授業を育むことができるだろう。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを目指すものである。

(3) ガイドライン

［授業公開に参加するうえで守るべき約束事］

（１）授業の方法・工夫に注目する

授業公開では他の教員の授業に１回だけ参加するものであるため､専門分野が異なったり、コース全体的構成が不明であったりすることが往々にしてある。だが、授業の方法・工夫については学びうる点は多くあるので（板書の仕方、話し方、学生への問いかけ、時間の配分など)、特に方法的側面に注目して参加することが望ましい。

（２）積極的に意見を交換する

授業公開は、他の教員が行う授業に参加するだけで完結するものではない。授業公開に参加して気づいたことを、授業の担当教員や他の授業参加者と意見交換し、それぞれの視点を共有することが重要だと考え、検討会を設けている。授業公開の参観者は、授業直後の検討会に参加し、刺激を受けた点などについて積極的に意見を交わすことが望ましい。

（３）授業の内容に立ち入った議論・批判は行わない

大学教育においては、価値判断の違いに基づき、視点・論点が自分のものと異なる場合がしばしばある。ですが学問と教育の自由が保証される環境においてこそ、より良い教育が涵養されるとの立場から､授業公開とその検討会の場においては､授業内容に立ち入った議論・批判は行わないこととする。立場が様々であるため、お互いを尊重しながら、特に授業のスキル・方法について、意見を交換する場を設ける。

（４）授業の障害にならないよう配慮する

少人数・ゼミ形式の授業など授業の形態によっては、教員の参観が授業の障害になる場合もある。大人数の授業においても、途中入室・途中退室など、授業の障害にならないよう、極力配慮することが望ましい。

3.2.2. 実施方法の検討

2005 年度前期までの授業公開の調査票より、授業公開の実施方法についていくつかの意見が得られた。大教室での講義が連続しているため異なった形態での授業公開の実施、部局ごとなど小さなグループでの複数の授業公開の実施、時間帯をより選べるようにして欲しいなどの要望が多かった。そんななか、従来通りのものと新しい形態の２通りの実施案について FD 部会にて協議した。

【2005 年度後期実施案１】

・全体から公開可能な授業を募集：リスト化して周知→参加予定を事前把握
・公開授業実施期間に自由な参観
・公開授業の形態：前半 70-75 分が公開授業、後半 15-20 分が検討会
　　検討会への学生の参加の可否は、担当教員の任意
・担当者・参加者の義務：公開授業＋検討会
　　参加者：B6 程度のアンケートを記入し担当者へ、担当者：アンケートと検討会の報告
・担当者の報告を FD 部会で集め、報告書や Web にて情報を公開

【2005 年度後期実施案２】

金沢工大形式：「模範授業」の公開：授業評価アンケートでの高得点の授業を指定して公開

だが、従来の形態に近い実施案２については、そもそも「模範授業ではない」という本学の授業公開の基本方針に反するし、授業の選定が難しい。授業評価アンケートの結果は必ずしも授業の良し悪しを示すものでなく、アンケート結果から模範授業を探すのは難しい。ただ項目を限定して（例「後輩に勧めたいと思うか？」）、授業を選定することは可能ではあるが、一コマだけを従来通り公開するのでは、これまでの実施をふまえた要望に応えたことにならない。

そこで、2005 年度後期は自発的な授業改善を促す意味も含め、福井キャンパスでは実施案２のかたちでの授業公開を行うことに決定した。一方小浜キャンパスでは教員数の限定などもあり、従来通りの形式での授業公開を実施することとした。

3.2.3. 概要

(1) 授業公開

(a) 福井キャンパス

センター試験による休講を避けるため、今期は変則的に、2006 年 1 月 13 日（金）３限から 1 月 20 日（金）２限までを、授業公開の実施期間として設定した。この期間に授業を行うすべての教員から公開可能な授業を 12 月末に募集し、1 月初めに応募を締め切った。申し出のあった授業をリストにして周知し、参観予定を事前把握するための連絡を行った。

授業公開の形態は、最初の 70-75 分が授業公開で、残りの 15-20 分を検討会に用いることにするが、参観教員の人数によってはこの時間配分を自由に変更して良いこととした。また検討会への学生の参加の可否は担当教員の任意とした。

担当教員と参加教員に課せられる義務は、授業公開と検討会にセットで参加することである。その上で参加教員は、B6 程度の簡単な調査票を記入し担当教員に提出するとともに、検討会において活発な意見交換が求められた。また担当教員は調査票と検討会の結果を簡単にメールで報告することが課せられた。

各担当教員の報告は FD 部会において取り集められ、報告書や Web 上で結果を公開した。

（後期授業公開開催案内）

授業公開・討論会の実施について（平成 17 年度後期）

FD 部会授業公開担当

１月13日より20日まで、福井キャンパスにおいて授業公開が行われます。今学期は多くの教員の協力のもと、12の授業が公開されます。別紙日程表をご参照のうえ、ぜひご参加ください。

なお事前に申し込みのない場合でも、ウエブ http://www.s.fpu.ac.jp/FD/05fopenleclist.html から担当教員に申し込みが可能です。

・実施期間：2006 年 1 月 13 日（金）３限ー1 月 20 日（金）２限

・基本方針：[授業公開は授業改善への関心を高めることを目的とします]

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得るための機会を提供することを第一の目的とします。

授業公開は模範授業ではありません。大学教育において一つの理想型などあり得ず、教育の自由が保障されるなかでこそ、より良い授業を育むことができるでしょう。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを目指すものです。

・ガイドライン：授業公開に参加するうえで守っていただく約束事

（１）授業の方法・工夫に注目する

（２）積極的に意見を交換する

（３）授業の内容に立ち入った議論・批判は行わない

（４）授業の障害にならないよう配慮する

・授業公開・討論会の進行：授業公開担当教員は参照してください

０．事前に事務局より送付された「授業公開調査票」を準備しておく。

１．授業開始の合図

２．初めに学生に向けて授業が「授業公開」を行うものであることを伝える。

３．参観教員に「授業公開調査票」を配付する。

４．授業開始

特別に準備をした授業ではなく、なるべく通常の授業の短縮版を行うのが望ましい。

５．授業終了

授業時間は６０分から７５分程度で、残りの時間を討論会に当てる。そのため参観教員が多く、討論会に時間を多く取りたい場合はおおよそ３０分前に授業を切り上げ、残りを討論会に当てる。逆に参観教員がごく少数の場合は授業を 80 分行い、残りの 10 分を討論会としてもよい。

６．討論会開始

授業公開の討論会への学生の参加を求める場合は、引き続いて討論会を開始する。あるいは教員のみで討論会を行う場合は、学生を退席させたうえで、討論会を始める。討論会の司会は、授業担当教員が行う。

７．討論会終了

調査票を回収後、授業公開終了。

８．授業担当教員は、１週間以内に FD 部会にメールで授業公開の概要を報告する

報告内容は次の８点とする：（１）授業名・日時、（２）教員名、（３）おおよその学生の出席人数、（４）おおよその教員の参観人数、（５）授業公開・討論会の感想、（７）調査票についての感想、（８）その他授業公開についての意見。

（後期授業公開調査票）

授業公開調査票

所属部局：＿＿＿＿＿＿＿＿

授業公開にご参加いただき、ありがとうございます。以下のガイドラインに従って授業を参観後、検討会に積極的にご参加ください。

【授業公開ガイドライン】
（1）授業の方法・工夫に注目する
（2）積極的に意見を交換する
（3）授業の内容に立ち入った議論・批判は行わない
（4）授業の障害にならないよう配慮する

今後の FD 活動の参考にさせていただくため、調査票への記入にご協力ください。調査票は本授業の終了後に担当教員までご提出ください。授業公開と検討会の内容、調査票などでいただきましたご意見は、後日報告書としてまとめ、教員のみなさんにお配りする予定です。

（1）参考になった点について、お書きください。
（2）改善の余地があると感じた点について、お書きください。
（3）そのほか、気づいた点・疑問点などありましたらお書きください。
（4）今後の授業公開を行うにあたって、ご意見がありましたらお書きください。

(b) 小浜キャンパス

記述の通り、小浜キャンパスでは授業数の関係などから、今回は 1 人の教員の授業公開と検討会を行うこととした。担当は、富永修助教授（水産資源学、2006 年 1 月 30 日）である。

(c) 授業公開マニュアル

今回からは授業公開と検討会を各教員が実施するため、基本方針・ガイドラインを再度配付するとともに、授業公開と検討会のマニュアルを作成した。マニュアルでは授業公開の流れを次のように解説している。

0．事前に事務局より送付された「授業公開調査票」を準備しておく。
1．授業開始の合図
2．初めに、学生に向けて、今回の授業が「授業公開」を行うものであることを伝える。
3．参観教員に調査票を配付する。
4．授業開始
特別に準備をした授業ではなく、なるべく通常の授業の短縮版を行うのが望ましい。
5．授業終了
授業時間は 60 分から 75 分程度で、残りの時間を検討会に当てる。そのため参観教員が多く、検討会に時間を多く取りたい場合はおおよそ 30 分前に授業を切り上げ、残りを検討会に当てる。逆に参観教員がごく少数の場合は授業を 80 分行い、残りの 10 分を検討会としてもよい。
6．検討会開始
授業公開の検討会への学生の参加を求める場合は、引き続いて検討会を開始する。あるいは教員のみで検討会を行う場合は、学生を退席させたうえで、検討会を始める。検討会の司会は、授業担当教員が行う。

７．検討会終了

調査票を回収後、授業公開終了。

８．授業担当教員は、１週間以内に FD 部会にメールで授業公開の概要を報告する

報告内容は次の７点である：（１）授業名・日時、（２）教員名、（３）おおよその学生の出席人数、（４）おおよその教員の参観人数、（５）授業公開・検討会の感想、（６）調査票についての感想、（７）その他授業公開についての意見。

■ 福井キャンパス：計 12 コマ

月　日	時限	講義名	教員名	教室	人数	事前申込者	出席者
1/13,金	3	生物資源学概論	村井	L205	40		菊沢
1/13,金	4	憲法原論	片山	L208	34	津村	菊沢、津村
1/16,月	4	社会政策	吉村	N252	2	畑野	２名
1/16,月	4	情報処理 A	菊澤	第1情報演習室	25	村井、津村	工藤、村井、中村、津村
1/16,月	5	アメリカ経済論	工藤	L104			菊沢、細谷、月僧、畑野
1/18,水	3	英語	羽藤	L204		伊藤、津村	伊藤、菊沢、津村
1/19,木	2	現代の科学	中村	L208			
1/19,木	2	宗教学	津村	L108	20	畑野	畑野
1/19,木	3	言語学	フィアラ	L109	60	伊藤、津村	伊藤、津村
1/19,木	5	中国語Ⅱ①	亀田	L201	15	津村	２名
1/20,金	1	技術の世界	田中	L107			なし
1/20,金	2	ミクロ経済学Ⅱ	服部	L108	?	木野	木野、廣瀬、新宮、北川
		合計：のべ（実質）				11 名(5 名)	21 名(13-16 名？)

■小浜キャンパス：計 1 コマ

月　日	時限	講義名	教員名	教室	人数	事前申込者	出席者
1/30,月	1	水産資源学	富永	M204	25		11 名

(2) 福井キャンパスの実施教員による報告

(a) 授業公開・検討会の感想

・公開ということで多少緊張感があり、授業の準備にいつもより時間をかけ、少しでも工夫できないかを考える機会となってよかった。

・別世界の科目の授業ノウハウが新鮮であり、また広範な議論ができて非常に有効だと思う。

・先生方の意見は新鮮で有益でした。参観の先生方の存在は、意外にも、あまり気になりませんでした。むしろ、一度経験すると、不思議と、今度は別の科目で実施してみたいと

いう気がしてきます。
・「おもしろかった」という感想を頂戴したことは，今後の励みになる。
そのほか、方法（配付資料や各種機器の利用）、教授作法（声の大きさや板書など）、構成（流れや内容のまとめなど）などについての細かな指摘が役に立ったという意見が見られた。

(b) 調査票についての感想
・「授業公開ガイドライン」も明示されており、内容、形式ともに適切だと思います。
・自らが努力している点（緊張感の持続、web 教材の活用、テンポの良さなど）を評価されてよかった。
・調査票は，現状程度のものでしばらくいくのがよいように思う。あまり細分化した項目だてをするとかえって書きにくいのではないか。

(c) その他授業公開についての意見
・現状のようにゆるやかに実施されてゆくことを希望します。
・参観できる授業の数は今以上に多くなくてもよいが、同じ時間帯に集中しているものがあるので、そこで授業をしている教員は選択肢が減ってしまう。
・公開授業、参観者が少ない。若い人は積極的にやってほしい。
・今後の授業公開ではもっと参観者を増やす工夫をしないといけない。また同時に授業公開の期間、全ての授業を開放させるようにし、より多くの人に受け入れられるようにすべき。
・事前の申込なしの部分聴講を認めるなど、さらに「開放型」の授業公開を目指すのがよいのではないでしょうか。
・授業途中の参観や、直前の申し込み（担当教員に直接）など、多くの先生が、気楽に、頻繁に参観できる体制が有効と思った。
・授業公開への参観を協力項目にしている限り、FD 委員や教務委員とごく少数の意欲ある教員以外、教員が積極的に参観する可能性は低い。「FD への意識を高める」という漠然とした努力目標ではなく、何らかの強制力を伴わねば、本当に FD が必要な教員の質的向上は望めないだろう。

(3) 小浜キャンパスの授業公開検討会

担当教員の感想：

授業公開では最初は少し緊張しましたが、すぐに普段の講義と同じ調子で進めることができました。学生たちの授業評価とは違い、講義の仕方、進め方を評価されるという点で不安と楽しみがありましたが、私にとっては非常に良い経験となりました。特に、講義が終わってすぐに討論会を開いていただいたことで、より生に近い感想やご指摘をいただけたと思っています。学生たちのノートへの筆記状態や資料の扱い方・準備の仕方など教える側の立場での意見をいただいたことは、これからの講義方法を改善する上で非常に役立ちます。私も他の先生の授業公開に積極的に参加していくつもりです。

【調査票についての感想】厳しい指摘がなかったのでホッとしていますが、やはり学生の理解力を考えた講義を進める必要があると考えされられました。また、教室の構造上の問題（スクリーンを下ろすと黒板が半分使えなくなり、板書の消すサイクルが早くなる）などが、先生方の共通の認識ということもわかりました。このような問題を取り上げていくことも、調査票の効果なのかと思いました。

【その他授業公開についての意見】授業時間を 60 分としましたが、できれば 90 分フルで行

う方が良いように思います。しかし、討論会は直後の方が印象が明瞭に残っているので効果的だとも思います。次の時間に講義のある先生は、90 分の授業公開をすると討論会に出席できなくなってしまいます。ちょっと、ジレンマがあります。授業公開に関しては、できるだけ多くの方が経験されると良いと思いますが、一度にたくさんすると出席率が低下するように思います。前期、後期でそれぞれ 1 名か 2 名程度で行う方が出席率を維持できるのではないかと思います。

【調査票より】

(a) 参考になった点

・数式を用いることで、資源量変化の違いがよく分かる。

・授業の目的・目標が明確に示されていて聞きやすかった。途中につまずいても全体は理解でき、板書も細かいので後で見直して細かい点を考え直せる。

・板書が見やすく、字もきれいで大きく、スピードもちょうど良い。

・数式モデルの説明がわかりやすく、誘導が上手。

・教卓を横に移し、板書を見やすく工夫している点が参考になった。

・声が聞き取りやすかった。

・受講学生数の数がちょうど良い。

・一つの項目を 1 コマで集中して行うやり方。

・要点を整理して板書していること。

・前回の復習から導入していること。

(b) 改善の余地があると感じた点

・スクリーンを降ろしていて板書できる範囲が狭いため、残しておいて欲しい板書もすぐに消さなくてはならないのが気になった。

検討会にて：これは施設の問題なので、板書できるスペースを増やすなどの対策が必要だろう。

・パワーポイントの図はプリントとして配布した方が良いのではないか。抽象的・数学的な説明が多かったので、プリントに書き込ませるなどの工夫があっても良かったのではないか。WebCT に資料がのっていても、授業でプリントを持参させるのは困難である。

検討会にて：配布するプリントを一冊にまとめて配っても毎回持参しない学生がいる。やはり、毎回の授業でプリントを配るしかない。

・説明が早く、数式についての説明が難しい。数式だけで理解できるのかどうか。概念のビジュアル化が必要かもしれない。数式のパラメータの意義など、「難しい用語」について、学生がどれくらい理解しながら聞いているのかが気になった。

検討会にて：入学した早い段階で、数学の基礎知識をしっかりと身につけさせるような場が必要かもしれない

・学生のノートを見ると、板書を移しているだけの学生が多いようだ。

検討会にて：パワーポイントを丸写しする学生も多いが、必要な点を取捨選択して写すようなクセを付けさせる必要があるだろう

・学生が理解しているかを確認しながら授業を進めたらどうか。

・もう少し具体的な例を挙げて興味を引きつけたらどうだろうか。

・数式を理解する意義や重要性について、もう少し説明が欲しかった。

・余剰生産モデルの一覧を先に示した方が良かったのではないか。

(c) そのほか、気づいた点・疑問点

・授業の中で微分方程式を各自で解いておくように指示していたが、それができる学生がどれくらいいるか疑問である。
検討会にて：今回の授業は、数式の意味について理解できていない学生が大勢いることを承知の上で行っている。本来ならこの程度の微分方程式は自分で解けて当たり前だということを印象づけたかった
・この授業では、数学についてある程度の予備知識が必要なように感じられたが、履修制限などはしていないのか。
検討会にて：特に履修制限はしていない
・WebCT で前もって資料が学生に配られているようなので、学生にその気があれば予習をした上で授業に望める。そうすると、板書をノートに書き写しながら復習感覚で理解できると感じた。WebCT で予習・復習する学生の割合はどの程度でしょうか？
検討会にて：ほとんどいない。教科書や参考書の設定も検討している
・質問はよく出てきますか？
検討会にて：テスト前は質問が殺到するが、普段は WebCT にも質問がこない
・中間テスト・レポートなどの頻度や評価の割合はどうですか？
検討会にて：今年からレポートを課し、各学生が授業内容を把握しているかをチェックしている。また、授業内容に関した問題集を配り、その中から試験を一部出すようにしている
・前回の授業評価結果を受けて改善した点はありますか？
検討会にて：前回の授業評価で、水産資源学の内容が偏りすぎているという意見が多かったので、なるべくオーソドックスな内容にするように心がけた。

(d) 今後の授業公開を行うにあたっての意見・要望
・助手も参加すべきである。
・今回は 1 時間に短縮して授業公開を行ったが、通常通り 1 時間半の授業を見せてもらった方が、授業の様子や全体像がよくわかると思う。

3.2.4. 次回の授業公開に向けて

授業公開の実施形態としては、2005 年度後期の福井キャンパスのような一定期間内の複数の授業公開というスタイルは有効であると考えられる。ただし、多くの教員がお互いに公開し参観し意見を交わすという理想的な状況の実現には課題も多い。なにより、多くの教員が授業公開に関心を持って関わってくるようにすることが必要である。そのためには、授業公開のあり方をさらに工夫することはもちろんのことだが、授業公開の意味の理解の促進も必要であろう。後者については、今年度の FD 活動の報告書の公開がその一翼を担えるかもしれない。

2006 年度以降の公開授業のあり方については、以下のような案が考えられる
(a) 基本的に事前申し込みなしでの受講を認める。授業途中の参観を認める。
(b) 期間内には基本的にすべての授業を公開とする
(c) 公開か少なくとも 1 つの参観を奨励し、いずれかについての報告を行う

ただし、義務化・強制化については強い反発も予想される。また参観する時間がとれない場合など（自分の授業の準備に時間を割きたい等）への配慮も必要になるだろう。

4. FD 研修

FD 研修として新任研修、FD 部会と学内の教職員との間で話あう、あるいは講師を招いて勉強する FD セミナー、そして演習作業を伴う FD ワークショップを企画した。とりわけ、ワークショップは、全教員が、2005 年と 2006 年の２年間に少なくとも１度は参加することを期待している。そして、2007 年度以降は、教員各々が、必要な時期に必要な研修を、学外で受講することを念頭においている。

4.1. 新任研修

従来、教務課が新任教員を対象とする次の項目の説明会（研修会）を実施している。

1. 本学の組織・施設
2. 服務（身分、勤務条件、給与制度、福利厚生制度、各種届出・報告、兼職・兼業
3. 学務・教務（年間行事、通信、連絡体制、緊急時・時間外対応、配布物、研究費、備品の扱い、復命書、旅費、校費で購入する図書・学術雑誌、教務事項）

2005 年度（4 月 28 日に実施）より本学の FD の現状を説明する次のメニューを加えた。

1. FD 事業スケジュール（2005 年度計画）
2. 授業評価アンケート設問と、全体集計結果（2004 年度実績）

その資料を以下および次頁に示す。なお、上記の研修のほか、学部ごとの事情に応じて、学科教務委員や関連の授業科目担当教員が、適宜チュートリアルを行っている。

（新任研修資料）

１７年度ＦＤの実施スケジュール

月	議　　題
４月	・新任教員に対する研修会の開催
５月	・平成 17 年度第 1 回ＦＤ部会開催
６月	・公開授業・検討会の開催
７月	・学生による授業評価（前期）
８月	・学外先進地視察 ・学外講師による研修会の開催（第 1 回）
９月	
10 月	
11 月	
12 月	・公開授業・検討会の開催
１月	・ 学生による授業評価（後期）
２月	・学外講師による研修会の開催（第 2 回）
３月	・実施報告書の作成

（参考）平成 16 年度のＦＤの取組みについて（平成 17 年 3 月 23 日現在）

期日	取組内容
6 月 7 日	第 1 回 FD 部会開催（部会長：坂田経済学部長、各部局より他 10 名） その後、2 月 16 日までに計 7 回開催
7 月 8 日	第 1 回 FD 先進地視察（金沢工業大学、教職員 4 名参加）
7 月 12 日 ～ 18 日	前期 学生による授業評価試行実施 109 人の教員が実施、のべ 5,920 人の学生が参加
7 月 28 日	第 1 回 FD 講演会開催（学校法人河合塾大学事業本部評価研究部長）
11 月 18 日	第 2 回 FD 先進地視察（和歌山大学、教職員 4 名参加）
1 月 20 日	教員相互の授業参観・検討会を試行実施
1 月 26 日	第 2 回 FD 講演会開催（名古屋大学高等教育研究センター助教授）
1 月 27 日 ～ 28 日	第 3 回 FD 先進地視察（山形大学ほか、教職員 4 名参加）
1 月 28 日 ～2 月 10 日	後期 学生による授業評価試行実施 100 人の教員が実施、のべ 4,034 人の学生が参加
3 月 5 日 ～6 日	第 4 回 FD 先進地視察（㈶大学コンソーシアム京都主催「第 10 回ＦＤフォーラム」、教員 5 名参加）

4.2. セミナー

4.2.1. 開催案内とポスター

第1回FDセミナーの開催案内をいかに、またポスターを次頁に示す。

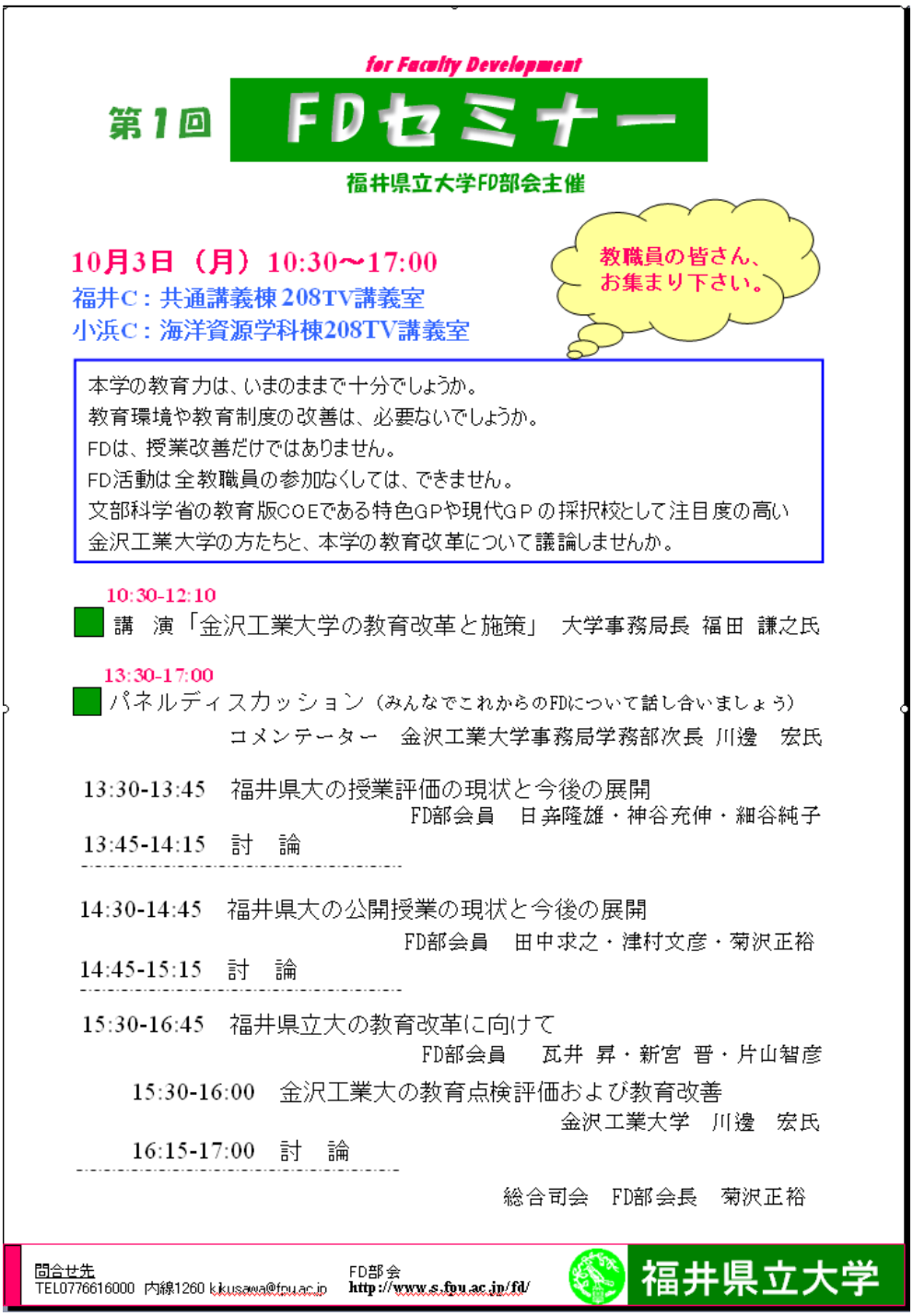
第1回FDセミナーの開催案内

本年前期には、授業評価と公開授業を、昨年度の方法を踏襲して実施しました。後期は、これに加えて、予算がとれている教員研修も実施していく予定です。これらの事業は、授業の改善にとどまらず、本学の教育改革の第一歩と考えています。しかし、なぜ授業評価や公開授業、さらに研修までやるのか、その考え方、目的、結果の利用、実践方法などを話し合い、納得することなくして、事業を推進できません。逆に、教職員が納得する内容と方法で取り組むことによって、事業は有効になり、教育ミッションも明確になるものと考えます。

FD セミナーでは、教育改革への取組みが全国レベルで評価されている金沢工業大学の事務局長の話をまずお聞きすることにしました。午後は、後期に向けた事業実施の考え方と方法について教職員と話し合う勉強会をもちます。また、文部科学省の GP への取り組み方を題材に、教育改革についても話しあう予定です。昨年、今年に 3 つの GP に採択された金沢工大ですが、学務部の先頭で活躍されている事務の方にも勉強会に参加していただく予定です。まる 1 日のセミナーですので、お時間が取れない方も多いハズです。出入り自由としますので、お気軽にお時間の取れるときにご

4.2.2. 開会の辞（FD 部会長）

FD 活動は、本学のように教務委員会に FD 部会をつくることから始め、学長がリードする FD 委員会を経て、最後に大学教育実践センターといった組織を作る形で進展しています。国立大学法人 88 大学の 4 割にあたる 34 大学が FD を実践する組織をもっています。その意味では、本学は大変遅れていますが、その原因の一つは、多くの大学で FD がはじまった時



期が、本学の創設期と重なったためと考えています。確かに、後発ではありますが、組織創設を先行させずに、全スタッフの共通認識のもとで教育力をあげながら、必要な時期に組織を作っていくのがよいのではないでしょうか。

昨年、試行で実施された授業評価と公開授業（授業参観）を、本年度前期も踏襲しました。授業評価対象講義を、１教員１科目から原則全科目に拡張したこと、アンケート内容を一部追加したことが変更点です。FD 部会新体制では、5 月に発足して以来、FD 事業を、FD 部会員中心の活動から全学に拡げることを目標に議論して参りました。その方法は、全学教員が FD について共通の認識を持つこと、学部の独自性を理解し、全学に生かすこと、そして FD

を個々の教員の努力に期待するだけでなく、職員とともに全スタッフにより推進すること、です。

FD は、Faculty Development の略です。Faculty はそもそも能力という意味なので、能力開発とも訳せますが、大学では、Faculty を学部や教授陣という意味で使うので、やはり教授（の教育能力）開発ということでしょう。しかし、昨今の授業は教室環境やメディア環境の整備、メディア教材作成サポート制度の整備など、教員の力だけでは解決できない側面があります。米国では FD といいますが、英国やオーストラリアでは SD（スタッフ・ディベロップメント）とよんでいるのもそう言う事情があるからでしょう。

金沢工業大学では、本学が創設された 1992 年に、教育改革を開始し、現在わが国を代表する教育プログラムを実践しておられます。本セミナーでは、まず午前に、教育改革プロジェクトに当初から参画され、推進役を果たしてこられた事務局長（常任理事）の福田謙之氏に「教育改革の施策」をお伺いします。午後は、FD 部会員と本学教職員が一緒になって、「みんなが納得できる FD 事業の方法」について議論し、後期以降の事業推進の方法を考えたいと思います。その話し合いには、金沢工業大学事務局学務部次長の川邊宏氏にコメンテータとして加わっていただきます。２年連続で文部科学省の３つの GP に採択されている金沢工業大学ですが、そのノウハウなどもお聞きできると期待しています。

最後に、FD（授業改善）の３つの方法についての分かりやすい説明が、（独）メディア教育開発センターのウェブの記事にありましたのでご紹介します。第１の方法である「授業評価」は、学生に学ぶ「教授法の点検」、第２の「授業参観」は、互いに学ぶ「教授項目の点検・内容の評価」、そして「教員研修」は、モデルに学ぶ「メディアによる新時代教授法」です。３つの方法を経験しながら、教員自らが考え、学生とともに授業を設計する。そのうえで、教育制度の改革や、さらには大学教育実践センターの創設を考えることになるのではないでしょうか。

本日は、ご多忙のなかをご参集いただき、誠に有り難うございます。この FD セミナーは、全スタッフ（教職員）が一緒に FD を考える最初の機会と思います。今後とも、皆様の FD 事業へのご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

4.2.3. 基調講演

演題　「金沢工業大学の教育改革と施策」
講師　金沢工業大学事務局長　福田謙之氏
参加　40 余名　TV 講義室

次のページに当日の資料を掲載する。画像化しているため見にくい。鮮明な資料は、次のサイト　http://www.s.fpu.ac.jp/FD/FD セミナー(1)/kitlec.pdf からダウンロードして利用されたい。また、講演の模様は､FD サイトに要約付ムービーとしておいた。また、教務課に DVD としても保管している。

討議内容を 4.2.4.以降にまとめることにする。

基調講演を行う
金沢工業大学事務局長 福田謙之先生

Kanazawa Institute of Technology

金沢工業大学
の教育改革と施策

（教育付加価値日本一をめざして）

金沢工業大学
福田謙之

平成17年10月3日

金沢工業大学の学部

工科系総合大学

- 工学部 — モノの創造
- 行動する技術者の育成
- 環境・建築学部 — 環境の創造
- 情報フロンティア学部 — 知の創造

金沢工業大学の位置

（昭和４０年開学）

NHK大河ドラマ「利家とまつ」の金沢（加賀藩）です。

金沢大学(国)、北陸先端科学技術大学院大学(国)
石川看護大学(県)、石川県立大学(県)
金沢美術工芸大学(市)
金沢工業大学(私)、金沢医科大学(私)、北陸大学(私)、
金沢学院大学(私)、金沢星陵大学(私)、金城大学(私)

3学部15学科（定員1480名）

- 工学部（700名）
  - 機械工学科（150）、ロボティクス学科（100）、航空システム工学科（50）
  - 電気電子工学科（120）、情報通信工学科（80）
  - 情報工学科（200）
- 環境・建築学部（480名）
  - バイオ化学科（100）、環境化学科（60）
  - 環境土木工学科（120）
  - 建築学科（120）、建築都市デザイン学科（80）
- 情報フロンティア学部（300名）
  - メディア情報学科（100）
  - 生命情報学科（80）
  - 心理情報学科（60）
  - 情報マネジメント学科（60）

金沢工業大学キャンパス

大　学　院

- 工学研究科
  - 博士課程（前期・後期）　7専攻
  - 修士課程　2専攻
  - 学部からの推薦試験で進学が可能
  - KITの学部卒業生は入学金を免除
  - 社会人大学院（修士課程）
  - 知的創造システム専攻（東京）
- 心理科学研究科（修士課程）
  - 第1種指定大学院（北陸初）
  - 臨床心理学専攻

- 研究所
  - 国内外に23の研究所
- 連携大学院
  - 国立や企業など10の研究所で研究指導が受けられる
    - 産業技術総合研究所
    - 日本IBM　など
  - MITほか海外の5大学との連携大学院
- 連合大学院
  - 北陸先端科学技術大学院大学
  - 金沢大学

金沢工業大学　プロフィール

- 学生数　7，269名
  - 学部　6，824名　男子　6，394名
    女子　430名
  - 大学院　445名　男子　388名
    女子　57名
- 教員数　325名
  - 教授　183名
  - 助教授　64名
  - 講師　72名
  - 助手　6名

（平成17年5月1日現在）

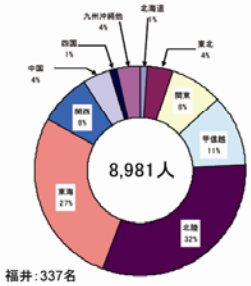
教員（専門）の半数が企業経験者

原則非常勤講師で教育を行わない

大学の変遷

- エリート教育時代
  - 5%未満の大学進学率（戦前の大学）
  - 官僚、研究者の育成
  - 目的による大学選択
- マスプロ教育時代
  - 50%未満の大学進学率（戦後の大学）
  - ホワイトカラー、専門技術者の育成
  - 偏差値による大学選択
- ユニバーサル教育時代
  - 50%以上の大学進学率（21世紀の大学）
  - リベラルアーツ、工学的素養の育成
  - 個性による大学選択

平成17年度
ブロック別　志願状況



福井：337名

志願者の推移

- 平成15年度　全志願者数　4，915名
- 平成16年度　全志願者数　7，694名
  （前年比・156%）
  - 工学部　4，178名
  - 環境・建築学部　2，334名
  - 情報フロンティア学部　1，182名
- 平成17年度　全志願者数　8，981名
  （前年比・117%）
  - 工学部　4，861名
  - 環境・建築学部　2，643名
  - 情報フロンティア学部　1，477名

21世紀の社会が求める学生像

- どの大学を卒業したかでは無く
  どのような目的で大学に入学したのか
- 大学で何を学んだか（何をしたか）では無く
  卒業時に何ができるようになったか
- 企業に就職して何をしたいのか
- 生涯学習のテーマは何か
- 自分の将来の夢は何か

就職に際して出身校を問わない企業が増えている

教育改革について

教育改革の変遷

- 平成 3年 3月　総合研究機構準備委員会（角倉委員長）
- 平成 3年 7月　総合研究機構の構築について（答申）
- 平成 3年 9月　最初のアメリカ大学視察（ｽﾀﾝﾌｫｰﾄﾞ・MIT・ｳｵｰﾀｰﾙｰ・CALTECH・ﾊﾜｲ大）
- 平成 3年12月　発創会発足（藤村委員長）
- 平成 4年 5月　総合的教育体系の基本的枠組みに関する提案（答申）
- 平成 4年 7月　教育改革検討委員会発足（藤村委員長）
- 平成 4年12月　教育改革第１次答申
- 平成 5年 6月　教育改革第２次答申　　夢考房開設
- 平成 5年11月　教育改革第３次答申
- 平成 6年 3月　教育改革第４次答申
- 平成 6年 4月　教育改革実施委員会発足（前田委員長）
- 平成 7年 4月　教育改革実施年度
- 平成10年 4月　教育改革完成年度
- 平成11年 2月　顧客満足度向上プロジェクト発足
- 平成12年 5月　顧客満足度向上プロジェクト答申
- 平成12年 8月　日本経営品質賞挑戦プロジェクト発足
  事務職員の大半が日本経営品質賞審査委員の資格講習を受講
- 平成13年10月　日本技術者教育認定機構（JABEE）に機械系の教育認定試行を申請
- 平成15年 4月　日本経営品質賞に申請（1000点満点中371点）
  機械系（２学科）及び材料系（２学科）のJABEE認定
- 平成16年 4月　3学部15学科体制スタート
  環境系（２学科）及び建築系（２学科）のJABEE認定
- 平成17年 4月　「大学基準協会」相互評価及び認証評価の基準に適合

（理由1）理想の大学をめざして

- 大学は教育と研究が使命であり、その内容とバランスが重要である。
- 研究のアイデアは創造性豊かな大学院生によって生み出され、先生が研究へと昇華させる。
- 優秀な大学院生はﾃｨｰﾁﾝｸﾞ･ｱｼｽﾀﾝﾄとして、創造性豊かな学部学生を育み、その学部生が大学院へと進学する。
- 優秀な研究は優秀な教育により生れる。

金沢工業大学の取り組み

（理由2）大学の生き残り作戦

- 本学志願者の質と量を確保する必要がある。
  （18歳人口の急減）
- 大学教育が自由化され、特色ある教育システムの構築が必要である。
  （大学の教育目標を達成するためのｼｽﾃﾑ）
- 本学の教育の特色を明確にする必要がある。
  （導入教育や工学設計教育の実践）
- 本学のﾌﾞﾗﾝﾄﾞｲﾒｰｼﾞをはっきりさせる必要がある。
  （夢考房キャンパスによる顧客満足度向上）

金沢工業大学の理念・目標

金沢工業大学の目標は、
- 高邁な人間形成
- 深遠な技術革新
- 雄大な産学協同

の建学綱領に基づき、
人間力を備えた行動する技術者を育成し、
日本と世界において活躍できる人材として
世に送り出すことである。

（理由3）教育付加価値 日本一の大学をめざして

- アメリカには工学部の教育内容の質を評価する認定制度「ABET」があり工学教育の質が保証されている。
- 「ABET」の評価目的は、教育を改善させるサイクル（仕組）の確認である。
- 日本でも現在「日本技術者教育認定機構（JABEE）」という外部評価制度が誕生し、認定に向けた審査が始まっている。
- 平成17年6月「日本技術者教育認定機構（JABEE）」はﾜｼﾝﾄﾝｱｺｰﾄﾞへ正式加盟

教育目標の明確化

金沢工業大学の教育目標

「行動する技術者」の育成

- 学生目標：知識から知恵に
- 教員目標：教える教育から学ぶ教育へ（「教学半」の精神）
- 職員目標：顧客満足度の向上

教育主題：工学設計教育

教育環境：夢考房キャンパス

「行動する技術者」

1. 自立・自律(チャレンジ精神・自己管理能力)
2. リーダーシップ(統率力・指導力)
3. コミュニケーション能力
   (意志・感情・思考の伝達能力)
4. プレゼンテーション能力(提示・発表する能力)
5. コラボレーション能力(共同・協調する能力)

学生自ら学ぶ
自学自習できる学生

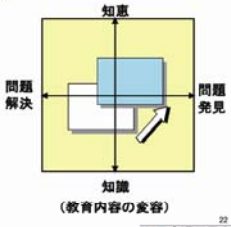
人間力と専門力を
兼ね備えた学生

教員が教える
学生にやらせる

19
K.I.T.金沢工業大学

[教育改革]
知識から知恵への転換(学生)
教える教育から学ぶ教育への転換(教員)
顧客満足度の向上(職員)

- 学ぶためのシステム
- 学ぶための教育方法
- 学ぶための道具教育
- 学ぶための教育環境



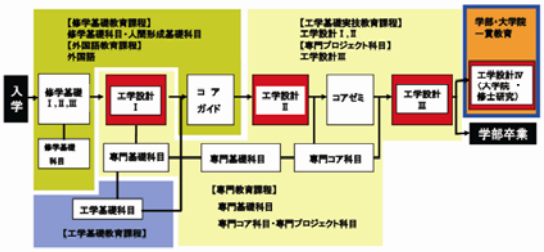
22
K.I.T.金沢工業大学

創案された新教育体系

- 3学期制
- 導入教育
- 人間形成基礎教育
- 工学設計教育
- 工学基礎教育
- 目的指向型カリキュラム

20
K.I.T.金沢工業大学

学ぶための教育システム
工学設計教育中心のカリキュラム



23
K.I.T.金沢工業大学

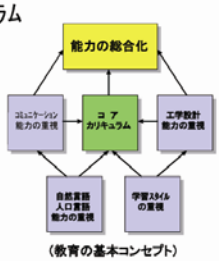
1単位の修得の条件
(大学設置基準)

①15時間の授業
②15時間の予習
③15時間の復習
} 45時間
④各大学の実施する試験に合格すること
⑤教員は成績評価を認定
大学は単位を認定

21
K.I.T.金沢工業大学

学ぶための教育方法

- 専門コアと目的指向型カリキュラム
- シラバスによる学習支援制度
- 学生による授業アンケート実施
- 成績のQPA評価制度導入
- 工学基礎教育センターによる補完教育
- JABEEによる外部評価と教育FD活動



(教育の基本コンセプト)

24
K.I.T.金沢工業大学

学ぶための道具教育
1年次春学期導入教育

- 修学基礎Ⅰ（修学計画の立案）
- 進路ガイド基礎(就職への動機付け)
- ○○系入門(専門分野の楽しさ)
- 技術者入門Ⅰ(技術者になるための倫理)
- 人間と自然Ⅰ（団体生活のﾏﾅｰ･ﾘｰﾀﾞｰｼｯﾌﾟ･討議法）
- 外国語学習法(英会話の学習方法とレベル分け)
- 基礎数理（数学･物理の基礎学力補完）
- 工学基礎ﾄﾞﾛｰｲﾝｸﾞ（ｲﾒｰｼﾞ表現とﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝ）
- 工学基礎実験(問題発見･解決の基礎)
- コンピュータ基礎演習（情報ﾘﾃﾗｼｰ）

「人間と自然Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ」教育
穴水湾自然学苑

- 本キャンパスにおける日々の生活から身を離し、穴水湾自然学苑の大自然の中に身を置いて、自分自身の現状を見直すことを通して人間形成に努めるものである。
  人間力を自分のものとする「体得」の場である。
- 団体生活におけるマナー
- 海洋活動
- グループ討議(ブレンストーミング)
- 講話の聴講と研修レポートの作成

学ぶための教育環境
（教育支援機構）

- 情報処理ｻｰﾋﾞｽｾﾝﾀｰ（情報ｺﾝｾﾝﾄ6000個所）
- 穴水湾自然学苑（人間形成基礎教育）
- 工学設計教育センター・夢考房
  （工学設計教育 ）
- ﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ･ｾﾝﾀｰ（図書館）
- 工学基礎教育ｾﾝﾀｰ（数理工統合教育）
- 自己開発ｾﾝﾀｰ（資格指導）
- 基礎英語教育ｾﾝﾀｰ（英会話指導）
- ﾗｲﾃｨﾝｸﾞ･ｾﾝﾀｰ(日本語文章添削)

人間形成基礎教育

2泊3日の合宿による人間力の育成教育

工学設計Ⅰ・Ⅱ
メインテーマの提示
プロジェクトテーマの決定
「快適に遊べる環境」を設計する
「安全で楽しい公園設置の雲梯」を設計
教員
学生:チーム
K.I.T 金沢工業大学

工学設計教育
平成15年度特色GP
「工学設計教育とその課外活動環境」
K.I.T 金沢工業大学

工学設計Ⅰ・Ⅱ
小1 遊具で窒息死
滑り落ち、首掛かる
事故の状況
45cm
33cm
K.I.T 金沢工業大学

[プロジェクト型教育の実践]
能力の総合化をめざす「工学設計教育」
グループによる問題領域の明確化
自主的な学習・行動
情報の収集と分析
解決案の創出と評価
報告書の作成
成果の発表(プレゼンテーション)
実社会に強い
人間力のある技術者の育成
(能力の総合化ピラミッド)
K.I.T 金沢工業大学

工学設計Ⅰ・Ⅱ
設計案
首つりの危険がない
楽しいスリルがある
K.I.T 金沢工業大学

工学設計Ⅰ・Ⅱ

イメージ図

夢考房で製作

模　型

安全性確保

ゆっくり回転させる装置

37

K.I.T.金沢工業大学

課外活動を支援するための環境

◆夢考房

- 学生が自由に活用できる
  自主的なモノづくりの場
- 「モノを作る喜び」を体験できる場
- パソコン機器から旋盤や樹脂加工、電子基板の製作など、さまざまな設備を用意
- 工具の使い方を身につけるための講習会を開催し、学内ライセンスを発行
- 「安全講習」は学生スタッフが実施

40

K.I.T.金沢工業大学

工学設計Ⅰ・Ⅱ

モデル・ポスターを駆使した発表の場
ポスターセッション

38

K.I.T.金沢工業大学

課外活動を支援するための環境

◆夢考房プロジェクト

- 学生主体のモノづくりプロジェクト
- 学年や学科を超えて目的を同じくする学生がプロジェクトを結成
- 国内外の各種コンテストや大会に挑戦
- 予算管理や進捗管理、設計、製作は全て学生が主体

41

K.I.T.金沢工業大学

夢工房

夢考房

手・頭・身体を使って「ものづくり」をする

39

K.I.T.金沢工業大学

夢考房プロジェクト

- ソーラーカー
- ソーラーボート
- 人力飛行機
- 人力ボート
- GPSボート
- エコラン
- ロボCUP
- NHKロボット
- 福祉機器開発
- 建築模型制作

ソーラーカー・プロジェクト

42

K.I.T.金沢工業大学

中型ロボットリーグで熱戦を展開するWinKIT

RoboCup-2002

43

K.I.T.金沢工業大学

徹底した進路サポート

- 全教員が行う徹底した進路指導
  - 約60名の進路アドバイザー教員
  - 教員（専門）の半数が企業出身者
- 充実したキャリアデザイン教育
  - 1年：進路ガイド基礎、技術者入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
  - 2年：コアガイド
  - 3年：進路セミナーⅠ・Ⅱ・Ⅲ
  - 早期から目的指向型の学生を育成
- 就職支援
  - 東京、大阪、名古屋へ
    就職支援バスを運行
  - 東京に「KIT就職プラザ in Tokyo」を設置

45

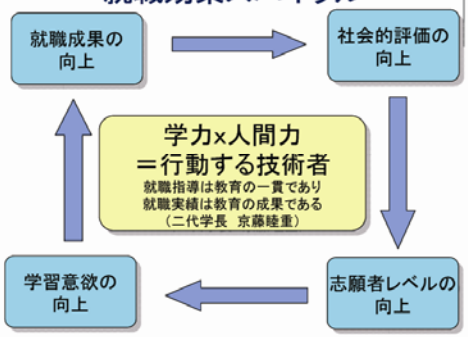
K.I.T.金沢工業大学

学部就職内定率99.7%

44

K.I.T.金沢工業大学

就職効果スパイラル



47

K.I.T.金沢工業大学

平成16年度就職実績

項　目	学　部	大学院
卒業者数	1，538名	171名
進学者数	193名	5名
自営･その他	60名	12名
就職希望者	1，285名	154名
就職者数	1，281名	154名
就　職　率	99.7%	100%
上場･大手･公務員	652名	120名
中小企業	629名	34名

45

K.I.T.金沢工業大学

Kanazawa Institute of Technology

終わり

金沢工業大学が考える究極の顧客（学生）満足度は「卒業生が我が子を自分の母校に入学させたいと思うこと」だと考えています。顧客である学生、大学の重要なｽﾃｰｸﾎﾙﾀﾞｰである父母、高校、企業それぞれの満足度向上を目指して、教職員一人一人が情報を共有し、意識改革をこれからも実践してまいります。

48

K.I.T.金沢工業大学

工学基礎教育センター

数学･物理･化学の基礎能力向上

49
K.I.T.金沢工業大学

52
K.I.T.金沢工業大学

工学基礎教育センターの機能

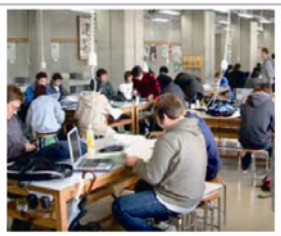
（年間延べ14000人の学生が利用）

- 学生への学習支援
  - 学生の学習ｸﾘﾆｯｸ(学習診断･補充学習指導)
  - 学習ｱﾄﾞﾊﾞｲｽ(学力確認･自学自習助言)
  - 学習ﾚﾌｧﾚﾝｽ(問題の明確化･学習ﾂｰﾙ紹介)
- わかりやすい授業
  - 教材作成(教科書･問題集の作成)
  - ﾃｽﾄﾊﾞﾝｸ機能(小ﾃｽﾄ･問題集のﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ化)
- 教員の教育調整
  - 教育内容のオープン化(授業手法･授業運営の改善)
  - 授業ｱﾝｹｰﾄの相互確認(教員相互の自己点検評価)
- 専任教員：10名　兼任教員22名

50
K.I.T.金沢工業大学

教職員の意識改革

目標と教育システムの共有化

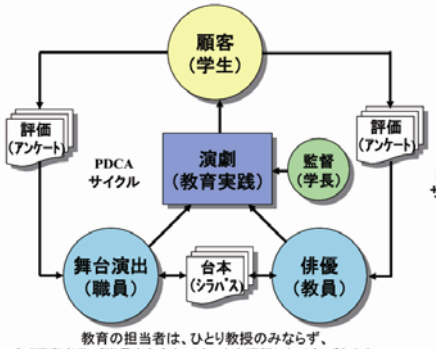


53
K.I.T.金沢工業大学

学生へ学習指導をする専任教員

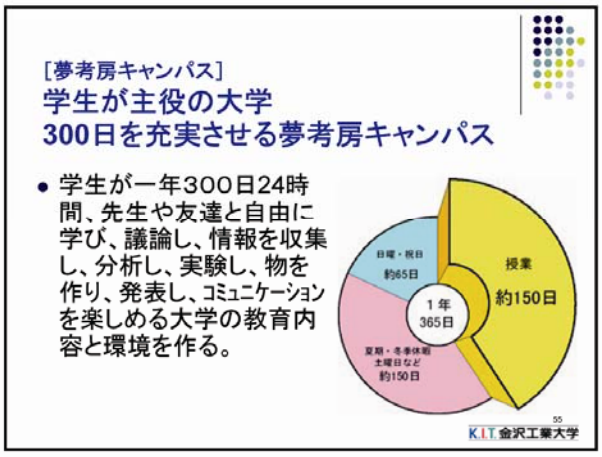
51
K.I.T.金沢工業大学

教育改革のおける教職員の役割



教育の担当者は、ひとり教授のみならず、
広く理事者及び職員をも含むべきことを理解しなければならない

54
K.I.T.金沢工業大学



4.2.4. パネル・ディスカッション

(A) 福井県大の授業評価の現状と今後の展開

１．授業評価基本方針

1) 授業評価の目的：授業評価は、受講者の一般教養・専門的能力修得の向上に関わる授業全般の改善を目的とする。

2) 授業評価の活動：

(a) 授業評価アンケートは、受講者の授業に対する意見を集約し、より良い能力修得機会を受講者に提供するのに必要な基本データを収集するため、原則として全授業科目において実施する。

(b) 得られた評価結果は、個々の当該授業担当教員に必ず開示する。

(c) 評価結果を分析して得られたデータは、授業改善の活用を目的として教職員に提供する（教員評価のデータとはしない）。

(d) FD 部会では、将来にわたって特定の授業にのみ偏り、他の授業で関わる可能性がない項目の評価は原則として行わない。

２． 評価実施方法に関する方針

1) 授業評価アンケート調査

(a) 設問設定の基本方針の提案

a-1) 能力修得達成の手段として適切かどうかという観点から必要な評価項目を決定する。

a-2) 全学で共有可能な評価項目について設問を設定する。

a-3) 教員や受講生への物理的・精神的負担が小さくなるように設問方法や設問数等に配慮する。

(b) 具体的な設問の設定については９月を目処に原案を作成、FD 部会に諮る。

(c) アンケート回答の方式や回答数については、教員・学生の負担が最小限となるよう他大学の FD などを引き続き調査し、取りまとめ提案する。（必要なら暫定措置として回答方法が適当かどうかアンケート調査する）

2) 調査結果解析

(a) 個々の設問に関する統計の取り方等については設問設定後に詳細を検討。

(b) 年度ごとに評価をまとめ、さらに授業科目ごとに経年変化についても評価結果の変動を取りまとめ改善の指標とする。

3) 教員への開示・一般公開

(a) 学内一般への公開は、冊子の作成および Web 公開を通じて行う。

(b) 評価結果の分析データは、原則として教員の了承を経て全て学内一般に公開するが、教員または受講者が希望し、評価にそぐわないなど合理的な理由が認められる場合は非公開を認める。学外への公開については今後検討する。

(c) 結果の公開は出来る限り速やかに行う。

4) 評価活動検証・授業改善要求（他の FD 活動との連携）

(B) 福井県大の授業公開の現状と問題点

●実施状況

・2004 年度後期に試行、2005 年度から実施。

・2005 年度前期は 7 月 8 日に経済学部専門科目「情報システム」（田中求之）で実施（参加教員 23 名）

・後期の実施科目は未定

●現状

・公開授業の周知期間：まずは公開授業というものをやること、その意味等を知ってもらう時期・模範授業との誤解がある

・検討会についても、公開授業そのものの批判検討の場との誤解がある

●問題点

・公開授業とは何か（何を目的として行うか）がまだ十分に理解されているとは思われない。特に、各自が自分の授業を改善するヒントを得る場であるという点（検討会の参加の重要性）。

・２回しか行われていないこともあって、公開授業が実際にどの程度役立つものなのか成果がはっきりしない。

・公開授業に限ったことではないが、授業改善に対する関心がさほど高くない（トップダウンで導入する以上、仕方がないことではあるが）。

●今後に向けて

・抽象的にいうならば、行事ではなく運動として定着するような取り組みが必要

・教務委員会（FD 部会）が行う公式のものに限らず、自主的な取り組みが拡がることを支援する体制作りが必要

・公開授業と検討会の実施方法に関して県立大学に有効な方法論を確立する必要性がある（マニュアル作り？）

・公開授業体験者（授業担当と参観者）の感想などを広く知らせる（年度末作成予定の報告書を全教員に配付する予定）

・公開授業以外の授業改善（授業評価、セミナー）との有機的な連携体制の確立

・ただし、公開授業が万能薬のようなものだとか、必要不可欠なものだと思われないように注意する必要はある。あくまでも各教員が自分の授業の改善に取り組むことが目的である。授業によっては、公開授業が有効とは限らないものもあるだろう。授業改善のために何ができて何が有効かという議論を常に続ける必要がある。

(C) 福井県大の教育改革に向けて

・GP について（その１）：GP に応募されることになった契機は何か。

・GP について（その２）：GP 取得のメリットは、予算面以外で何があるか。教育上のミッションを達成するのにどのような効果があるか（GP に対する評価）。

・GP について（その３）：GP の具体的なプログラムはどのようにして作られるか。ボトムアップかトップダウンか、それぞれについて具体的に。また教員のイニシアティブや自発性はどれくらい確保されているか。特別 GP の場合部局単位での応募になるが、どうやってコンセンサスをとるか。
・GP について（その４）：現代 GP のテーマに「地域貢献」が挙がっているが、金沢工業大学では地域貢献について具体的に何か取り組まれているか。
・GP について（その５）：GP に採用された教育プロジェクト以外に取り組まれている教育プロジェクトはあるか。あれば、それはどのようなものか。
・教育の成果について（その１）：金沢工業大学の教育プログラムの総体は、結局を何を目指しているか。そしてその目的は達成されているとお考えか。もしそうなら、とりわけ何が重要であるか。もしそうでないなら、何が課題か。
・教育の成果について（その２）：教員評価に各教員による教育成果が反映されているか。もし反映されているなら、どのようにしてか。またそれは、教育成果の向上や教員へのインセンティブとして有効に機能しているか。
・教育の成果について（その３）：卒業生の進路の傾向や就業状況などは、改革前とあとで、また、改革後しばらくと現在とで、具体的にどのような変化があったか。
・全般的な質問として：FD 事業を全学に広げ、教育改革を進めるための秘訣は何か。またその際事務員と教員の役割分担や連携はどうしているか。

4.2.5. 当日の記録

10:35-12:30

基調講演

（１）金沢工業大学の概要（スライド 1 から 8）

ロケーション、学部・大学院の構成と構成員数などについての紹介。

（メモ）教員の半数が企業経験者であり、非常勤講師は原則的に採用していない。また、学内教育に集中してもらうために、学外での非常勤講師も原則的に許可していない。

（２）教育改革について（スライド 9 から 15）

これまでたどってきた教育改革の変遷、教育改革を推進する必要性とそのきっかけについて。

（メモ）教育改革検討委員会（事務職員が全体の３分の１）が中心になって改革を推進し、ほとんどの改革案は事務側から提案。教育改革に対しての教員からの理解･協力が得られるようになったのは、アメリカの先進地大学の視察に寄るところが大きい（約 170 名の教職員が視察に参加）。

（３）教育改革の取り組みについての概要（スライド 16 から 24）

教育理念と目標、およびそれを実現するための体制についての概要。

（メモ）とにかく基本骨格である大学の理念・目標を定めるのが重要。学生に目的意識を持たせ、自立して行動できる技術者として育てることを目標としている。３学期制で、1 学期平均 8 単位を修得できるようなカリキュラムを設定。シラバスでは、学生の行動目標を明示し、受講後に何が出来るようになるかを意識させるようにしている。

（４）実際に導入された新教育体制について（スライド 25 から 38）

導入教育、人間形成基礎教育、工学設計教育などについての紹介。

（メモ）１年次の春学期に、徹底した導入教育を行い、修学計画の立案や学習指導、進路ガイド、団体生活やプレゼンテーションの指導などを実施する。工学設計教育では、教員がメインテーマを提示し、それに対して学生チームがプロジェクトテーマを決定し、それにそってモノ作りをしたり問題を

解決する。
（５）夢考房について（スライド 39 から 43）
　学生が自由に活用できるパソコン機器や工具類を整備し、課外活動を支援。
（メモ）学生が自主的・自律的に学習・行動するためには、それができる環境を整える必要がある。
（６）就職率について（スライド 44 から 48）
　就職実績や進路サポート体制についての紹介。
（メモ）各学科で 5、6 名の教員が就職アドバイザーとして学生の進路サポートを行っている。卒業生全員の進路を把握している。卒業２年後のアンケートも実施し、「顧客満足度」の把握に努めている。

基調講演の質疑応答
（前田局長）私立大からは国公立大の独立法人化をどうご覧になっているか。
改革に対してアドバイスを頂きたい。
（福田局長）どういう学生を養成するかというブレないミッションを目標として明確に定める。その作成にあたって教員の多様な意見を調整していては作れない。
（祖田学長）半数の教員が企業からとの報告だが、具体的には？就職実績の表中の「自営・その他」の 60 名の内訳は？教職員の転職はあるか？
（福田局長）企業から転職の教員は米国での研究経験などがあり、企業ともつながっている。60 人にフリータやアルバイトはいない。教職員の転職はなく、満足度が高いと思える。
（神谷）専門教員の担当授業コマ数は？
（福田局長）学部、大学院授業、委員会等の業務を合わせて実時間で週 10 時間。自宅研修はなく、一般教育教員を含む全教員が月から金まで出勤している。
（村井）教育評価システムについて説明してほしい。
（福田局長）教育評価システムで有名なのは高知工科大学だが､そのようなシステムは本学にはなく、目標が達成されているかを数年の間隔で評価する程度である。
（北條）職員数、平均在職年数を教えてほしい。また米国視察のあと教員の意識面でどのような変化があったかを知りたい。
（福田局長）教員が 330 名に対して大学事務局正規職員は 250 名ですが，非常勤（パート）はかなりいます.
その平均在職年数はいまデータを持ち合わせていないが、自分は 33 年努めているが、長い人が多い。職員の居心地はよいと思う。金沢工大卒業生が職員になっているので愛着心が強い。米国研修後は、教職員とも天地が逆になるような改革を 10 年間続けた。変化のなかで頑張った。視察のリーダだった教務部長はいま学長。
（服部）PCDA サイクルのフィードバックはどうしているか。
（福田局長）漸進的教育改善の可能にする PDCA は教育実践の核であり、事務組織の教務部、教員組織の教務部委員会によって綿密にフィードバックをかけている。点検・評価部委員会で、授業評価などの結果を分析し、どのように教育改善をしたらよいかを提案する。それを受けて教務部委員会がプランニングし、実行に移す。

授業評価についての質疑応答
（山川）自分の授業の改善という観点から言うと、授業ごとに特有の設問を設定できるようなシステムを作る必要があるのではないか。各教員が個別に行うのでは煩雑になってしまう。
（日幸）どのような設問が必要かを各部局の FD 部員を通じて知らせて欲しい。原則的には各授業に

特化した設問に関しては FD 部会主導の授業評価では扱わない方針である。
（菊澤）他大学の例でも入力に携帯電話を使うなどの工夫をして実現している例がある。WebCT を使うような場合、回収率が下がるなどの問題がある。
（中村）授業によっては意味のない質問があるので、どの設問に回答させるかを教員が自由に選択できるようにして欲しい。
（細谷）FD 部会としては基本的に共通の項目を提案している。個々の授業に関するオプション項目の取り扱いに関しては実施方法との兼ね合いで検討したい。
（北條）15 分という時間は、授業評価を行うには短すぎる。自由記述欄に真剣に記入しようと思ったら 30 分は必要である。WebCT を使うなどして、授業評価を実施する時間を十分に確保すべきではないか。
（日幸）授業評価に WebCT を導入するという案に関しては、授業中に行えないので回答率が下がる、学生数に対して端末の数が少なすぎるなど、解決すべき問題が数多く残されている。WebCT を使いこなせない教員も多数いる現段階では、現行のマークシート方式が最も現実的ではないかと考えている。一定の実施条件を設けた上での WebCT の併用も今後検討する。
（神谷）金沢工業大学では具体的にどのように授業評価を実施されているのか。
（川邊）金沢工業大学では授業評価結果を教員評価に用いることはしていない。KIT プログレスという大学紀要における教育方法や教育成果の発表、教育協会における功績、指導学生の活躍などを評価の対象とし、表彰したり賞金をだしたりしている。授業評価では、各授業で設定されているシラバス記載の「行動目標」がどの程度達成されたかに力点を置いている。

14:30-15:30
福井県大の公開授業の現状と今後の展望
司会　津村　報告　田中　書記　菊沢
（この段階で参加者　福井 18 名　小浜 2 名）
■ 報告
　配布資料に基づきこれまでの 2 講義の実施方法と感想を述べた。そのうえで、問題点として、目的や狙いを明確にすること、どのような役に立つか成果を出していくこと、公開授業に限らずまず授業改善への関心を高めること、の 3 つを指摘、今後に向けての考え方、行動指針として資料にある 6 点を指摘
　公開授業を体験した田中氏個人の感想として、批判してもらう場にでる経験は有効。同じく授業経験者の津村氏は、次の 3 点を指摘
・公開授業は万能薬ではない。15 回授業の構成と流れ、前後の関係を参観者に見せることができない
・大教室講義には有効な点があるが、ゼミなど小教室授業では効果が少ないのではないか
・多くの教員が参観する時間帯の工夫が必要
■ 議論
（菊沢）授業評価は、学生に授業方法を学ぶ、公開授業は授業内容について教員同士が互いに学ぶ。そして最近のメディアの利用法や教育学的手法は、教員研修、という位置づけで考えており、授業分野ごとに公開授業をするのがいいのではないか。
（新宮）社会科学には価値判断を抜きに語れない部分があるので、内容に立ち入ることは避けるべきである。
（中村）教育内容の判断は公開授業とは別の場所でするべきだ。
（山川）田中先生の情報システムの公開授業は黒板の使い方など参考になった。教育 Tips（授業のス

キルや工夫）を報告する会をつくってはどうか。
（田中）無意識に黒板を 4 つにわけて使った。Tips と思っていないので、生の授業参観もよいと思う。
（中村）授業のスキルをチェックしあうのはよい。
（新宮）内容に立ち入らないことを公開授業の原則とするべきであると思うが、分野によって異なる事情を考慮し、県大方式公開授業マニュアルをつくって小グループの自発的な公開授業を展開するのはどうか。内容を共有すべきグループでは情報収集の場にもなるはず。
（日幷）参加者の目的意識が大事。とくに授業改善すべき点を意識付けして参加させる。
（神谷）専門授業は相互に関係するので重複などないように互いの内容をみるのも有効
（菊沢）教員が互いに学ぶ内容とは、神谷先生のいう取り扱う項目の重複、学生のレベル設定などである。
（中村）内容の相互干渉の場として公開授業は有効でなく，また，相互干渉をすることによって公開授業の主たる目的 (授業技術の向上) の達成に弊害が生じる。
（北條）全学での公開授業の目的は、スキリアップにあるとすんなり理解したが、内容的な議論もふくめるのは無理ではないか。むしろ、内容にわたる議論は、もっと狭い学科レベルでないとむずかしい。積極的にとらえると、教科目により内容的にかさなりあう場合もあるが、そうしたことの調整機能としての公開授業があってもよい。
（山川）全学で行う公開授業と、小グループで行う内容検討会の切り分けが必要
（新宮）信頼関係のある教員同士の参観とするか、せめて公開授業のモラル・コードを定めて、互いを非難しあって消耗するようなことないようにすべき。
（川邊）金沢工大では公開授業とは、学外向け授業である。若手教員に対しては、経験豊かな教員による若手の研修を行っている。本学の授業は、PDCA（PlanDoChec k Act）によってチェックし、フィードバックをかけている。Chec k ＆Act を行うために、教育点検評価委員会がある。まずシラバスを専門外の人と JABEE がらみの専門家による両面でチェック。良いものは模範授業として授業参観にかける。GoodTeacher,GoodClass を見つけ、そのノウハウを共有していく。本学では、大学や部局の教育方針にしたがって個々の授業があると考えている。基礎、実験、専門の授業が一貫性をもつよう教育フォーラムをつくり、分野単位で教育のエッセンスを報告しながら情報共有を図っている。
（日幷）内容の調整はどのようにするのか。
（川邊）授業内容を細かく記載したシラバスに基づいて話し合う。学校の教育目標を満たすものか、複数クラスへの対応はとくに重要で、クラスにや先生によって同じ科目に違いが生じないよう 1 本化を図ることが。これらはシラバスを充実させることによって対応できる。
（山川）情報教育のように同じ科目を複数教員で実施するときは、担当教員同士で授業内容を話し合うほうが改善のスピードが増す。
（日幷）授業内容の議論について、（JABEE のように）シラバスに設定した目標のクリアに必要な部分は公開授業でも可だが、その上でのプラスアルファは教員の裁量に任せるか、別で議論すべき。

15:35-16:50
福井県立大の教育改革に向けて
司会　瓦井昇助教授（社会福祉学科）
報告　新宮晋助教授（経済学科）
記録　片山智彦（学術教養センター）
（１）講演
川邊 宏 氏（金沢工業大学事務局学務部次長）

金沢工業大学の教育改革のための組織について

事務局、研究支援機構、教育支援機構で構成される。

研究支援機構は、特許取得や企業との連携を支援する組織である。

教育支援機構は、学生の多様性に対応した教育活動の支援を行う組織である。

金沢工業大学の事務局について

入試センター、進路センター、学務部、庶務部等で構成される。

学務部の役割について

教育のサポートを行う。

学務部「教務課」の役割

カリキュラム、授業、成績に関する事務を行う。

教務部委員会と共に、ＰＤＣＡのうち「Ｐ」「Ｄ」を担当している。

学務部「推進課」の役割

教育目標（シラバス）、授業評価アンケート、授業明細の管理等の事務を行う。

教育点検評価部委員会と共に、ＰＤＣＡのうち「Ｃ」「Ａ」を担当している。

教育点検評価部委員会の活動について

「Ｃ」「Ａ」の中心になる委員会である。

教員ＷＧで各分野の教育改善について議論し、その報告を委員会に報告し、情報の共有をはかっている。

金沢工業大学評価委員会に活動内容を報告し、そこで今後の改善策が検討されている。

ＦＤ研修会について

新任教員を対象に最低限の教育技術を修得するための１週間にわたるハードな研修を実施している。

教育フォーラム等について

教育フォーラムを開催して、全学的な情報の共有を図っている。

教育点検評価部委員会が、異分野間の授業参観による相互評価を行っている。

（２）ディスカッション

・ディスカッションの進め方

（瓦井先生）新宮先生による問題提起を元にして意見交換をするという形で進める。川邊氏には、適宜コメントをお願いしたい。

*以下の質疑応答のまとめは、資料上の問題提起の順ではなく、実際の議論の順序に沿っている。

・ＦＤ部会教育改革グループのミッションについて

（新宮先生）GP、教育改善及び教育成果の評価についての検討を行っている。

・GP について（その１）：GP に応募されることになった契機は何か。

（川邊氏）特色 GP に採択された「工学設計教育」は、地方私立大学の生き残り策であったが、それによって金沢工業大学の評価は高まった。GP に採択されることで、さらに知名度と助成金が得られるとのことで、GP 制度が始まった当初から取り組みを開始した。

（川邊氏）金沢工業大学の「工学設計教育」は、先進的な取り組みであり、GP 応募によって文部科学省の評価が知りたいという思いもあった。

・GP について（その２）：GP 取得のメリットは、予算面以外で何があるか。教育上のミッションを達成するのにどのような効果があるか（GP に対する評価）。

（川邊氏）GP 採択が全国紙に掲載されたことで問い合わせが殺到し、広報にコストをかけずに知名度

が上昇した。
（川邊氏）工学設計教育が「公認」されたことで、自信を持って取り組め、学内での推進にも力になった。
（川邊氏）GP に対する評価については、文部科学省が同省のホーム・ページに掲載している評価に加えて、国家予算の減少の中での国立大学保護施策という面があると考えている。
・GP について（その５）：GP に採用された教育プロジェクト以外に取り組まれている教育プロジェクトはあるか。あれば、それはどのようなものか。
（川邊氏）特色 GP は、すでに実績のあるプロジェクトを対象にするものであり、「工学設計教育」以外のものはしばらくは困難である。
（川邊氏）現代 GP は、既存の取り組みを整理して、今後の有効性を示すものであり、これからもチャレンジするつもりである。
・GP について（その４）：現代 GP のテーマに「地域貢献」が挙がっているが、金沢工業大学では地域貢献について具体的に何か取り組まれているか。
（川邊氏）野々市町との連携の取り組み（「学びを創造するインターネット町民塾」）は、すでに現代 GP に採択されている。
（川邊氏）金沢工業大学では、教育での地域貢献を考えており、公開講座、「インターネット町民塾」、放送大学、サマー・サイエンス・スクール、ＦＭ放送等を行っている。
（川邊氏）金沢工業大学、金沢大学、北陸先端科学技術大学院大学の連合大学院、「いしかわシティカレッジ」といった取り組みも行っている。
・GP について（その３）：GP の具体的なプログラムはどのようにして作られるか。ボトムアップかトップダウンか、それぞれについて具体的に。また教員のイニシアティブや自発性はどれくらい確保されているか。特別 GP の場合部局単位での応募になるが、どうやってコンセンサスをとるか。
（川邊氏）GP の原案は事務局で作成している。
（川邊氏）理事長、学長が、トップダウンでプロジェクトを確定しており、GP は、既存の取り組みからの応募のため、教員はあまり関与していない。
（川邊氏）教員のイニシアティブは、大学の方針を受けて、「教育システム」の中で、すなわち教員が主要メンバーとなるプロジェクトや委員会において発揮される。ここでは、事務局は、支援と促進に徹することになるが、最終的な取り纏めにおいては事務局の力が大きい。
（川邊氏）日常の取り組みの中から、事務局がテーマをピック・アップして、事務局が主体となって取り纏めと文章化を行っている。
（菊沢先生）「ネット版工学基礎教育センターへの展開」が、平成１７年度の現代 GP に採択されているが、こうしたプロジェクトは各学部から提案されるのか。
（川邊氏）各年度のテーマをトップが選択し、複数のテーマを文章化することになる。
（日弁先生）事務職員の能力養成、外部の学識経験者の導入などはどのように行われているのか。
（川邊氏）事務職員には卒業生が多く出身校に愛着があり、大学運営がうまくいかないと失業の危険もある。実績のある人の中途採用も行っている。顧客満足度を高めるための研修なども実施しており、キャリア・カウンセラー等の資格を取る職員もいる。
（北條先生）事務局の教育支援機構のスタッフの数と、教員への教育研究のサポート体制について、どのように行われているか。
（川邊氏）事務局は、３つの部署、つまり大学事務局、研究支援機構、教育支援機構から成る。研究支援機構は、教員の研究支援だけでなく、特許関係も扱っている。教育支援機構では、センターごとに 5～10 名のスタッフがいる。午前の話にあった専任スタッフ（２５０名）のうち事務局職員が最も

多いのは、教育支援機構である。ここでは、教材作成等の支援、教員が書籍を出版する場合には、出版局が、また、情報機器などについては情報処理サポートセンターがサポートを行っている。専任以外にパートも多い。事務局には、入試センター、就職センター（60 名）、学務部（20 数名の職員がいて、教務委員会と連携）、庶務などがある。

・教育の成果について（その１）：金沢工業大学の教育プログラムの総体は、結局を何を目指しているか。そしてその目的は達成されているとお考えか。もしそうなら、とりわけ何が重要であるか。もしそうでないなら、何が課題か。

（川邊氏）各授業科目の教育目標は、シラバスに明記されている。教育目標と教育評価の連携は、今後の課題である。大学の教育理念を定めるに当たっては、キャッチ・フレーズが必要である。金沢工業大学の場合は、「自ら考え行動する技術者」である。

（川邊氏）金沢工業大学では、「アウトカムズ」を重視し、特に卒業生、企業、社会の評価に注目し、卒業生アンケートの結果を指針として教育方針の適否の判断材料としている。教育改革の意識を持続し、改善を継続していくことが今後の課題である。

・教育の成果について（その２）：教員評価に各教員による教育成果が反映されているか。もし反映されているなら、どのようにしてか。またそれは、教育成果の向上や教員へのインセンティブとして有効に機能しているか。

（川邊氏）教育成果と教員評価のシステムがあるかという点については、金沢工業大学では、教育成果等を点数化して教員を評価する仕組みはない。教員評価は学長が行っており、理事長は、教育権、人事権を全面的に学長に委任している。授業評価アンケートは、人事評価には使わないとの条件で実施している。学長は、新任教員に、教育に５割、研究に３割、大学運営と社会貢献に２割の比重を置くことを求めている。大学の紀要（ＫＩＴプログレス）や学会での教育実績の発表や教え子の実績も考慮している。

・教育の成果について（その３）：卒業生の進路の傾向や就業状況などは、改革前とあとで、また、改革後しばらくと現在とで、具体的にどのような変化があったか。

（川邊氏）進路データでみると教育改善と就職実績は必ずしも直結していない。教育改革を進め、ようやく成果が認められはじめた平成１６年度には、就職率が９９．７％に達した。改革が始まって６年間で「自ら考え行動する技術者」というラベルが定着し、トヨタ、本田、松下などの企業にも採用されるようになった。

・その他の質問

（山川先生）金沢工業大学が、教育のアウト・カムズの検証のために卒業２年後に行っているアンケートは、マークシート方式で点数化するものなのか、それとも記述式で行っているのか。

（川邊氏）マークシート方式と記述式を組み合わせて行っている。アンケートの結果は、点数化と分析を行って、Web で公開している。

（中村先生）教育５割、研究３割というのは、全ての教員の評価に共通する基準なのか。研究のみという教員はいないのか。

（川邊氏）研究所には、授業を持たない、研究専任の教員がいるが、数はごくわずかである。一般の教員には、先程の基準が一律に適用される。

（中村先生）研究水準と教育水準はリンクしており、研究水準の確保が教育水準の向上につながるという面があるのではないか。

（川邊氏）金沢工業大学では、授業料は全て学生に還元されるべきであり、教員の仕事量の５割を教育に向けることを求めている。

（青海先生）学生の意思が、どのように教育改革に反映される仕組みを作っているのか。

（川邊氏）学生が教育改革に関わるためには、学生に「人間力」が育っていないといけない。そのために、金沢工業大学では、多くの授業でグループ教育を取り入れており、「人間と自然」という科目の授業では、グループ討議の方法を教えている。金沢工業大学の学生の特徴は、プレゼンテーション能力の高さであり、就職活動に際して学生もそれを実感している。訓練を受けた事務職員が、インストラクターを務めている。

また、大学側、教員、学生（学友会）が参加する学園協議会が、年に１回開催されている。協議会で学生から休講が多いとの意見が出たことがあり、可能な限り休講を減らすための措置をとった。

・全般的な質問として：ＦＤ事業を全学に広げ、教育改革を進めるための秘訣は何か。またその際事務員と教員の役割分担や連携はどうしているか。

（川邊氏）ＦＤ事業の全学化については、授業料を学生に還元するという意識を教員が共有することが必要である。

（川邊氏）教員が効果的授業法を身につけるために、平成２年からＦＤ研修会を実施している。教員は、最初は不満顔だが、研修が終わる１週間後にはその成果に納得している。本学の教員は、学生は、お客様であるという意識を持っている。また、授業評価アンケートを元に、教員のＷＧで改善策を検討し、シラバスの行動目標に反映させている。

（川邊氏）教育改革の秘訣は、学長のリーダーシップと改革の継続である。金沢工業大学では、１０年で教育改革の文化が形成された。委員会の活動を通じて、教育改革の方針について教員の意見が反映され、それに事務局も関与している。委員会での検討結果は、トップに上申され、トップダウンとボトムアップの双方向で教育改革が行われている。

4.3. ワークショップ

ワークショップ事業は、初めての試みであった。11 月末に講師の承諾を得たので、冬休みの前後と後期授業終了後の時期を念頭に企画した。ただ、後期授業終了直後の第一回ワークショップは、福井では 28 年ぶりの豪雪のため年末に延期した。

３つのワークショップのうち２つは、（独）メディア開発センター（NIME）に「FD の導入・方策」と「インストラクショナル・デザイン入門」というテーマで出前研修を依頼した。これに続く実践的な研修は、各自が NIME に出かけて受講（無料）できる。もう一つのワークショップは、少し毛色を変えて、「コミュニケーション技術」をテーマに選んだ。この研修は、後の報告にあるように予想を超えて好評であった。3 ワークショップとも少人数であり、かつグループ作業を伴うために、教員が学部横断の交流を楽しむことができ、非常に好評であった。

２回目と３回目のワークショップでは、生物資源学部の受講者が同学部の教務日程の都合でほとんどいなかった。また小浜キャンパスでの開催は 1 度も実現しなかった。そこで、生物資源学科、および小浜キャンパスの FD 部員を中心に、2006 年度に、同じ講師による研修を開催する予定である。参加者数を期待するには、学科単位で日程調整して開催することも効果的であろう。また、研修期間は半日か、長くてもお昼前後（10:00～15:00）が妥当であろう。以下にそれぞれのワークショップの模様をまとめる。

4.3.1. 第 1 回ワークショップ「大学の授業改善の方策」

■ 概　要

FD をめぐる内外の概況、よい授業の条件を概観したうえで授業におけるメディア利用の効果の問題、動機づけの教授デザイン、ＦＤ促進の方略について概説します。また、授業改善と FD 促進策についてのグループ作業を行います。

日　時　12/28/05(水）10:00-15:20 22 日が大雪のため延期した。

出席者　20 名（午後演習 16 名）　申込欠席者　2 名

経済学部 6 名、生物資源学部 2 名　看護福祉学部 8 名

学術教養センター4 名　情報センター2 名

講　師　佐賀啓男・（独）メディア教育開発センター（NIME）教授

教育メディア研究、視聴覚教育研究、教育工学

主な研究課題

1. メディアを用いたファカルティ・ディベロップメントの研究

高等教育教員のメディア FD を開発・支援するシステムとリソースを研究、開発する。

2. メディア利用の教授・学習場面の認知的性質に関する実証的・規範的研究

メディアを利用した教授・学習過程の特質について、実証的方法と規範的吟味から研究する。

3. 日本近世俳諧・美術分野のデジタル・オンライン教材の開発研究

内　容　FD をめぐる内外の概況、よい授業の条件を概観したうえで、 授業におけるメディア利用の効果の問題、動機づけの教授デザイン、ＦＤ促進の方略について概説する。なお、授業改善と FD 促進策についてのグループ作業を行う。

■ 講　演（10:15～12:15）

当日の資料を次のページから掲載する。画像化しているため見にくい。鮮明な資料は、次のサイト http://www.s.fpu.ac.jp/fd/shop/05ws1handout.ppt　からダウンロードして利用されたい。

大学の授業改善の方策

FD、メディア利用、インストラクショナル・デザインをめぐって

佐賀啓男
(メディア教育開発センター)

1

大学審議会のFDへの提言

- 学生の学習を充実させるために、教員の教授内容・方法の改善への取組み(ファカルティ・ディベロップメント)を積極的に推進する必要がある(平成3年2月答申『大学教育の改革について』)
- 学生の学習に配慮した教育プログラムの提供とともに、教員の教育能力・意欲の向上が期待され、そのために欧米の大学で広く普及している教員の教授内容・方法の改善・向上への取組み(ファカルティ・ディベロップメント)を、我が国でも本格的に導入していく必要がある(平成3年5月答申『平成5年度以降の高等教育の計画的整備について』)

2

FDの実施状況

- 文部科学省調査(平成10年、13年)から

	10年	13年
シラバスを作成	538大学(9割強)	659大学(98%)
FDを実施	193大学(約3割)	409大学(61%)
新任教員研修会	62大学	138大学
教員相互授業参観	20大学	101大学
研究会の開催	111大学	—
センター等の設置	23大学	63大学
メディア・ITの利用	不明	不明

3

アメリカ・イギリス等の大学

- 教育活動支援センターの存在
(ティーチング・アンド・ラーニング・センター、FDセンター、メディア・センター、ヘルプ・デスクなど)
- 授業改善の支援、助言
- 教材制作の支援、助言
- 研修の提供
- コンピュータ利用の支援、助言
- 優秀教員の顕彰、など

4

FDのモデル(アメリカの一例)

- 組織の次元 :学部の管理運営、学部内のチーム形成、コンフリクト管理、意思決定
- 教授活動の次元 :教授活動の評価、クラスルームの診断、教育方法とメディア・テクノロジー、カリキュラム開発
- 個人的成長の次元 :個人的成長のワークショップ、生涯計画のワークショップ、ファカルティとの面接、対人的技能の育成、支援的・治療的カウンセリング -Bergquist & Philips(1975)

5

大学の授業で使われるメディア

- 平成3年調査(N=366、5件法)

メディア	平均	SD
OHP(書画カメラ)	3.1	1.5
VTR	3.1	1.3
コンピュータ	2.4	1.5
スライド	1.9	1.0
テープレコーダー	1.8	1.2
ビデオディスク	1.4	0.9
16ミリ映写機	1.3	0.8

6

よい授業のために重要なこと

32項目(5件法)のうち、上位5項目

1. 講義に意欲をもってあたる(4.6)
2. 講義内容の準備を十分にする(4.5)
3. 用いる教材の準備を十分にする(4.5)
4. 講義開始時に全体計画を学生に示す(4.3)
5. 明瞭な声と話し方で話す(4.2)

7

ITに関する教員の意識

	よくあてはまる	ある程度あてはまる	計
自分のIT利用能力が低い	19.3	41.5	*60.8*
利用による教育効果がない	4.6	23.4	28.0
授業で利用する必要がない	8.3	24.2	32.5

(3項目間に相関)　2001年NIME通信制課程担当教員の調査

10

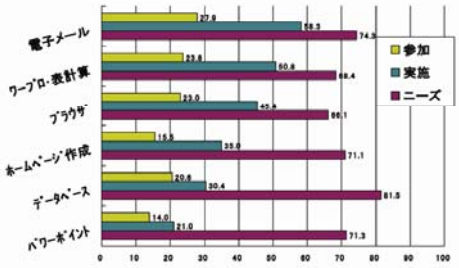
いい授業の条件:教員の意識

因子分析の結果

- **第1因子:意欲と準備**(講義に意欲をもってあたる、内容の準備、教材の準備、学生の講義への積極的態度など;寄与17%)
- **第2因子:学生の参加促進**(グループ討論、実際的作業、質問とその引き出し、学生の名前と顔;寄与12%)
- **第3因子:視聴覚教材利用**(事象解説のための視聴覚教材利用、事例提示のための利用、導入のための利用、技能演習のための利用など;寄与11%)
- **第4因子:教科書利用**(教科書中心に進める、講義中の小テスト、テキスト指定など;寄与 7%)
- **第5因子:講義の構成の提示**(毎回に講義の全体での位置を示す、全体計画を示す、各回に講義内容のまとめなど;寄与 6%)

8

研修のニーズ、実施、参加



(「有り」%)　2000年NIME機関調査

11

高等教育機関のe-Learningの実施

インターネット授業の配信 (%)

	4年制大学	短 大	高 専
行っている	16.5	7.7	11.9
計画している	22.6	14.4	28.8

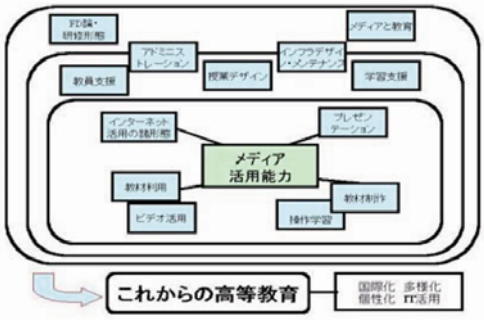
単位認定しているインターネット授業 (%)

	4年制大学	短 大	高 専
行っている	4.3	2.0	1.7
計画している	5.6	4.0	10.2

2003年NIME調査

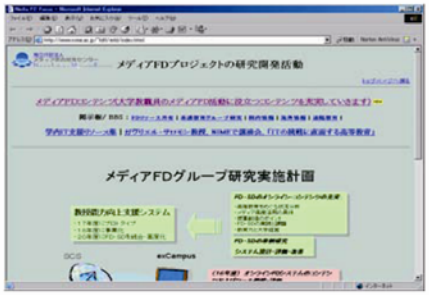
9

メディアFDの枠組み



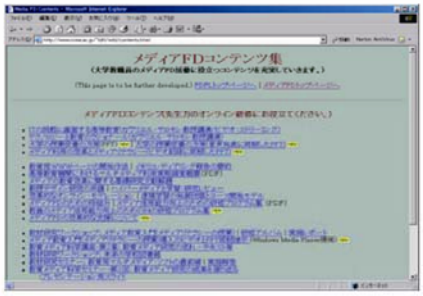
12

ウェッブサイトの開発・運営（1）



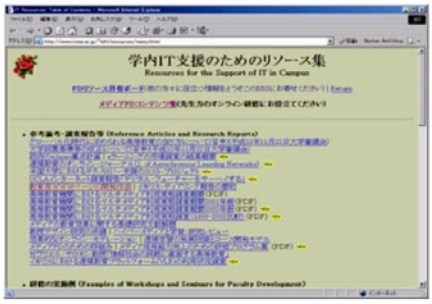
13

ウェッブサイトの開発・運営（2）



14

ウェッブサイトの開発・運営（3）



15

ウェッブサイトの開発・運営（4）

16

メディアの教育効果について(1)

メディア比較研究(1)

- 新しいメディアの利用を
- 伝統的教育方法と比較し、
- 教育効果を検証する。

［映画、スライド、テレビ、OHP、ティーチング・マシーン、コンピュータ…］

17

メディアの教育効果について(2)

クラークの批判

Clark, R.E.(1983).
Reconsidering Research on Learning from Media.
Review of Educational Research, 53(4), 445-459.

18

メディアの教育効果について(3)

テレビの教育利用研究

Chu, G.C. and Schramm, W. (1967).
Learning from Television; What the Research Says, NAEB, 1979.

19

メディアの教育効果について(4)

Chu & Schramm (1)

- 望ましい条件のもと、人々はTVから効率的に学習。
- TVは、適切な位置づけで利用されるとき、学習の道具としてもっとも効果的。

20

メディアの教育効果について(5)

Chu & Schramm (2)

- 色彩は、それ自体では、学習を増進するようにはみえない。
- 視覚的装飾それ自体 は、特に有用な手段ではない。

21

メディアの教育効果について(6)

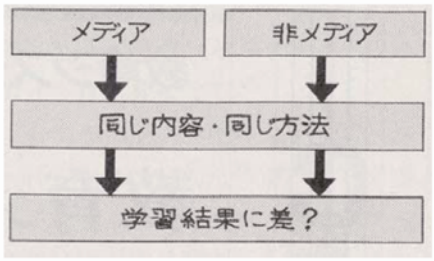
Schrammの結論

Simple Television and Active Participation

22

メディアの教育効果について(7)

メディア比較研究(2)



23

メディアの教育効果について(8)

Clark(1983)のレビュー

ちがう教師 → 同じ教師
短い期間 → 長い期間
↓ ↓
学習に効果 *効果消失*

内容・方法の違い、新奇性効果

24

教育メディア研究の教訓

- メディア自体ではなく、内容と方法が重要
- 効率（距離・時間など）と効果は別
- できることと生じることは別
- 実際はたらいた要因は何かが大切
- 学習者が学習に参加することが大切
- メディアの教育場面への位置づけ方が大切
- 経済的・経営的判断も大切

25

例：授業における パワーポイントの利用

- コンピュータないしパワーポイントの利用それ自体が、直接に教育効果に結びつくわけではない。
- 教育効果は、基本的に、授業の進め方、教授法、パワーポイントのスライド・コンテンツ、その構成や配列法、提示のスピード、口頭での説明との関連のしかた、明瞭な音声、教師の態度や熱意などに依存する。
- しかし、パワーポイントは、授業における「効率」の側面に影響する。使う価値はある。

26

インストラクショナル・デザイン

- 教育活動を効果的にするための計画
- よい教材を開発するための計画
- メディア・プログラムの計画
- 教員への助言者・支援者としてのデザイナー
- さまざまな教授デザイン・モデル
  [行動主義的モデル、完全習得モデル、認知主義的モデル、動機づけのモデル]

27

動機づけの教授デザイン(1)

ケラー(1983)の教授活動の動機づけデザイン

- 興味：学習者の好奇心が喚起されるか否か、そして、それがいかに適切に持続するかどうか。
- 適切さ：教授活動が、学習者のニーズを満足させ、個人的目標を達成するのを助けるか。
- 期待：学習者が学習にどれくらい成功できると知覚するか。
- 満足：学習の結果が、学習者の内在的な動機づけと外側からの報酬にいかにかかわるか。

28

興味を増進する方略(1)

- 方略1．好奇心を増すには、新奇で不一致で対立を含み、逆説的な事象を使用する。現状に不意な変化があるとき、注意が喚起される。
- 方略2．好奇心を増すには、抽象的になってしまう材料の中に、個人的、感情的な要素を入れるような逸話などの工夫を使う。
- 方略3．好奇心を喚起し保持させるには、人々がすでに知っていることや信じていることについてより多く学習する機会を与えよ。しかし同時に、適切な量のなじみが薄く期待していないことも与えよ。

29

興味を増進する方略(2)

- 方略4．好奇心を増すためには、なじみが薄いものをなじみ深く、なじみ深いものをなじみ薄いものにする比喩を利用せよ。
- 方略5．好奇心を増すには、学習者を、問いの生成と探索へと導け。： 認識的好奇心を促進させるために、学習者が状況の中から自ら問いを見出し、その解決に向けて、探索していくように導く。

30

適切さを増す方略

- 方略1. 達成へと努力する行動を増すために、中程度にむずかしい条件のもとで、卓越さの基準を達成する機会を与えよ。
- 方略2. 自己の力量感にかかわる動機を増すために、選択や責任、そして、対人的影響に資する機会を提供せよ。
- 方略3. 帰属感を満足させるために、信頼関係を確立し、危険のない協力的な相互作用の機会を提供せよ。

31

期待と満足にかかわる方略(1)

- 方略1. 成功の経験を増すことによって、成功への期待を増せ。: 課題に成功したという認識そのものが、次の成功への期待を増す。
- 方略2. 成功のために何が必要かを示すことによって、成功への期待を増せ。
- 方略3. 学習者自身が、成功に至るプロセスをコントロールしているという認識を促すような教授上の工夫をせよ。

32

期待と満足にかかわる方略(2)

- 方略4. 学習者に、成功を個人的努力と能力に結びつけるのを助ける帰属的フィードバックを使うことによって、成功への期待を増せ。:成功の原因を、学習者自身の努力と能力に求めさせること 。

- 方略5. 教授活動への内在的満足を保持するために、外在的な報酬よりも、学習課題に内在する報酬を利用せよ。

33

期待と満足にかかわる方略(3)

- 方略6. 教授活動への内在的満足を保持するために、予測できて明白で随伴的な報酬ではなく、期待外の非随伴的な報酬を用いよ。あまりにもあからさまな報酬は、課題への内発的関心を減ずる。
- 方略7. 教授活動への内在的満足を保持するために、脅しや監視や外的な行為評価ではなく、言語的賞賛と情報的フィードバックを用いよ。

34

効果的メディアFD支援（1）

- 学内にメディアFD担当部門をつくる
- メディア利用、授業設計・評価、教材開発の専門家を配置してワークショップやセミナーを企画・運営
- 組織的・人的なインフラをつくることがきわめて重要
- この部門がないと、メディアの活用は、教員個人の努力と負担にまかされたまま

35

効果的メディアFD支援（2）

- メディアとITに関する全学的なポリシーを成文化して、教職員に示す
- 戦略、利用者と技能レベル、インフラ、訓練、支援策など
- 目標と、それを実現するためのスケジュールと方略の作成
- 定期的に達成状況の評価

36

効果的メディアFD支援（3）

- コンピュータ・センター、情報処理教育センター等に「ヘルプ・デスク」を常駐
- 相談、助言、問題解決；面談、出前、電話、インターネット、印刷リーフレット
- 職員採用、大学院生バイト、人材派遣

37

効果的メディアFD支援（4）

- 教室のメディア環境を改善し、メディアとITを使いやすくする
- 使い勝手の改善
- 機器の配置やシステムの改善
- 標準的に利用するソフト等の利用マニュアルの整備、インターネットによる提供

38

効果的メディアFD支援（5）

- 教員グループの教材開発等を促進・支援する
- 教員集団（学科、専攻単位など）、自主的教員グループの活動に対し、特別な戦略的予算をつける
- FD担当部門が、教員の教材開発プロジェクト等の運営を技術面で支援

39

効果的メディアFD支援（6）

- 学内全体に教育活動改善の文化的な雰囲気を醸成する
- FD担当部門が中心となり、教員を励ます雰囲気づくり
- 優秀な教員や教員グループを、毎年、顕彰することがあってもよい

40

効果的メディアFD支援（7）

- 学外の機関が提供する情報や活動を積極的に利用する
- メディア教育開発センターが提供するサービス（教材開発、研修、SCSなど）の利用
- FD担当部門のウェッブ・サイトにリンク集を整備
- 他の大学のFD担当部門との交流を図る

41

NIMEの研修をオンライン化

メディアFD
プロジェクト

ビデオストリー
ミングと関連資料

形成的評価の
実施

オンラインコース
の拡充へ

42

http://pinball.nime.ac.jp/mediafd/fdit_top.html

43

グループ作業と発表

- 動機づけの教授デザインを踏まえて、より具体的に授業を改善する方策を提案してください。
- FD支援方策を踏まえて、御大学における具体的なFDの促進方策を提出してください。

44

おわりに:

- もう少しの工夫
- もう少しの準備
- もう少しの熱意
- もう少しのメディア技能
- このなかのひとつでもいいから始めてみましょう。

ご参加、ありがとうございました。

45

福井県立大学FD研修会

- 新任研修
  - ✓ 教務、学務、機器操作、学生の特徴、その他相談
- FDセミナー
  - ✓ FD活動に関する話し合い、講演会など
- FDワークショップ
  - ✓ 演習を伴う研修
- 他機関主催のフォーラムや研修会への参加

46

■ 質疑

Q　厳密な成績評価についてどう思うか

A　学生が授業に満足するかどうか、納得するかがより重要

Q　GPA を導入する大学が増えているがどうお考えか

A　自分が卒業した ICU ではどの当時からGPA を使っているが

　とくによいとか悪いとか意識していない。

Q　FD よりアカデミックディベロップメントAD のほうが重要ではないか

　教員あるいは授業の改善より枠を広げ、学生の就職、学生と教員

　が連携した研究活動の展開、など

A　京大など FD に、学生が教員と同等の立場で参加する例はみられる

講演される
佐賀啓男先生（メディア教育開発センター）

■ 演習（ワークショップ）　13:00～15:20

（１）午後演習時グループ構成

　グループ１　津村　片山　菊沢

　グループ２　岩崎　村井　斉藤　田中

　グループ３　畑野　大川　細谷　小林

　グループ４　木野　新宮　ユン　フィアラ

（２）代表発表

１．授業デザインに関する演習

　スライド 31-37 に対応する具大的な方策を各自 5 枚のカードにかき、KJ 法でリーダが整理し、議論の後まとめる。グループ・リーダーは、津村・岩崎・大川・木野各氏

グループ１　報告者 津村文彦講師

授業改善の方策：学教センター・情報センター

（１）具体性のなかでの学習：興味の方略２、４

　裁判の傍聴の機会を設ける

　各自が原告・被告・裁判官に扮して模擬裁判の実施

　ゼミの素材として最新の犯例を取り上げて討論

　情報科学での馴染みのない概念を「近所に住むおばあちゃん」の例で紹介

　抽象的な概念を具体化する際に、まずは絵に描かせて図像化させる

（２）学生の積極的参加の促進と学生の意見のフィードバック：興味の方略５

　学生のコメントの授業への反映：質問カードの利用、WebCT の利用

　プレゼンテーション、グループ学習の学生相互の自己採点

　学生の顔と名前を覚え、教員が指名して発言を促進

（３）テスト・課題の方法的工夫：適切さの方略１，期待と満足の方略１，２

　WebCT を利用して課題を採点

　オンラインテストでは回答を出さず、教科書と授業で問題解決をさせる

　まずはできているところを褒める

自信を付けさせる基本課題と、能力のある人に刺激を与えるアドバンスト課題の併用
学期途中での成績経過報告：WebCT の利用
小テストを実施し、答案の良否について匿名で解説し、その後修正答案を提出させる

グループ２　報告者 岩崎行玄教授

授業デザインについて（興味付け、適切さ、期待、満足度に関する工夫）

興味づけ

１．暮らしの中から問題を設定
農薬とＧＭ植物の長所と短所
ゲノムプロジェクトの発展と人間の遺伝子病診断
統計学とギャンブル
食品ラベルに記載されている化合物の役割
機械の歴史（誤った知識、知られていないことを提示）

ワークショップの風景

２．講義で用いた用語を、正しい英語で確認する
３．スライドの一部に、わざと誤りを入れておく
４．学者の成果だけでなく、人物像を紹介
５．大きな成果は、１人の発見だけでなく、多くの科学者の連続した成果の延長上にある。

適切さ

１．問題を提示してから、１週間以上、解答を遅らせて示す。
２．質問の癖をつけるために、質問者を指名する（質問できるような動機付け）
３．グループ実験でも、１人１人が遂行するようなカリキュラム
４．期間ごとにグループ改編して、新しい人間関係の構築

期待

１．ミニッツペーパーを毎回行い、感想、質問を提出。次週に返事。学生の自己満足度の向上。
２．就職、資格、検定などと関連づける。

満足度

１．学生の質問をほめる。
２．学生実験と講義をリンクさせる。
３．解決すべき課題を、選択方式で回答させる（課題提案ができるようになるまでのつなぎ。課題提案ができるようになるための動機付け）

グループ３　報告者 大川洋子講師

１．講義・演習において具体例を用い、抽象化から具体化へ
　１）臨床における看護実践や地域活動などの具体的事例を提示
　　・墜落分娩事例、立ち会い分娩事例など
　　・自分の活動経験など具体例を話す（興味を増進する方略）
　２）学生の成功体験や失敗体験を示したレポートや事例を提示
　　・寝たきりの患者を車いすへの移動に成功し、日常生活動作への意欲を引き出せた学生の実習事例

・学生がたてた活動計画等をもとに、「なぜいいのか」「なぜこうなると思うか」等討議させる。他者の考えをもとに話すことで、自分の興味が広がる。

２．事例提示した患者への看護援助をシュミレーションするためにグループワークの導入と発表
・学生を対象にした母親教室の実施や健康教育を実施し、それをもとに話し合う。
・成功のために何が必要か自分たちで考えることで成功への期待が増す。
３．学生が病院実習や地域保健活動などの実習の際に、個々人の体験を学生間での討議と教員からの助言
・「なぜ」の発問をし、学生に考えさせる。
・学生の思考が深まり、興味が増す。
４．学生が成功に至るプロセス
・教員がヒント・コメントなどを学生の援助場面でタイムリーに与える（特に実習)。
・学生が援助に対し、患者から直接が「よかった」「嬉しかった」などという反応を得ることがあったり、あるいは住民を対象に健康教育を行う際、対象に理解してもらえた体験をすることが、学生の充実感につながり、次への意欲につながる（期待と満足にかかわる方略)。

グループ４　報告者 木野龍太郎講師

経済学部のグループでは講義形式の授業を念頭におきそれぞれのメンバーの取り組みについてまとめました。具体的には以下のように分類することが出来ました。

（１）自分自身の経験を踏まえて講義を行う
・調査や自分自身の経験について話すことで理解を深めるようにつとめた（内容）
・自分自身がそれをどのようなやり方で習得していったのかを教えた（方法）
（２）授業の達成目標をあらかじめ示した
・新聞の経済欄が理解できるようになる、など
（３）学習者の好奇心を喚起させる
・ビデオ教材を用いて学習内容のイメージを持ちやすくする
・提示されたデータを基に図表を作成してみる
（４）小テストを行い、学習内容の整理、再確認を促す
・単元ごとに小テストを行う
・毎回、３行小論文を書かせる
（５）学生に積極的に発言させて授業への参加意識を持たせる
（６）達成目標に到達できたかどうかを確認できる小テストの実施
・直近の経済記事をネタに出題を行う
（７）成績優秀者の名前を掲示し、学習への意欲を高める

２．FD 施策に関する演習

スライド 38-44 に対応する具大的な方策を各自 5 枚のカードにかき、KJ 法でリーダが整理し、議論の後まとめる。グループ・リーダーは、菊沢・田中・新宮・細谷各氏

グループ１　報告者 菊沢正裕教授

(a) 効果的メディアＦＤ支援
(1)学内にメディアＦＤ担当部門をつくる
・学習・教育支援センターをつくる
・学習支援では，メディア作成，LMS 利用支援を，教育支援では
・教材（コンテンツ，フリップ，スライド，ビデオなど)の製作支援

(2)メディアとＩＴに関する全学的なポリシーを成文化して、教職員に示す
・全学レベルと学部レベルで適宜ポリシーをつくる
(b)2 年以内に目指すポリシー
・メールでの情報共有,（現在紙を併用中）
・LMS 利用率を 50%（現在 20%程度）
・ここで議論したような教育方法の DB を作成する（wiki などを使う）
(3)コンピュータ・センター、情報処理教育センター等に「ヘルプ・デスク」を常駐
・学習・教育支援センターに常駐．その技術者の雇用形態をどうするか
(4)教室のメディア環境を改善し、メディアとＩＴを使いやすくする
・学内無線 LAN を増強する
・学生 1 人 1 台 PC，PC 貸出制度やケータイ端末への対応,
(6)学内全体に教育活動改善の文化的な雰囲気を醸成する
・授業の相互参観の常時受け入れ
・年 1 度の参観レポート提出
・学生と授業参教員による授業評価をベースにしたベストプロフェッサー制度の導入
(7)学外の機関が提供する情報や活動を積極的に利用する

グループ２　報告者 田中武之講師

主な意見

・ＦＤに関して全学的なコンセンサスを形成し、ＦＤの相談窓口を設置する。
・パワーポイントの勉強会を開く。
・教育優秀な教員を顕彰する。
・関連の深い授業で、教材を共同開発する。
・コンテンツサポート事業の活用を促す。
・公開授業に、学長・学部長に出席いただき、その報告書を公表する。
・学生による教員人気投票
・各人が毎年ＦＤをすることが必要で、自己評価書を作り、自己管理する。そうすれば年々授業がよくなる。
・ＦＤを支援する外部機関の利用を推進し、また教員に情報提供する。
・教室設備の改善のため、たまには違う教室で授業をしてみる。

グループ３　報告者 細谷純子講師

1) 大学・学部全体で組織的な取り組みの時間と場を確保することで、意識改革を図る。
2) FD に関する発想や思い付きを具体化するために、専門的なサポート体制やサポートできる窓口（人材）や外部からのサポートシステムを作る。
3) 学長や学部長の参加する FD や AD 部門をつくる。
4) 他学部の教員や学生との交流の機会や時間を、FD 研修会などで確保する。

（例）

・ FD 研修会やカリキュラム検討等、学部・学科を越えて具体策を話し合う。
・ 卒業時の目標を大学全体で共有し、それにあわせてカリキュラムの工夫をする。入学時の学生の能力と卒業時のそれを比較し、大学教育の付加価値を明文化する。
・ 大学生、卒業生、看護職等からアイデアを募る。
・ 学部・学科を越えて、授業公開に参加する。

・ 学部・学科を越えて、学生に講義をする。
・ 講義、演習、実習、卒論など、一連の繋がりや到達目標を文章化する。

■ アンケート（10 名分、回答文頭の括弧内の数字は回答者番号を表す）

・ワークショップでよかった点
(1)各学部学科の教員との討議からヒントを得た
(2)他の学部での取り組みや自分自身の取り組みの意味について再確認できた
(3)グループワークで話し合ったこと、他のグループの意見をきけて勉強になった。自分の振り返りにもなったし、今後の課題もみえてきた
(4)午前中と午後わずかの参加でしたが、学部を越えてこのような研修をする機会が大変重要だと感じました
(5)やはり聴くだけでなく参加することが重要です。12 月 28 日は開講日としては悪くない（講義期間中では授業や委員会と輻輳して出席しづらい）
(6)参考になった。テーマは適切。教室も L104 で正解
(7)グループ作業は面白かったです
(8)自分の授業について改めて考えさせられた
(9)横の情報交換ができて楽しく参加できました
(10)グループワークで互いの意見を交換できたところ

・改善すべき点
(1)日程
(2)グループ作業にもう少し時間がほしい
(4)日程はやはり考慮されたい。各学期の最終日等に定例で実施するなど位置づけたらどうかテーマをもう少し絞り込んで短時間で行えば参加者も増えるのでは？
(5)時間が足りませんでした。ワークショップのテーマはひとつに絞ったほうがよかったと思います。事務職員も参加してもらうべき。
(6)時間不足だった、日程は、積雪期は避けるべき
(7)２コマ（90 分×２）でお願いしたい
(8)もっと時間をとってもよい
(9)やはり広報による参加促進でしょう
(10)日程をもう少し前に（ただ今回は雪で延びたので仕方ないかも。例えば学期の始まる直前などはどうか。そうすると学期の授業に反映できる。講義の前半部分が少し冗長、もう少し短くてもよかった。

・今後のワークショップのテーマ
(1)グループワークを希望
(2)初等・中等教育と高等教育、高等教育と職業教育のブリッジ教育について（とくに文系の場合）
(4)具体的な授業（メディアを導入した授業など）の例をだして事例検討のような形で行う
(5)個人の努力に負うものと大学・学部全体で組織的に対応するべきものにわけて議論するのがよい。前者は多いが、後者の機会は少ない。
(6)FD の成功例と失敗例
(8)話し方教室、話術、ジョークの入れ方など（落語教室でも参考になるのでは）

・今後のワークショップの開催時期

(3)授業や研究指導の無い時期（12/22 が卒論提出日なので本日のような時期か、それより早い時期）

(4)各学期の終わり、または月に 1 回定例化する

(6)冬季以外

(7)5,6,9,10,11 月

(8)春休み、夏休み、冬休み

・その他

(2)積極的な取組、お疲れ様。部会を通じて大学に要求やアピールできるよう願います。

(3)今日のような積み重ねが大事と思う

(4)午前中に意見のあった FD→AD という幅広い視野で行うのがよいと思う

(6)講演内容がよく整理されていてわかり易く、良かった

(8)もっと若い教員も参加するように働きかけるべき

(10)ベロフ先生の意見が非常に印象的。Academic Development として学生の関心をいかに高めるかも考えるほうがよい。また教育の基礎が研究であることからも研究についてもモチベーションを高めるような試み、教育と研究の連動も視野にいれる。

■ ワークショップを終えて(菊沢）

20 名の参加があり、予想以上の収穫でした。今後の FD 活動に明かりが見えた気がしました。教育方法に関する演習で得た成果は、簡単にまとめ、今後 DB のような形で蓄積したいと思いますが、とりあえずは HP にアップしていきます。佐賀先生には、22 日（予定日）に大雪が降ったため、新幹線の遅れを懸念し、急遽当日早朝に延期をきめました。大変お手数を　かけたうえに、延期した 28 日も福井は、12 月としては 20 年ぶりの大雪。でも先生講演にはじまり、熱の入った午後の演習は、参加者を大いに満足させてくれました。先生および御用納めの日にも関わらず、ご参加いただきました参加者にお礼申し上げます。

4.3.2. 第 2 回ワークショップ「コミュニケーション研修　〜聞かせ上手をめざして〜」

講師：　福田健先生　（株）話し方研究所
日時：　H18 年 2 月 21 日（火）　13:00ー16:30 迄
場所：　共通講義棟　L104
参加者：　15 名

- 研修内容

最初に福田先生から「話を聞いてもらうためのコミュニケーション」についての講義があり、その後、グループに分かれて討議を行って代表者が内容の要約のスピーチ、そしてそれを受けて福田先生からのアドバイスを含めた「話し方」についての講義、という３部構成で行われた。

第１部：講義

［１］話には相手がある　ー相手を聴き手にすることー
- ・コミュニケーションは人間関係そのものである。
- ・聞き手に話の効果の決定権がある。
- ・聴衆を聴く気にさせる工夫が必要である。
- ・話の「意味」や「効果」は聞き手に決定権がある。
- ・聴衆分析の重要性
- ・聴き手は親近感と警戒感をもって接する

［２］受信は理解ではない　ー「話せば分かる」は思い上がりー
- ・思いがけない受け止め方をされる
- ・相手を責めても自分のレベルは上がらない
- ・自分の思い上がりに気がつくこと
- ・相手と自分は違うことに気づき、違いを認めることが大切
- ・結果にくよくよしない、完璧を考えても仕方がない

第２部：グループ討議＆発表

４名ずつの４グループに分かれて、授業、講義で気になっていること、問題点、改善点などを「話す」ということを中心に話しあい、まとめる。その後、代表者が、聞き手を意識して、短く、中心になる話をスピーチする（1 分：300〜350 字程度）

グループ１

メンバー：福原隆子(看護学科)、斎藤正一(社会福祉学科)、山川修（情報センター）
発表者：牧野智恵

学生の求める（喜ぶ）講義・演習と、教員が学生に求める内容に最近大きなズレがあり、教員が伝えたいことを学生に伝え教えることが難しい。たとえば、ある課題（コンピュータープログラミングや看護過程の展開）に対して教員は「学生なりに苦労して築きあげることで身につけさせたい」と考え、安易に結果を教えず学生自身に考えさせようとする。しかし、学生の方はそういった形式のものは嫌がり、最終的な答えを求める傾向にある。特に、大人数を対象とした講義・演習ではその困難さを強く感じる。

グループ２

メンバー：畑野相子(看護学科)、北條蓮英(社会福祉学科)、菊沢正裕（情報センター）

発表者：小林明子

記録者：畑野・小林

＜話す、聞く上でのコミュニケーションの課題について話し合った＞

研修風景
講師は福田健先生（㈱話し方研究所）

１　受講動機が異なるグループの対象者に同時に話しかける時の対応

○学生の受講動機がモチベーションの高い対象者とたまたま受講した対象者で異なったり、学部・学科間での興味の持ち方が異なっていた場合、どの対象者に焦点を当てて授業を組み立てるのか難しい。内容が難しすぎたり、盛りだくさんにしすぎると上手くゆかない。

○工夫としては、身近なテーマで全員参加型のワークショップを取り入れると議論が弾む。受講動機が違っても、人数が多くても参加型の授業を取り入れると学生の学ぶ姿勢はより積極性が増す。また、学生に自分の意見を言わせると、他の学生の刺激にもなり効果的である。

２　話の目的が基本的知識の整理や確認である場合

○国家試験との関連において知識として伝えなければならないこともあるので、一方的な授業をせざるを得ない時もある。

○E-ラーニングや WebCT を使いテストなどを提示し、自らの力量に合わせて先へ進みながら学べる工夫をしている例が挙げられた。その場合、本当に学びたいと思う人が受講した場合は、自分の力や興味に合わせて取り組めるようなシステムになっている。また、学生はすぐに答えを求めるが、提示しないで多様な答えを考えさせることも重要である。

３　視聴覚機器を積極的に利用して話をする場合

○視聴覚機器をうまく導入できれば、視覚的により分かりやすく伝えることが可能である。

○しかし、実際には、資料作成に時間がかかり、教室の設備や機器自体のトラブル事が発生しやすい。

○そこで資料作成や各教室の機器環境の整備や機器利用時の支援システムがあると助かる。

グループ３

メンバー：高原美樹子(看護学科)、赤川晴美（看護学科）、津村文彦（学術情報センター）

発表者：田中求之

授業の形態やカリキュラムによって違いが多々あるが、話し方ということでは、１：場のコントロール（場の雰囲気を崩さずに叱るには？出席者数の調整）、２：どの程度でわりきるのか（50 名のうち 2 名でもいいのか？「わからなかったけど面白かった」のはよい授業なのか？）、３：バランス（分からせることと知識の伝達のバランスの取り方、丁寧に話すと遅れてしまう）の３点が共通の話題としてまとめられた。

グループ４

メンバー：塚越フミエ（看護学科）、大塩まゆみ(社会福祉学科)、細谷純子(看護学科)

発表者：細谷純子

講義、講演、少人数グループなど、集団によって話し方を変えている。その1つである講義は、連続して行うことや、伝えたい内容が沢山あるので、つい話の基本をなおざりにしてしまう。特に聴衆分析が重要だが、①世代間のギャップがある②学生の関心の差が大きいので、どこに焦点を当てるか迷う（国家試験に必要な知識もある）③聞き手の気持ちが分からない、などで、実際は学生を掴みにくい。それは、最近の学生は反応が少ないという特徴のためであると思われる。

第3部：総括

発表を受けて、具体的なアドバイスをしながら、まとめの講演があった。

□ 日々のトピックを取り込む
・話の発見のために、日頃の生活で身近なものに注目して、意味を裏打ちする具体例を探して、蓄える。
・日常の退屈さに降参しない、初心者の視点でものを見る
・慣れすぎないこと、うまくなりすぎないこと

□ 目標をどこに置くか
・最大公約数を見出す
・理解を目的とするか、理解したことを身に付けさせるのを目的とするのか
・分かり方の深さをどれぐらい期待するのか

□ 聴衆の層をいかに分析するか
・いかにつかむか

□ 表現を豊かにする
・表現とは、自分にしかわからないことを、相手に分からせる、というもの
・言葉の限界がある
・言葉の工夫が必要、言葉に敏感になること
・言葉の蓄え場所を自分の中に作る
・比喩、具体例、エピソードの活用
・ユーモア＝距離を持って見直す、視点を変えて見直す
・ビジュアル（のバランス）も重要

●研修の雰囲気・感想

講師は日常のありふれた出来事や体験(具体)を、ユーモアたっぷりに話して下さったので、教室には笑いが溢れてゆったりとしたひと時でした。そして、受講者は笑っているうちに概念(抽象)を理解していたように感じました。きっと、講義そのものが、「聞かせ上手になるために」の具体例だったのでしょう。

アンケート

講師作成のアンケートに12名の方が回答した。回答文頭の数字は回答者番号を表す。回収率80%、満足度の高かったことが伺える。参加されなかった方にも、研修の状況が目に浮かぶような回答文なので前文掲載した。

①	講師の教え方について（5 段階評価の 4.8）
1	ゆっくりでユーモアの比喩が多く分かりやすかった
2	間合いと比喩のすばらしさ
3	幅広い事例を参考に楽しく学べた
4	ジョークなど多くを交えて飽きずにきけた。自分の話し方と比べてゆっくりで間合いの長いところが特に参考になった
5	さすがコミュニケーションの専門家と思った。適切な箇所に適切な具体例を使い、魅力的だった
6	少しゆっくりすぎるかなと思うこともあったが、ポイントが明確で整理して聴くことができた
7	無駄がなくさすがと感じた。具体例の示し方、比喩の使い方などとても参考になった。
8	講和中心でしたがだれることなく眠くもならず多彩なお話がきけて大変楽しい時間が過ごせた。
9	間の取り方、声の質が聞きやすく、具体例を有効に使いながら聞き手に伝えていた。さすが話し方研究所所長さんだ。
10	ただのコミュニケーションではないこと、考えや態度も含む
11	具体例の話し方がビジュアルでよかった。参考にしたい
12	エピソードや体験談が具体的で分かりやすかった。ユーモアがあり、リラックスして聞けた。間の取り方が良かった
②	今回の研修は今後のあなたの業務に有効ですか？（5 段階評価の 4.3）
1	講義のみならず学生や患者とのコミュニケーションに役立つと思う
2	一般の状況と教室の違いはあるが、有効
5	具体例を使い、学生の興味をひきつけながらの授業するよう努力しているが、再度その事例で相手に何を伝えたいのか、意識したいと思う
6	早速生かされると思う
7	看護にとってコミュニケーションは基本であり、今回の講義も既知の内容ではありましたが、忙しさや慣れのために原則的なこと、大切なことをなおざりにしていることに改めて気づきました。
8	主として会話の方法に関する話が中心であったのに、教員の関心が内容に傾いていたため若干ズレは感じましたが、講師のほうも意識しておられた。業務というよりむしろ日常生活に役立つかもしれない。
9	改めて話とは？を見直してみたい。話し方診断書を使ってみます
10	日常の観察や視点の変え方が生きてくることを改めて感じた
11	講師の話し方が、セミナーの内容と合致していて大変参考になった
12	自分の課題を GW で出すことができ参考になる意見がきけた
③	講師のコメントをどう受け取りましたか？（5 段階評価の 4.4）
1	経験・知識が豊富なのでコメントに説得力があった
2	大学の教室に当てはまらないものについては少し工夫が必要か
4	大教室での場のコントロールの方法（叱り方など）についてもう少し具体的なアドバイスがあればなおよかった
7	平易な表現の中にも本質をついた鋭い指摘をされていた。
8	私自身、話の本筋より傍話の「人生の知恵」的な話に大変感銘を受けた
9	グループワークの発表に対し適格コメントでした
10	具体例と比喩がよく分かった
12	「まみむめも」はなるほどと思った。日頃から語彙の集積や、気づきが大切と思った。私も最近日記を付け出したが、毎日が単なる連続でないことにびっくりしている
④	受講時間について（5 段階評価の 3.5 ただし、5 長すぎる　3 適当　1 短い）
2	3 分スピーチを全員する時間がほしい

3	もう少し短いものを回数多くすると多数が学べてよい
7	聴き取る力があってこそ、話す内容にも説得力が伴う。人柄がコミュニケーションに現れることが素直に理解できた
9	途中休憩をいれていただいたが、少し疲れた。学生の気持ちが分かった
⑤	実習の効果について（5 段階評価の 4.2）
1	一般教育の教員が講義の中で何を悩んでいるかを聞くことができ役立った
3	パワーポイントなどを使うべきと思っていたが、今日の話は、自分のアイデアを自信をもってやればよいと確認
7	問題に出会うと留まってしまう。その原因はなにか、さらに突っ込んだ討議をし、皆さんの意見を聞きたかった
8	気分転換にもなった
9	分野の異なる教員の話を聞き、各自が講義を工夫されていることが分かった
10	実際にしてみると目配りができない
11	話をするなかで問題点が整理されたのが良かった
12	日頃話すことの少ない先生方と話せて大変有意義であった。もっと話す時間があってもよい
⑥	この研修のなかで発見した、自分自身の問題点は何だと思いますか
1	見直すという経験がないことに気づいた
4	未知と既知のバランスへの意識の欠如、講義の目標をはっきりさせることが必要
6	話し方そのものの工夫と、内容を精選し、意味が伝わるようにすること、聴衆分析の不足
7	取捨選択に迷う、一度に多くを求めすぎる。他の価値観やものの見方に影響されやすい（根拠のなさ、成り行きの不安、他からの評価など）
8	NVC にはもっと工夫すべき点がある
9	伝えたい内容と量を聞き手にいかに伝えるか、間のとり方、聴衆分析をしっかりすること
10	具体例をあげて説明することが大変、目標をきめること
11	慣れてくると学生の反応をみないで授業をしている
12	目標を明確にすること、何をどこまで教えたいか明確にすること、参加型授業の工夫
⑦	その問題を改善する方法を、研修の中で見つけましたか？（３段階評価の 2.7、３見つかった、２わからない、１みつからない）
2	聴衆分析は学生を理解する上で有効
3	今の方法でよいと確信
4	まだまだこれから考えないといけないが、一般教育（自由科目）ができること/すべきことを考えるうえで有効だった
6	授業で話す内容を絞り込み適切な例を選んで意味付けをする
7	頭ではわかっていても実際にできないところに葛藤がある。ハウツーの方法論を学んで改善できることもあるが。結局、自分自身の力量（分析力や統合力など）をつけることに集約されるのかと思う
8	自身の力量（分析力や統合力など）をつけることに集約されるのかと思う
9	3 分間スピーチは有効かもしれません。チャレンジしてみます
10	語彙が豊かになるよう言葉を集める
12	話をしながら学生の反応を観察すること
⑧	テキストシートについて（5 段階評価の 3.9）
2	頁を振っていないので資料にとらわれずよい
4	今回は先生のお話を中心に進められたので配布物などはこの程度でよかったと思う
6	情報量が少なく、明確であること

8	改めてゆっくり見直してみます
11	後で自分で学習する参考になるので良い
12	分かりやすい
⑨	その他、感想・ご意見・ご希望をお聞かせ下さい。
4	グループ討議の時間に他学部の方たちと意見を交換できたのがよかった
5	相手の気持ちを引くようなトピック、ユーモア、比喩を使えたらと思いますが、苦手です。比喩うを使うには意識の訓練が必要と思いますが、普段どのような努力をすればいいでしょうか。比喩というのは、相手にイメージが広がり、効果的と思う。
6	自分自身を見直すきっかけになりました。例題も生き生き伝わってきました。話方をしっかり考えることは、ある意味で生き方を考えることにもつながると実感できました。電車の中で席を譲ってくれた女性の例、早速マイナスを恐れずという心構えで、周囲の人とともに実行していこうと思います。
7	ここ 2 年ほど取り組んでいる研究の関係で、会議の内容をテープに取り逐語録を作成してきた。これを読み返すと自分自身のくせがよくわかり、恥ずかしいやら落ち込んだり。自分自身を知ることが何よりも大切と痛感している。
8	大学での話なら 1．講義、2．演習、3．対話のような状況ごとの話がきけたらと思う。
9	他学部、他学科の教員と討議できたことが有意義だった

参加者メモ

「話が上手くならなくてもよい」「無理に面白く話そうとする必要なし」「聴く相手のことを考えることが大事」という前置きに始まり、コミュニケーションのとり方を、講師の、上手い比喩と体験談、間合いの上手な話によって学んだ。あっという間の、3 時間半であった。

■ 講師の置き土産：話し方の「まみむめも」
まてよ、みなおす、むき（視点）を変える、目配り、問題意識

■ はなし方ポイント

０）基本

・聴衆分析
聞き手の関心事に触れる、本気で相手の中に入る
反応のないのは親近感と警戒心の両方
・自分と相手は違う、相手の理解の仕方はまちまち
・自分にしか話せないことを話す
・話したあと、うまくいかなくても、くよくよいしない

１）目的と基本的な方法

・目的をきめる
目的わからせることが目的か、わからせること、実際にやれるようになること？
・わかり方の深さをどこにおくか
興味関心だけいだかせればよい場合もある　期待度と、時間のかけ方
・目標をどこにおくか
・聴衆の層をどこにおくか
・話し手と聞き手の両方が話しに責任を共有する
聞き手が理解できないのは、話し手だけに責任があるわけでも、聞き手に責任があるわけでもない

２）教室で

・アイコンタクトは重要
・間合いの大事さ
・比喩（意外性や類似性 Z)、具体例は事前に、常時考えておく

・強い言葉は不要、優しい言葉でしかる
・指圧のようにツボをおさえて話す、しかる
・20 分であきがくるのでジョークをいれる

3）教室外での訓練など
・時間がないので話せないは、ウソ
1 分 350 字、会議の発言を 1 分にまとめるなど毎日トレーニング、3 分発表会

4.3.3. 第 3 回ワークショップ「インストラクショナル・デザイン入門」

優秀な学生に一方的に教授する教育から学生一人ひとりの能力に応じた学びの環境を提供することが求められるようになった昨今、授業の目標を設定し、教材を工夫するなど授業を設計する、インストラクショナルデザインが注目されています。前回のワークショップに続いて、メディア教育開発センターから講師をお呼びして下記のワークショップを開催することに致しました。なお、小浜キャンパスでは、来年度の開催を考えています。

概　要

■ 日　時　2006 年 2 月 22 日（水）9:30-16:30 および　23 日（木）9:30-12:10
■ 場　所　共通講義棟　L104
■ 講　師　（独）メディア教育開発センター（NIME）特定特任教授　　内田　実氏
■ テーマ　「インストラクショナルデザイン入門」
■ 参加者　申込み　18 名　参加者　17 名（22 日 15 名、23 日 11 名）
■ 研修概要

1 日目午前には、セミナーの学習目標、インストラクショナルデザイン ID の概要を学ぶ。午後は、出席者がなぜこの研修をうけたかを自己のバックグランドとともにスピーチ、その後、ID の各プロセスの実践方法を学習した。２日目は、学習モデルや教育コンテンツに関する設計や制作プロセスを学ぶ。最後に、大学が生き残るための方策、ID の学内普及、カリキュラム構築への利用などについてフリー討議した。

■ 配布資料

当日の資料を次のページから掲載する。画像化しているため見にくい。鮮明な資料は、次のサイト http://www.s.fpu.ac.jp/FD/shop/060222fd3.pdf からダウンロードして利用されたい。

メディア教育開発センター

インストラクショナルデザイン入門セミナー

内田 実

本セミナー学習目標の確認

① インストラクショナルデザインの必要性、有効性を教材資料を利用して説明できる。
② インストラクショナルデザインのプロセス概要を資料を見なくても説明できる。
③ インストラクショナルデザインのプロセス詳細を教育資料を利用して説明できる。(http://www.nime.ac.jp/KENSYU/kensyu_h17/001/outline_a.html参照)
④ インストラクショナルデザイン実施プロセスに関係する専門家の種類を今回配布する教育資料にしたがって説明できる。
⑤ インストラクショナルデザインの様々な事例を読んで、それを同僚等に説明できる。
⑥ 実際に開発するコンテンツの詳細企画を、どのようなインストラクショナルデザイン手順や項目に従い作成していけばよいか説明することができる。
⑦ 続けて「インストラクショナルデザイン実践ワークショップ」を受講する人は、事前課題「詳細企画書作成」を持ち帰って実施できる

評価方法：事前、事後のアンケートによるレベルの確認

目次

1. 学習ゴールと学習目標の確認
2. インストラクショナルデザインの必要性
3. コンテンツ開発計画
4. 分析
5. 設計
6. 開発、実施、評価

アンケート結果

① 事前アンケートの受講目的、学習目標の事前レベルの集計結果をここで説明する。
② 今回の受講者の特徴とそれに対応して、セミナーをどのように実施するか説明する。
③ 実践IDのP42　受講票兼学習指示書参照

アンケート結果

1. 本セミナー学習ゴールの確認

「インストラクショナルデザインの必要性、有効性を実感し、コース・コンテンツの開発手法としてインストラクショナルデザイン手法を自分の組織に導入しなければならないことを、同僚や上長に説明できるようになる。また、コンテンツ開発の詳細企画の項目を説明することが可能となる」

2. インストラクショナルデザインの必要性

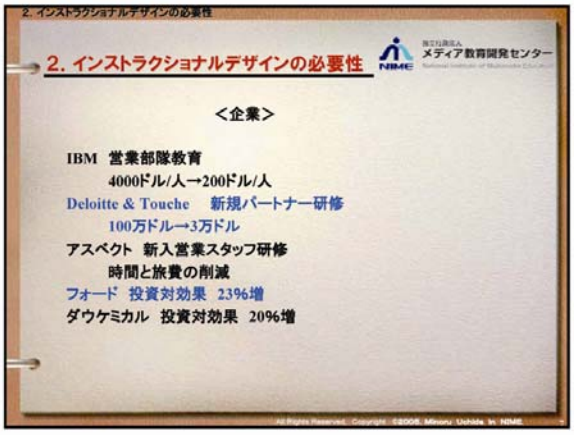
あなたの実施している教育は現実のニーズに対応していますか

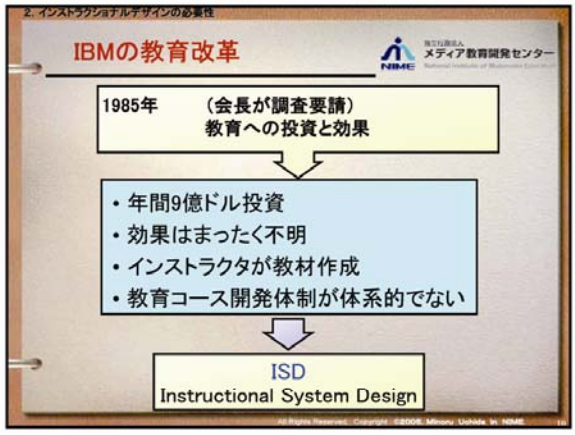
・あなたのコースが無かったら世の中はどうなりますか。

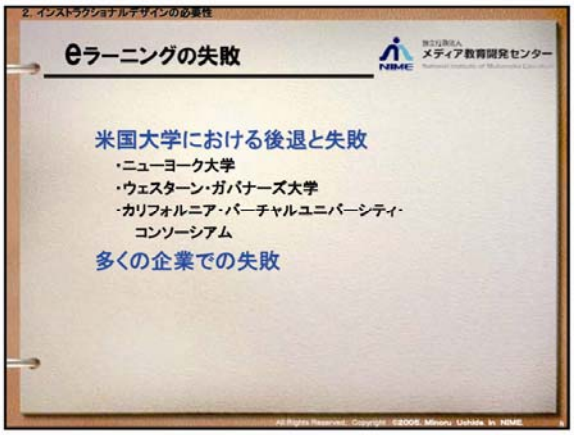
・あなたのコースの必要性を証明するデータはどこにありますか。
・あなたのコースの教育項目の選択が正しいという証明はどこにありますか。
・あなたの受講者の評価が正しいことを生徒に説明できますか。
・あなたのコースの評価について、正確な、または外部の評価がありますか。

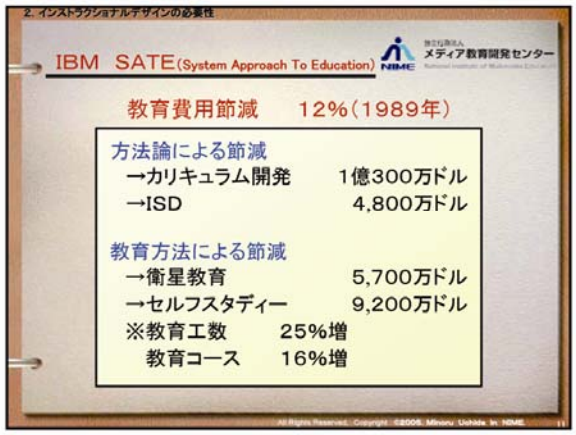
・習得能力の保障ではなく、単位という人質で学生を縛っていませんか。

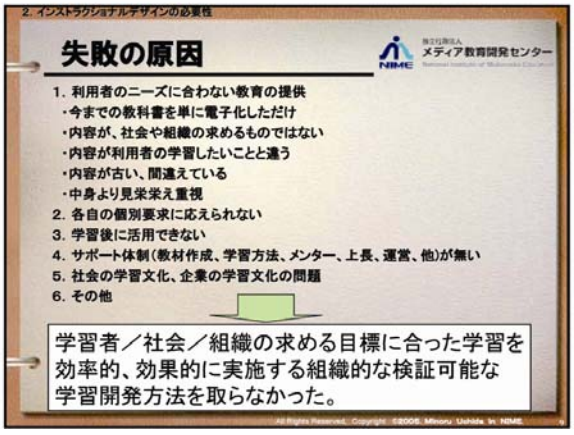
教育は社会（受講者）に対するサービス業
受講者に社会が求める能力を与えることが義務

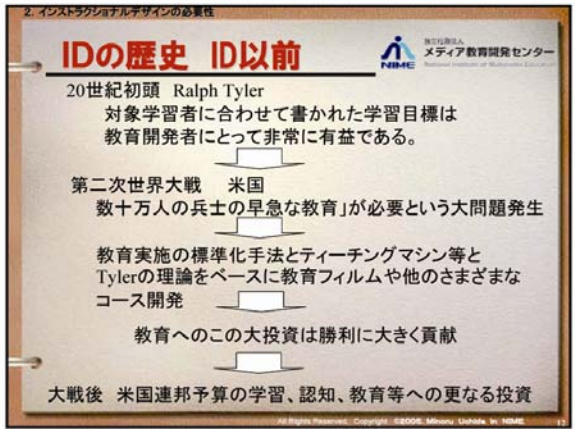

2. インストラクショナルデザインの必要性
2. インストラクショナルデザインの必要性
メディア教育開発センター
<企業>
IBM 営業部隊教育
4000ドル/人→200ドル/人
Deloitte & Touche 新規パートナー研修
100万ドル→3万ドル
アスペクト 新入営業スタッフ研修
時間と旅費の削減
フォード 投資対効果 23%増
ダウケミカル 投資対効果 20%増


2. インストラクショナルデザインの必要性
IBMの教育改革
メディア教育開発センター
1985年 (会長が調査要請)
教育への投資と効果
・年間9億ドル投資
・効果はまったく不明
・インストラクタが教材作成
・教育コース開発体制が体系的でない
ISD
Instructional System Design


2. インストラクショナルデザインの必要性
eラーニングの失敗
メディア教育開発センター
米国大学における後退と失敗
・ニューヨーク大学
・ウェスターン・ガバナーズ大学
・カリフォルニア・バーチャルユニバーシティ・
コンソーシアム
多くの企業での失敗


2. インストラクショナルデザインの必要性
IBM SATE(System Approach To Education)
メディア教育開発センター
教育費用節減 12%(1989年)
方法論による節減
→カリキュラム開発 1億300万ドル
→ISD 4,800万ドル
教育方法による節減
→衛星教育 5,700万ドル
→セルフスタディー 9,200万ドル
※教育工数 25%増
教育コース 16%増


2. インストラクショナルデザインの必要性
失敗の原因
メディア教育開発センター
1. 利用者のニーズに合わない教育の提供
・今までの教科書を単に電子化しただけ
・内容が、社会や組織の求めるものではない
・内容が利用者の学習したいことと違う
・内容が古い、間違えている
・中身より見栄え重視
2. 各自の個別要求に応えられない
3. 学習後に活用できない
4. サポート体制(教材作成、学習方法、メンター、上長、運営、他)が無い
5. 社会の学習文化、企業の学習文化の問題
6. その他
学習者/社会/組織の求める目標に合った学習を
効率的、効果的に実施する組織的な検証可能な
学習開発方法を取らなかった。


2. インストラクショナルデザインの必要性
IDの歴史 ID以前
メディア教育開発センター
20世紀初頭 Ralph Tyler
対象学習者に合わせて書かれた学習目標は
教育開発者にとって非常に有益である。
第二次世界大戦 米国
数十万人の兵士の早急な教育」が必要という大問題発生
教育実施の標準化手法とティーチングマシン等と
Tylerの理論をベースに教育フィルムや他のさまざまな
コース開発
教育へのこの大投資は勝利に大きく貢献
大戦後 米国連邦予算の学習、認知、教育等への更なる投資

2. インストラクショナルデザインの必要性

IDの歴史　ID発祥

1954 Skinner: The Science of Learning and the Art of Teaching
「S-R(刺激と反応)、フィードバック、強化」

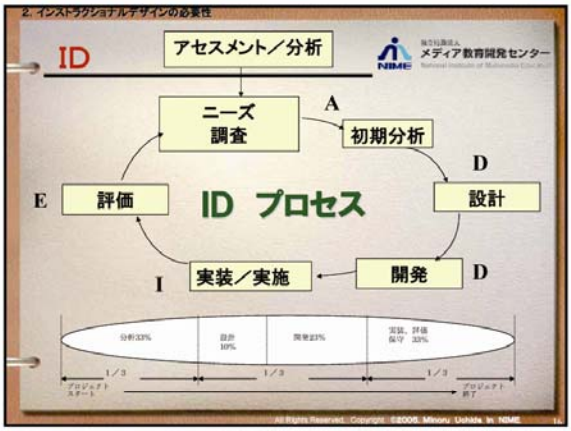
Skinnerのプログラム学習
(IDの原型、祖先)

1960年代　米国内教育の低品質化の問題
Glaser:インストラクショナルデザインの概念発表
Magerの論文
「学習目標(performance objectives)の構造は、ターゲット、行動、状態または制限、測定可能な基準を含むべきである」
Gagné:「学習の9事象」の元となる考え発表
Briggs:IDによって開発されたコースは2倍の効果あり
(進度、学習者の能力差異、学習時間)

All Rights Reserved. Copyright ©2006 Mitsuru Uchida, In NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

ID プロセス



All Rights Reserved. Copyright ©2006 Mitsuru Uchida, In NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

IDの歴史　ID発展

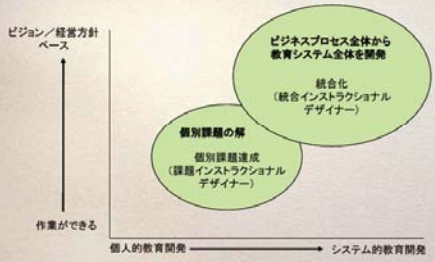
1970年代、1980年代
さまざまなインストラクショナルデザイン(ISD)モデル
Gagné and Briggs
Branson
Dick and Carey
Atkins
その他色々

1990年代以降
品質管理、組織エンジニアリング、チェンジマネージメント等と結びつく
ITとインターネットの発展
協調学習(constructivism)等が可能となる

All Rights Reserved. Copyright ©2006 Mitsuru Uchida, In NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

IDerの位置付け



All Rights Reserved. Copyright ©2006 Mitsuru Uchida, In NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

ID (ISD) とは

IDとは、教育プロダクトをシステム的に企画、設計、開発、実施、評価する方法である。

IDの哲学は、人の遂行能力(ヒューマンパフォーマンス)のエリアに焦点を当てること。
「全ての教育の目的は学習と遂行能力支援を通じて人の遂行能力に影響を与えること。」

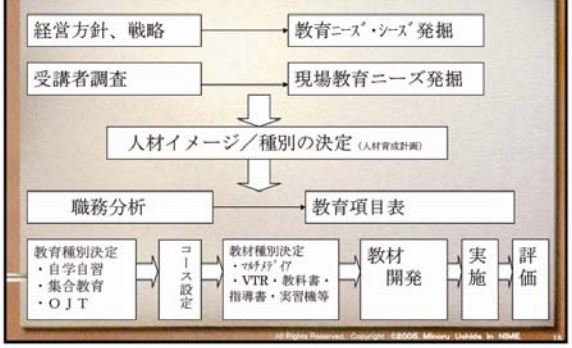
IDとは、研修の効果と効率と魅力を高めるためのシステム的なアプローチに関する方法論であり、研修が受講者と所属組織のニーズを満たすことを目的としたものである。(鈴木、IDポータルサイト)

実践ID、P2 参照

All Rights Reserved. Copyright ©2006 Mitsuru Uchida, In NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

企業活動からみたID



All Rights Reserved. Copyright ©2006 Mitsuru Uchida, In NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

なぜIDが普及しなかったか

<企業内教育の場合>
- 教育の専門家がいない
- 教育担当は数年間で移動
- 経営部門、セールス部門や設計、製造部門等に比べ教育部門の心理的な地位が低い

<学校教育の場合>
- 教育方法が確立されている
- 一度教師になると、新しい教育理論や方法を学習しなくても済んでいた
- 教師の高齢化

<高等教育の場合>
- 教授の評価は研究に主眼
- FDの概念は知られているが、具体化が進んでいない

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Ushida in NIME

3. コンテンツ開発計画

コンテンツ開発方針例

① Web対応(e-Learning)コンテンツであること。
② e-Learning用コンテンツは、汎用性が高く大学等で利用実績があるプラットホームで、かつ、複数のプラットホームの環境で動作すること。
③ 開発するコンテンツは、素材又は教材等のモジュール(構成要素)単位での利用を可能とするため、LOM(Learning Object Metadata)情報の付与ができること。
④ 開発するコンテンツの目的及び用途は、授業として利用可能な素材集、コースウェア、学生の自学自習用教材で汎用性が高いものとし、平成17年度は次のいずれかのテーマとする。
- ・リメディアル教材(数学・化学・生物・地学、その他)
- ・専門科目の基礎教材(教材開発に利用可能な素材集を含む。)

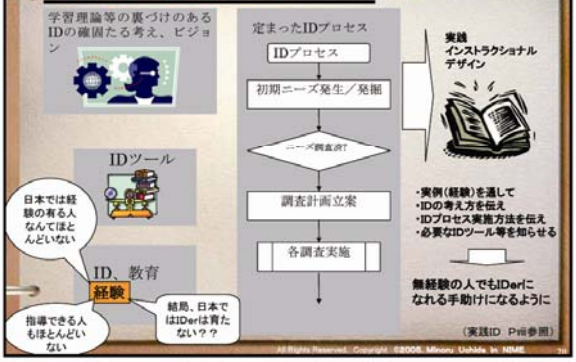
⑤ コンソーシアムは、制作したコンテンツについてセンターと協力して利用評価等の調査研究を行うこと。

(NIME公募コンテンツ例)

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Ushida in NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

IDerになるには



All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Ushida in NIME

3. コンテンツ開発計画

詳細企画書

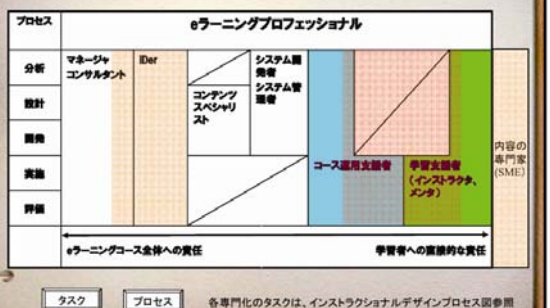
1. 概要
2. ニーズ分析
3. 教育ゴール
4. 学習対象者
5. コンテンツ内容
6. 学習方法
7. コンテンツ構造
8. 既存資料、関連教材処理方法
9. 評価方法
10. 制作プロジェクト計画
11. 制作コスト

詳細企画書

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Ushida in NIME

2. インストラクショナルデザインの必要性

eラーニング専門家



All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Ushida in NIME

4. 分析

4. 分析

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Ushida in NIME

4. 分析

ニーズ調査の目的

情報収集に集中し、欲しかった情報ではなく、真のニーズを調査する。

1.「ニーズの源は何か？」
2.「ニーズに対応するために何をすべきか？」
3.「ニーズに対応するために何を知るべきか？」
4.「ニーズに対するソリューションの価値は何か？」
5.「ソリューションの結果の評価方法はどうするか？」

＜分類＞
1. 一般ニーズ
2. 感覚ニーズ
3. 需給関係ニーズ
4. 比較ニーズ
5. 将来ニーズ

教育ニーズがあると思いますか？

・ITリテラシー教育ニーズ
・英語教育ニーズ
・日本語教育ニーズ
・古文教育ニーズ
・ラテン語教育ニーズ

・言われたことと、実際に行われていることに違いがないか。
・ニーズ種類に従い、観察等で検証

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In NIME.

4. 分析

詳細企画書記入内容(ニーズ)

2. 1 ニーズ定義
どのようなニーズがあるか、ニーズを箇条書きにする。
2. 2 ニーズの発生元とニーズ種別
誰が感じているニーズであるのか。また、ニーズの種別はなにか(感覚的、標準比較的、他者比較的、将来的、需給関係的)
例えば「学習者の就職先である財務部の管理者」が感じている「感覚的」なニーズ
2. 3 ニーズの信頼性
ニーズをどのように調査したのか。調査対象、対象人数、調査機関、データの元となる論文や資料等の名前等をつけた具体的なニーズ情報を記述する。
2. 4 ニーズの根本原因
ニーズの根本原因を分析し、記述する。「なぜ、そのような教育ニーズが発生したのか」を明示する。

詳細企画書

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In NIME.

4. 分析

ニーズ調査の対象者

	分類	高等教育関係対象者
1	教育機関	大学経営者(学長等)
2		教官
3		教官支援者
4	公的機関	文部科学省等
5		学会等
6	受講者	受講者の親
7		受講者
8	社会	企業
9		生涯教育対象者
		その他関係者

・誰を調査対象とするか
・ニーズが対立したらどうするか
・知識のない受講者が社会等の求めるニーズに気づいているとは限らない

実践ID P41
図2. 6の店長として入社できる人を大学で育てるとしたら何が必要か

実践ID P19参照

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In NIME.

4. 分析

詳細企画書記入内容(ニーズ)

2. 5 ニーズ解決方法
ニーズの根本原因から考えて、対策方法を実現可能で有効と思われるに箇条書きする。その中で、教育(または、コンテンツ開発)がどの程度有効なのかを明示する。例えば、ツール開発等が最有効な解決方法であり、その次に教育の必要性があるような場合も多い。ニーズ解決には、単独の解決策で対応できる場合もある。また、複数の解決策を複合させて、解決できるーズもある。今回のコンテンツ開発がどのような位置づけにあるか明確にする。

3 教育ゴール
今回のコンテンツ開発の結果到達できるゴールを明示する。ゴールは2～3文で簡潔に記述する。その後、ゴールの具体像、具体例等を追記する。また、ニーズ解決方法として、コンテンツ開発と組み合わせて他の解決方法も実施する必要があるような場合は、関係を明示し説明する。

詳細企画書

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In NIME.

4. 分析

ニーズ調査方法

1. 現状調査
問題点をあげ、どのような状況にしたいと思っているのかを明確にする。問題の根本原因まで考えること。（ニーズの種類分類も実施）
2. 教育対象となる作業、内容等を調査
問題点となっている教育対象となる作業（例えば実験しそのレポートを作成する詳細手順と必要知識、技術等）や内容（例えば微分方程式を解くのであれば、その知識構造等）を明確にし、その理想状態と現状を明確にする。
3. 解決策を記述
4. 学習ゴールを記述
解決策が学習の場合、学習ゴールを記述
5. 重要項目、成功領域を明確化
重要な項目、社会として求められる領域等
6. 報告書作成

具体的手法
1. インタビュー
電話、対面
2. アンケート
紙、電子メール、ホームページ
3. 行動観察
ビデオ撮影、観察者
4. シミュレーション
モックアップ、実機
5. 関連資料、論文等調査

企業の場合の手順は実践ID P15参照

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In NIME.

4. 分析

組織的評価

身につけた能力により実施する仕事は社会や組織の中でどんな意味を持つの？

全体組織評価
- 継続性
- インセンティブ
- 企業風土
- 意思決定と承認レベル

職務遂行評価
- 労働環境
- ツール
- 作業工程と手順
- 質、量のどちらに重点

コンピテンシー評価
- 知識
- スキル
- 態度

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In NIME.

4. 分析

初期分析

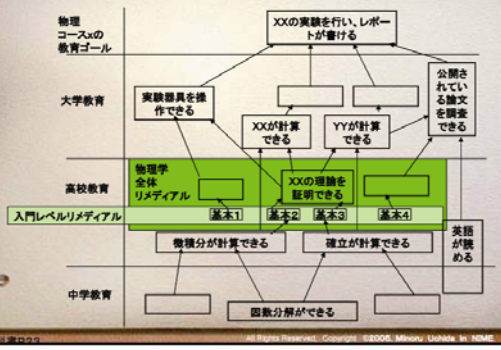
ソリューション開発のために必要な
より詳しいデータを採取する。

1．対象者分析
2．技術分析
3．環境分析
4．タスク分析
5．重要項目分析
6．目標分析
7．メディア分析
8．既存資料分析
9．コスト分析

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida, In. NIME.

4. 分析

学習目標分析



All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida, In. NIME.

4. 分析

詳細企画書記入内容(学習者分析)

5. 学習者分析

対象者の詳細を記述する。例えば「経済学教授 4000人」とした場合、どこの経済学の教授であり、4000人という数字の根拠を明確にする。
また、対象者の特性を明確にする。例えば、経済学教授の内、教育指導方法が良くない人だけを対象にすることが考えられる。まず、コンテンツの一部として、学生への教育評価アンケートを作成する。コンテンツの一部として作成したアンケートは4000名全員が受けるが、学習コンテンツを受ける対象はその中の評価のある基準以下の人(例えば50%、2000人と推定)にすることなどが考えられる。この場合、その基準が、学習対象者の特性ということになる。学習対象者の特性としては、「実践インストラクショナルデザイン」東京電機大学出版局 P46の対象者分析情報にしめすような項目が考えられる。その中から、必要な項目のみを学習者の特性として記述する。

種別	内容
一般情報	・対象者人数 ・年齢層、男女差 ・使用言語文化 ・社会的背景
特性	・知的能力 ・適正能力 ・態度 ・配慮
学習内容に対する態度	・レベル ・態度 ・言語

(実践ID P46)

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida, In. NIME.

4. 分析

タスク分析

C:きわめて重要、I:重要、N:重要ではない

項番	職務	職責	タスク	KSA種別	KSA	頻度	実行人数	難易度	重要度	時間軸	影響	時間	即時性	支援	本質的	詳細	目標番号
	インストラクショナルデザイン					1/開発	5		難	C	3ヶ月	大		即	有		
1		コースの目標を置く				1~3	1		難	C	1時間	大		即	有		
1.1			IDツールを使い目標のSパートを書く			10~500	1		難	C	5分/個	大		即	有		
1.1.1				K	状況、修得能力、対象、行為動詞、制約のSパート				中	I							
1.1.2				S	IDツールの操作方法				易	N							
1.1.3				A	真のニーズに合う学習目標を選ぶ				難	C							

(実践ID P62)

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida, In. NIME.

4. 分析

詳細企画書(学習目標分析)

5. 1 学習目標

実際にどのような学習目標が必要かを分析して、箇条書きする。また、学習目標を修得できたかどうかを評価する方法も記述する。
学習目標としてあげる項目の知識の範囲とレベルも明確にする。手順学習等の場合は、タスクの実施方法や順番を明確に定義する。それらに従い、必要な学習目標を、過不足なく選択していることを明示する。

5. 2 前提条件

学習目標の範囲を決定すると、その前提として必要な項目が明確になる。その前提条件を箇条書きで示す。受講前に前提条件の確認が必要な場合は、その評価方法も指定する。例えばテストで前提知識を確認し、不合格に場合は何を学習すればよいかを明確にする。

学習目標

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida, In. NIME.

4. 分析

学習目標記入例

NO	学習目標名	学習領域	レベル	要素				例
				対象	状況	制約	行為動	習得能
1	IDとは何か	認知	教授伝達	IDの概要の6ステップの手順を	枠だけの図を入手し	ナレーションに従い	図の中に言葉を書き入れて	図示することができる
1. 1	e-Learningの成功	認知	教授伝達	e-Learningの成功方法、失敗方法を	成功事例と失敗事例原因一覧を入手し	正確に	事例ごとに原因を割り当てることにより	説明することができる

文殊の知恵:職務遂行目標ができたらコンソーシアム内でグループディスカッションを行うこと (実践ID P68)

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida, In. NIME.

4. 分析

学習領域とレベル

メディア教育開発センター

	認知	情意	運動	精神運動	メタ認知
レベル	識別	受信と応答	反射運動		
	概念の具体化	価値付け	基本的運動		
	概念定義	組　織　化	知　覚		
	ルール	個　性　化			
	問題解決				
	認知戦略				
	教授伝達				

学習活動

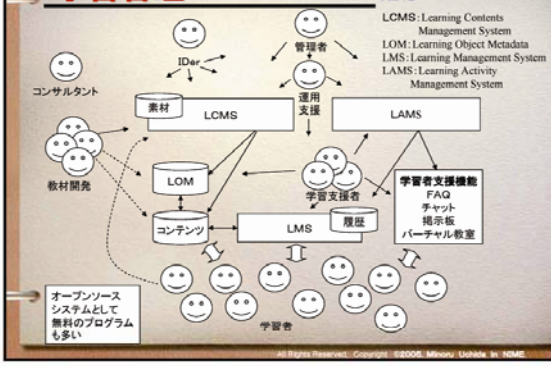
（実践ID　P67）

4. 分析

学習管理

メディア教育開発センター

LCMS：Learning Contents Management System
LOM：Learning Object Metadata
LMS：Learning Management System
LAMS：Learning Activity Management System



4. 分析

学習目標分析

メディア教育開発センター

5．1　学習目標
5．2　前提条件

学習目標例

ツール
・アウトライン機能
・「超発想法」
・「UNIKIDS」
・典型的オーサリング

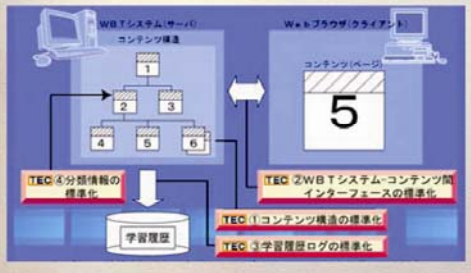
実践ID　P61タスク分析
P64　学習目標分析

協働作業に対応した典型的オーサリングツール
http://www.asia-elearning.net/content/act2003/exp_dev_3.php

4. 分析

SCORM

メディア教育開発センター



技術分析

メディア教育開発センター

6．1　使用メディア
今回の公募ではWEBと指定

6．1．1　eラーニングのコンテンツ学習環境
古いOS等に対応が本当に必要か？

ストーリーボードへの記入例

6．1．2　eラーニングのコンテンツ提供環境
・学習管理の必要性の検討
・SCORM
・LOM

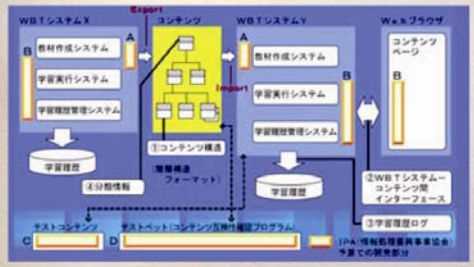
LOMの記入

6．1．3　Q&A環境
6．1．4　講義環境
6．1．5　コラボレーション環境
6．1．6　メンタ指導環境

4. 分析

標準部分

メディア教育開発センター



4. 分析

SCORM1．2と2004

メディア教育開発センター

SCORM1．2

現在、日本eラーニングコンソーシアム（ELC）で認定されている標準

LMS-RTE1：Minimum
基本的な形式部分のみSCORMに準拠している。

LMS-RTE2：Minimum with Some Optional Data Model Elements
主要な部分が準拠している。

LMS-RTE3：Minimum with All Optional Data model Elements
SCORM完全準拠である。

SCORM2004

当初はSCORM1．3といわれていた。以下のような機能が追加

・シンプルシーケンシング
学習者のアクティビティに対応して、学習パスをコントロールする。
（これ以前は基本的に順次学習）

・コンテンツ内の学習先の制御可能
次に進むとか、採点等がコンテンツ内で制御できる。（以前はLMSでのみ制御）

・詳細な学習履歴データが取れる。

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In. NIME

5. 設計

7. 設計

メディア教育開発センター

コンテンツ構造の決定考慮点

ガニェ
1. 学習者の注意を獲得する
2. 授業の目標を知らせる
3. 前提条件を思い出させる
4. 新しい事項を提示する
5. 学習の指針を与える
6. 練習の機会をつくる
7. フィードバックを与える
8. 学習の成果を評価する
9. 保持と転移を高める

ケラーARCSモデル
・注意　ATTENTION
・関連性　RELEVANCE
・自信　CONFIDENCE
・満足感　SATISFACTION

対象者分析に従い、上記を戦略的に満たすことにより学習意欲を高める。

1. 前項目の内容の復習から始めると効果的
2. 内容紹介と明確な目的を提示すること
3. ナレーションは効果的
4. 実例とデモンストレーションの活用
5. 成功体験の埋め込み
6. 受講生に合わせてコースを作成する
7. ペースは活発に、変化を持たせて
8. レッスンからレッスンへの移行はスムーズに
9. 指示と課題は明確に
10. 適度な基準の維持
11. 観察、机間巡視と作業チェック
12. 質問は一度にひとつ
13. フィードバックは有効
14. 間違ったときは適切な技術でフォロー
15. 教材は学習意欲をそそるものを
16. 実社会に結びついた教材

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In. NIME

4. 分析

LOM

メディア教育開発センター

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In. NIME

5. 設計

詳細企画書（コンテンツ構造）

メディア教育開発センター

7．1　素材型コンテンツの場合

■素材の範囲：
■素材の体系：
■素材の形：
■素材一覧：
■LOMデータ：
■利用方法例：

詳細企画書

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In. NIME

4. 分析

NIME LOM

メディア教育開発センター

項目		必須/推奨
LOMID		必須
タイトル		必須
概要		推奨
キーワード		推奨
内容のまとまり		-
言語		-
サムネイル		推奨
想定利用者	高等教育	-
	職業教育	-
	生涯学習	-
対象年齢	高校・高専	-
	大学	-
	大学院	-
	20歳代	-
	30歳代	-
	40歳代	-
	50歳代	-
	60歳代以上	-

項目		必須/推奨
URL		必須
メディアの種類		-
ファイル形式		-
ファイルサイズ		-
画面サイズ横		-
画面サイズ縦		-
再生時間		-
動作条件	OS	-
	WEBブラウザ	-
	ハードウェア条件	-
	その他	-
権利説明（一覧表示用）		推奨
権利説明（コンテンツ上部表示用）		推奨
開発者氏名		-
開発者所属		-
大学		-
学部		-
学科		-

項目	必須/推奨
連絡先郵便番号	-
連絡先住所	-
連絡先電話番号	-
連絡先ファックス	-
連絡先e-mail	-
関連教材URL	-
シラバスURL	-
有効期限	-
作成日	-
高等教育分類	推奨
言語版	-

事例

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In. NIME

5. 設計

詳細企画書（コンテンツ構造）

メディア教育開発センター

7．2　教材型コンテンツの場合

どのように学習を開始し、学習目標を理解させ、興味を持たせ、自分の将来の仕事等と学習の関係を納得させ、修得できたことについて自信を持たせ、自分が学習できたことにより満足を得て、それを客観的に評価して、学習が不十分な場合は、解決方法を提示し、学習が充分な場合は、次のステップを示すような構造と学習の流れを記述する。
学習者の事前能力や学習途中の修得具合、学習者の学習スタイルの好み（最初から筋道立てて順番に学習したい人もいれば、まず結論だけ知り、必要と感じたときだけ詳細まで学習することが好きな人もいる）によって、学習パスを変えるような場合は、利用する技術（SCORM2004のシンプルシーケンス等）と、具体的なアルゴリズムを記述する。

（実践ID　P86参照）

All Rights Reserved. Copyright ©2005. Minoru Uchida In. NIME

5. 設計

既存資料、関連教材

メディア教育開発センター

詳細企画書記載内容

8. 1 既存教材の有無とコンテンツ開発の必要性
8. 2 利用可能な素材と著作権処理方法
8. 3 使用する関連教材

詳細企画書

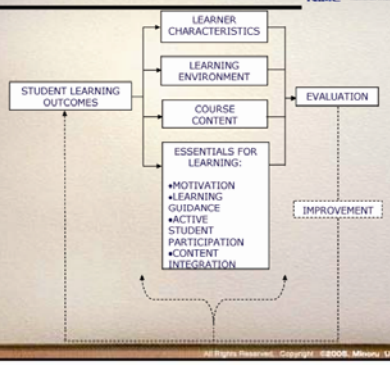
既存資料分析手順

1. 情報源と思われる箇所を識別する
2. 情報と既存のコース教材を収集する
3. 情報を比較する
4. 購入か開発か決定する
5. 決定事項を文書化する

All Rights Reserved, Copyright ©2005, Mitsuru Ushida, In NIME

A Simplified Model of ID (Carey)

メディア教育開発センター



All Rights Reserved, Copyright ©2005, Mitsuru Ushida, In NIME

5. 設計

設計

メディア教育開発センター

コンテンツ構造の決定考慮点

ガニェ
1. 学習者の注意を獲得する
2. 授業の目標を知らせる
3. 前提条件を思い出させる
4. 新しい事項を提示する
5. 学習の指針を与える
6. 練習の機会をつくる
7. フィードバックを与える
8. 学習の成果を評価する
9. 保持と転移を高める

ケラーARCSモデル

・注意 ATTENTION
・関連性 RELEVANCE
・自信 CONFIDENCE
・満足感 SATISFACTION

対象者分析に従い、上記を戦略的に満たすことにより学習意欲を高める。

1. 前項目の内容の復習から始めると効果的
2. 内容紹介と明確な目的を提示すること
3. ナレーションは効果的
4. 実例とデモンストレーションの活用
5. 成功体験の埋め込み
6. 受講生に合わせてコースを作成する
7. ペースは活発に、変化を持たせて
8. レッスンからレッスンへの移行はスムーズに
9. 指示と課題は明確に
10. 適度な基準の維持
11. 観察、机間巡視と作業チェック
12. 質問は一度にひとつ
13. フィードバックは有効
14. 間違ったときは適切な技術でフォロー
15. 教材は学習意欲をそそるものを
16. 実社会に結びついた教材 (入門P116)

All Rights Reserved, Copyright ©2005, Mitsuru Ushida, In NIME

Carey のコンテンツ品質チェックリスト

メディア教育開発センター

Indicators of a Quality Teaching/Learning Experience	√ or ?	Notes
A. Learner Characteristics		
1. Ability: Do students possess the intellectual aptitude for mastery of the course content?		
2. Exceptionality: Does the course provide accommodations as appropriate for known student exceptionalities?		
3. Achievement: Have students completed prescribed prerequisite courses and mastered appropriate general knowledge?		
4. Motivation: Do students possess sufficient motivation for learning to maintain engagement in the course?		
5. Maturity: Have students "learned how to learn" independently?		

All Rights Reserved, Copyright ©2005, Mitsuru Ushida, In NIME

Item examples(Song)

メディア教育開発センター

動機付けに関するARCSモデルチェックリスト例

注意
A1: I got stimulated by the presentation way of the content.(知覚的喚起)
A2: I got curiosity about the content while studying. (探究心の喚起)
A3: I was boring due to the monotonous way of presentation. (変化生)
関連性
R1: I got to recognize the importance of the content as I kept studying. (目的指向性)
R2: The presentation style made me feel comfortable. (動機との一致)
R3: The content was familiar to my experience. (親しみやすさ)
自信
C1: I had expectation for success while studying. (成功の期待)
C2: I had success experience during the study. (成功の経験)
C3: My ownership was low due to lack of my control of the learning process. (コントロールの個人化)
満足
S1: I enjoyed learning the content. (内的報奨)
S2: I was motivated by the incentives provided by the program. (外的報奨)
S3: I was dissatisfied with the grade given by the instructor. (公平)

Copyright by Sang Ho Song, 2005

All Rights Reserved, Copyright ©2005, Mitsuru Ushida, In NIME

Carey のコンテンツ品質チェックリスト

メディア教育開発センター

Indicators of a Quality Teaching/Learning Experience	√ or ?	Notes
B. Learning Environment		
1. Content requirements: Are instructional facilities, equipment, and supplies sufficient for teaching course content?		
2. Instructional requirements: Do delivery methods, facilities, and technology enable essentials for learning (see D below)?		
3. Learner requirements: Do time(s), location(s), and delivery method(s) meet learner's needs?		
4. Performance requirements: Does learning environment enable transfer of skill to a "real world" performance environment?		

All Rights Reserved, Copyright ©2005, Mitsuru Ushida, In NIME

Carey のコンテンツ品質チェックリスト

Indicators of a Quality Teaching/Learning Experience	√ or ?	Notes
C. Course Content		
1. Outcome requirements: Are new knowledge and skills a logical, relevant extension of stated student learning outcomes?		
2. Learner requirements: Are new knowledge and skills relevant and appropriate for learners' needs and characteristics?		
3. Quality requirements: Is course content accurate, authoritative, current, and free of bias?		
4. Performance requirements: Will new knowledge and skills transfer to a "real world" performance environment?		

6. 開発、実施、評価

詳細企画書記載内容
9. 評価方法
- 9. 1 学習者の習得度評価
- 9. 2 コンテンツの評価
- 9. 3 教育の評価

Carey のコンテンツ品質チェックリスト

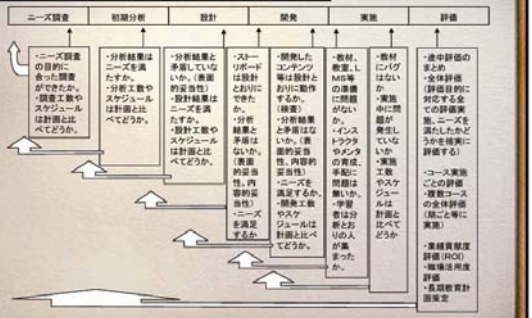
Indicators of a Quality Teaching/Learning Experience	√ or ?	Notes
D. Essentials for Learning - Does the instruction:		
1. Motivation: Focus learners' **attention** on critical content?		
Demonstrate **relevance** to learners' own goals?		
Inspire **confidence** in performance of new skills?		
Foster intrinsic **satisfaction** with course experience?		
2. Learning guidance: Present new content using variety of relevant examples, scenarios, case studies, authentic problems, etc.?		
3. Active participation: Provide opportunities for active engagement in learning new skills with guided, corrective feedback?		
4. Content integration: Link new content to the learners' existing knowledge and integrate into the learners' broader world?		

6. 開発、実施、評価

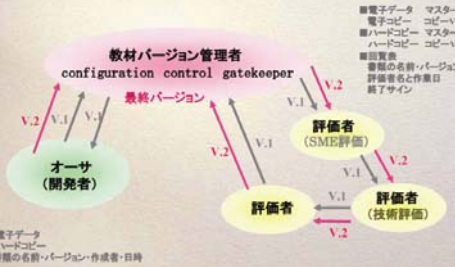
詳細企画書記載内容
10. プロジェクト計画
- 10. 1 プロジェクト体制
- 10. 2 日程
- 10. 3 バージョン管理

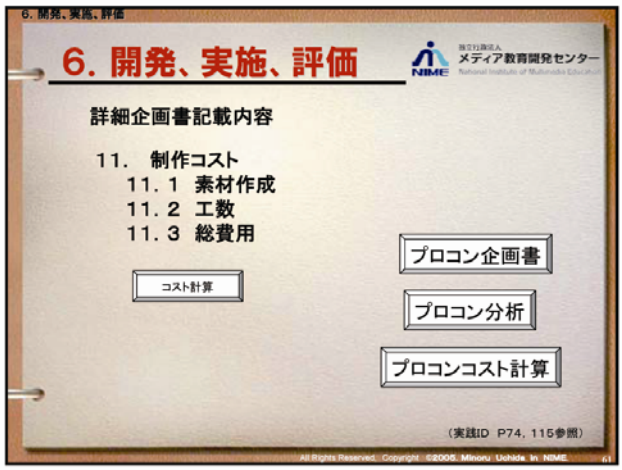
（実践ID P83参照）

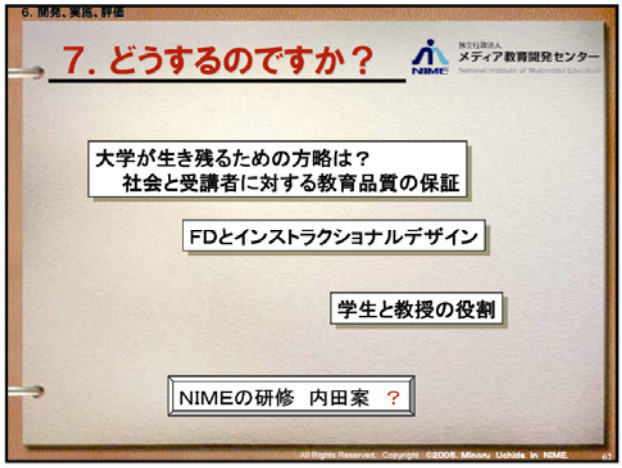
6. 開発、実施、評価



バージョン管理




6. 開発、実施、評価
6. 開発、実施、評価
メディア教育開発センター
詳細企画書記載内容
11. 制作コスト
11. 1 素材作成
11. 2 工数
11. 3 総費用
コスト計算
プロコン企画書
プロコン分析
プロコンコスト計算
（実践ID P74，115参照）


6. 開発、実施、評価
7. どうするのですか？
メディア教育開発センター
大学が生き残るための方略は？
社会と受講者に対する教育品質の保証
FDとインストラクショナルデザイン
学生と教授の役割
NIMEの研修 内田案 ？

メディア教育開発センター
インストラクショナルデザイン
Realizing
Learning Based Society!
質問は以下へメールください
uchida@nime.ac.jp

■ 参加者アンケート（回答者 11 名、回答文頭の数字は回答者番号、？は匿名）

Q１　22 日午前中の講義はいかがでしたか？
5　予備知識がなく、難しかった②
10　ID の考え方や作成過程はよく理解できました③
12　特に目新しい理論というわけでもなかったので、導入部分は（私にとっては）もっと簡潔にしてよいと感じました③
16　資料 17 ページ右下の「確立」は「確率」ではないでしょうか③
17　ID の理論とプロセスは対象（民間や大学）に関わらないかもしれないが、一例を挙げるときは、大学を対象とするものがほしい（大学は 1 年目の先生に申し上げるべきことはないですが・・・）　、また（大学教員が対象なので）もう少し簡潔にし、質問を受ける形のほうがよいと思いました③
18 研修の構成が「ID の詳細を知る」となっていたが、ニーズ分析が足りなかったのではないか②
?授業に生かせるものを探りたいと考え参加したが、ID の専門家に必要な内容のため、ニーズのすれ違いがあった②
Q２　22 日午後の講義はいかがでしたか？
12　SCORM と LMS についての説明は、（多少セールス的調子を感じましたが）興味深かったです。④
14　22 日を通して ID の基本的考え方を学ばせてもらったと思います。1 教員が自分の持ち駒に対して使える労力や時間は限られているので、本格的に導入するためには制度的なサポート（学内外）が必要と感じました。現段階では難しいでしょう。ただ、デザインの考え方は非常に参考になりました③
17,18 途中で抜けたので回答できない
?　少し考えを整理できた③
Q３　23 日午前の講義はいかがでしたか？
１　内田先生の話ぶりに感銘を受けた。ID は十分面白そう。でも教育は人依存であるという事にどうしても拘ってしまう。④
4　現在担当の科目への導入には難しいところもあるが、基礎ゼミなどでは有効か③
5　最後の討論が興味深かった③
12　実用性の高い内容でした④
14　設計の決定考慮点（スライド 46,50）はシラバス作成や授業設計に非常に役に立ちそうです。また NICER のコンテンツも使ってみたいと思います③
16　情緒力の例はあまりよくないと思う。例えば、機械操作のように万人が同じと思う内容のほうがいいのでは？③
17　コスト計算などは ID を導入していない本学の入門者には割愛してほしい気がします。みんな恐れ逃げてしまいますので(^。^)　、討議の時間をもう少し下さい　④
18 企業における工程見積の話は面白かった。他の部局の話が聞けたのはよかった③
?　教育設計のプロセスの考え方は少し理解できたが、授業にどう生かすがまでは至らず③
Q４　2006 年度の FD 研修に今回の研修を企画すれば、同僚に参加を勧めますか？
12 次のステップ（実習研修）を体験したいです③
14　少し e-Learning に重点を置きすぎていた気がします。e-Learning より対面授業中心の ID についてもう少し話があるとよかったと思います。でも今回のワークショップは性格がはっきりしていて面白かったです③
10　作成が難しい。生理学や解剖学などの基本を学ぶ上では大変有効だと思うが、基本は人間と人間の関わりによって人間は育つことが多いと思っている。②

18　大学教員の問題意識に近いところからはじめて ID の必要性まで説明する研修が良いのではないか②

Q５　2006 年度の FD 研修として希望するテーマや講師があればお書き下さい。

17　ニーズ調査が必要

参加者メモ

2 月 22 日（水）

● 9:30～12:15　スライド 1 ～33

まず、セミナーの学習目標、インストラクショナル・デザイン ID の必要性、ID の歴史を学ぶ。つぎに、ID とは、ID のプロセス、e ラーニングとの関係、開発方針などを学ぶ。

● 3:15～16:30　スピーチとスライド 34～47

出席者が、なぜこの研修をうけたかを自己のバックグランドとともに紹介・報告

スライドにもどり、詳細企画書、分析と話が進んだ。ここでつぎの事項に関して質問が相ついだ。ニーズの対象、分析の主体、結果の反映の仕方、企業の教育との違い、大学の多様性、教員の経験と判断によって実施している授業に、ID が必要か、ID は役に立つか、どのように取り入れるか、などである。

● 15:00～16:30　スライド 38～45

技術分析、学習管理、e ラーニングコンテンツの提供環境として SCORM や LOM の詳しい説明があった。

2 月 23 日（木）

● 9:30～11:30　スライド 46～61

スライド 46 の設計を詳しく説明。ガニェの学習モデルは、参加者の興味を引いた。

教材コンテンツの作成や NIMEglad など LOM の話があり、６．開発・実施･評価に進む。

このプロセスの詳細、具体的なコスト計算などは、一部の先生の興味を誘うが大学には無理、あわないといった印象をもたれた先生もおられた。

● 11:30～12:10　スライド 62 の話題を討論

大学が生き残るための方策、それは教育の品質を保証すること、といった話のあと菊沢 FD 部会長の司会で、FD 活動の「なかで ID をいかに学内に普及させるか、の討論を展開。

(1) ID はできる範囲で授業に取り込めばよいが、それは授業の性格や担当教員に依存するところが大きい。実習をともなう NIME での ID 研修への参加は FD 活動として支援していく

(2)ID を学部･学内で進めるべきかどうか､シラバス作成や大学全体のカリキュラムの系統だった整理､に ID を適用するのがよい。またニーズや評価という観点で、ID の手法を参考するなども有効、などを話し合った。

4.4. 学外セミナー

4.4.1. 平成 17 年度『特色ある大学教育支援プログラム』フォーラム

主催： 文部科学省
日時： 2005 年 11 月 23 日 10:30 - 18:00
場所： 国立京都国際会館（京都市左京区宝ヶ池）

■ 木野龍太郎講師（経済学部経営学科）報告

(a) 10:30 - 12:30 ポスターセッションにおいては以下のブースにて説明をうけた
①大同工業大学
「全教員を対象にした公開研究授業の組織化
－授業改善のためのフィードバック・ループ形成の試み－」
授業開発センターを設置
公開研究授業は毎週１回、半期９回、年間１８回行われる
専任教員、非常勤教員を含めて全ての教員の授業について実施
４年間の取り組みの結果、専任教員の８割について公開授業を実施（授業参観教員数はのべ 712 名）
②東京電機大学
「学生の自主・自律を支援する個別重視型教育」
講義－50 分×週 2 回 （実習は 75 分×週 2 回）
授業料－単位従量制（履修単位に応じて授業料が決まる）
ダイナミックシラバス－入学時に学習目標などを基にして 4 年間の履修計画を作成し
セメスターごとに履修した科目と目標の修正などを踏まえて
再度卒業年度までのシラバスを作成することを続けていく（教員・スタッフがフォロー）
③千葉商科大学
「大学の社会的責任としての環境教育の展開
学生を主体としたＩＳＯ14001 取得
教授会・環境委員会・ISO 事務局・環境 ISO 学生会議との連携による環境教育活動
④岡山大学
「新機軸『学生参加』による教育改善システム」
学生・教職員教育改善委員会を通じた学生参画型の教育改善
同委員会からの正式提案は大学の公的審議ルートに乗り短期間に実現される
学部の FD 活動にも独自に学生を参画させる取り組みも行われる
教員対象の学内 FD 研修にも学生が参加

(b) 13:00 - 17:00 フォーラムに出席
①事例報告
・慶應義塾大学
「文系学生への実験を重視した自然科学教育」
福沢諭吉の説いた自然科学教育の重要性（文理問わず）を具現化している
現代社会の要求に応え、自然科学本来の意義に触れることによって
科学的考え方を身に付けることが目的
講義と実験を連携させて教育の相乗効果を狙う（年間で実験 13 回＋講義 13 回実施）
1949 年から半世紀以上にわたり精力的に実践している

・広島大学＋山口大学
「工学系数学基礎学力の評価と保証－グローバルスタンダードをめざして－」
数学の総合力が要求される技術者の育成を行うにあたって
工学系数学の統一試験の実施を通じて工学系数学基礎学力の評価と保証を行う
試験の結果を受けて教育効果の点検を行い授業内容やカリキュラムの改善に反映させる
試験結果は大学間の比較に用いるものではなく講義担当者に分析結果をフィードバック
・宮崎県立看護大学
「到達目標を共有する教育プログラムの取り組み」
ナイチンゲール看護論をベースとした「個別科学としての看護学」の体系化
自己学習－グループ学習－個別指導－自己評価システムの実施
看護技術習得課程を３方向からのビデオ画像に記録し自己モデリングを可能としている
自己の演習内容を振り返りグループメンバーからの評価が受けられるようにしている

(c) パネルディスカッション
・大学理念をどのようにプログラムへと落とし込み、多様な人材を送り出すことが出来るようにするか
・あくまで主人公は学生であり、生き生きと自ら学ぶなかでいかに理念を達成できるようにする
・特色については評価は難しいが、そのプロセスに関しては評価を行うことが出来る
・大学で学ぶことのエクセレンスと学術知と結びついた成長を図る
・教育の品質保証という意味でのＰＤＣＡサイクルを構築することが必要との
スタンダードが形成されているが、それが実効性あるものとなっているかがポイント
・好ましいことではないが、教養・人文系が通りにくく理科系が通りやすい傾向にある
文系では大学教育の品質保証が難しく成果が見えるのが先になる
・各部署が連携して取り組みを行い、その実績がきちんと見えているところが評価されている

■ 横山芳博助教授（海洋生物資源学科）報告

(a) ポスターセッション（10:30 - 12:30）
以下のブースにて説明をうけた。
１：鹿児島大学
「ISO を活用した教育システムの展開ーユニバーサルアクセス時代への展望ー」
水産学部
教育の改善を含めた品質保証の為に ISO9001 を取得した
数名の教員が一年で認証取得
国内の機関による大学の ISO9001 認定はおそらくはじめて
２：東北大学
「融合型理科実験が育む自然理解と理論的思考ー大学初年次の理科実験教育ー」
高等教育開発推進センター
12 回に分けて、地球環境、物質、エネルギー、科学と文化、生命の総合的な分野をカバーする実験を行う
平成 16 年度に「自然科学総合実験」として開始されている
理科系全学部 1 年時生 1800 名が必修として受講
テーマの取りまとめ、教員の協力の取付が大変であった

３：東京電機大学

「学生の自主・自律を支援する個別重視型教育」

情報環境学部

授業時間の工夫（短縮化）講義 50 分×週 2-4 回、実習は 75 分×週 2 回

授業料の単位従量制（履修単位に応じた授業料：一定額前納、収支はとんとん）

導入教育とダイナミックシラバス−２週間の導入教育、各自の 4 年間の履修計画を作成する。履修計画、履修状況による修正を卒業まで教員・スタッフが支援する。

４：岡山大学

「新機軸『学生参加』による教育改善システム」

教育開発センター

平成１３年度より学生参画型教育改善が行われている

FD 委員会に学生も正式メンバーとして参加

新規の講議科目 eg.ドラえもんの科学など　が短期間に実現されることもある

現段階では所謂教養課程までが対象となっている

５：富山県立大学

「フィールド実習をコアとした流域環境教育ー健全な水循環系構築に向けたシステム教育ー」

短期大学部環境システム工学科

フィールド実習をコアに関連する講議科目を合わせて流域環境を知る

実習は１５年程の歴史がある

その他：日本工業大学、福井大学、九州女子短期大学、北海道教育大学、日本大学、フェリス女学院大学など

13:00 - 17:00　フォーラム

１：事例報告（内容は資料パワーポイントの図の通り）

１ー１：慶應義塾大学

「文系学生への実験を重視した自然科学教育」

１ー２：広島大学＋山口大学

「工学系数学基礎学力の評価と保証−グローバルスタンダードをめざして−」

１ー３：宮崎県立看護大学

「到達目標を共有する教育プログラムの取り組み」

(b) パネルディスカッション

事例報告をした大学から、(a)学内準備、(b)何故選択されたかについてコメントがあった。

慶應義塾大学

(a)３年連続採択されている。戦略としては、１年以上前より学長から指示あり。キャンパス内で秋より準備。アンケート調査等した後４月に申請。

(b)特色があった。これは規模や歴史、組織が評価されたものと考える。

広島大学＋山口大学

(a)年末に決定。年明けに申請を決定。準備は Ｈ１５より。数年前より大学院、大学の英語、数学、国語の教育について学長とセンター長が方針を相談していたという歴史がある。

(b)複数大学が組んだ点が評価されたのではないか（数学では特に難しい）。

宮崎県立看護大学

(a)開学（Ｈ９）より準備。申請者の薄井氏は前任の千葉大学で２２年以上同様のシステム（ナイチンゲール看護論）による教育を行ってきた。

(b)H15 ダメだった。内容はまったく同じで内容を分かりやすくしたらＨ１６に採択された。

また、審査員から「どのような取組みを評価するか」について意見が出された。

鈴木氏：各大学の理念にそった特色であるべき。方法論に優劣がある。あくまで学生が主人公であり、受け身の学生ではなく能動的な学生であるべき。地道な努力がなされていること（歴史がある）。

林氏：医・工学系の鮮明な計画が評価しやすかった。教養的なものについては重要性は認識しているが、評価が委員間で別れやすい。

岩見氏：PDCA は最低限必要である。その内容が大切。選択は全体 10%であるが、8%はは全員一致で選択された。残りの 2%については評価が委員間で分かれた。学生とのコミュニケーション、インターラクションのプログラムへの反映が必要である。

最後に本プログラムは、あと２年間は募集されるとのことであった。

■ 大塩まゆみ教授（看護福祉学部社会福祉学科）報告

1.午前の部：ポスターセッション

Ａ．下記の大学のブースで説明を聞いた。

１）千葉商科大学「大学の社会的責任としての環境教育の展開」

・担当者からの説明をきき、『環境が大学を元気にする～学生がとった ISO14001』の本を頂戴した。

２）埼玉県立大学「保健医療福祉の連携と統合を目指し教育展開―Interprofessional 教育の実践と通して―」

・当プログラム担当の事務職の方から説明をきいた。

３）神戸女学院大学「音楽によるアウトリーチ―社会に開かれた学び―」

・本プログラムを担当されている音楽学の教授から熱心な説明をきき、意見交換をした。

４）関西大学「人間性とキャリア形成を促す学校 internship―小中高大連携が支える実践型学外教育の大規模展開―」

・担当教員から説明をきいた。

Ｂ．順番待ちが多かったり、時間が足りず、パンフレット類入手に終わったのは、下記の大学。

１）日本福祉大学「ユニバーサル:アクセス時代の通信教育―生涯学習型ネットワークキャンパスの構築をめざして」

２）福井大学「より高い現代的な教養教育をめざして」

３）富山県立短期大学「フィールド実習をコアとした流域環境教育―健全な水循環系構築に向けたシステム教育」

４）大学コンソーシアム京都「産官学地域連携による人材育成プログラム―京都地域におけるインターンシップの展開―」

５）早稲田大学「国境を超える教育的社会貢献活動の実践―行動する国際人の育成―」

６）東北福祉大学「ボランティア学習による 21 世紀型市民の育成―ボランティアセンターと地域社会との協働による社会参画型学習の実践―」

７）大学基準協会、および文部科学省「大学の設置認可制度に関するＱ＆Ａ―質の高い大学づくりの仕組み―」など

２．午後の部：事例報告とパネルディスカッション

Ａ．事例報告は下記の大学･テーマ

１）慶應義塾大学「文系学生への実験を重視した自然科学教育」

２）広島大学工学部･山口大学工学部「工学系数学基礎学力の評価と保証」

３）宮崎県立看護大学「到達目標を共有する教育プログラムの取組み」

Ｂ．審査部会委員と事例報告者によるパネルディスカッションのうち審査部会委員のコメント。

１）国際基督教大学、鈴木氏・・・・慶応大学の場合は、伝統私学の長年の蓄積と大規模校による推進力･財政力あり。建学の精神が生かされており、外圧による取組みではなく母校に対する誇りが良い成果を生み出している。

２）京都大学、林氏・・・・専門教育･理系基礎教育における教育の装置化が、「人材工場としての“学校”教育システムとして発達してきたが、学生の人間としての幅広さを育むような試みや“創造的な”大学教育をどのように造るかが課題。人間味という点では、おもしろみに欠け、大学教育が、大学というよりも小中学校の総合学科のようになってきている。

３）関西大学、岩見氏・・・・大学教育のエクセレンスとは何か・・・社会･環境とのインターフェイスでは感受性と文脈理解力、人間とのインテーフェイスでは動機付けであろう。

Ｃ．最後の挨拶・・・実施委員長、絹川生吉氏

・本プログラムは、大学教育の品質保証をめざしている。しかし理系はそれを示しやすいが、文系は示しにくく、このようなプログラムによって、人文系･教養教育に逆風を吹かせ、それを強める結果になってはいけない。最近は、奇抜さをねらったり、技巧をこらす大学が増え、そもそも評価するということは、どういういうことか、について、大学人の見識で受け止めることが肝心である。

３．出張者の率直な感想

・本プログラムは、教育改革促進のため競争原理を導入し、大学教育の活性化を目的としている。

出張者は、このフォーラムに参加することによって、何がしかの参考になるものを取り入れることを目的とし、シンポジウムでは前列の席で意欲的に聞いた。しかし、参加する前の、このプログラムへの肯定的見方は、参加後、残念ながら、逆転してしまった。その理由は下記のとおりである（本音の感想を記す)。

１）競争原理導入は、ある程度、大学活性化につながるだろう。とはいえ、このようなプログラムによって、大学が本当に大学としての大学づくり、人間性豊かな人材養成ができるのだろうか、疑問である。それは、審査委員の林氏のコメントでも触れられていた。「大学の小学校化」(「幼稚化」）といえるのではないか。

２）本学社会福祉学科では、すでに基礎演習 1 や実習・ゼミ等で社会福祉現場とのつながりをもたせており、また、少人数教育のおかげで、教員と学生、学生同志による密度の濃い教育を実施しているので、個人的には、参考にしたいと思えるような内容の発表はなかった。福祉系大学にあっても、本学がめざす人間性･独自性があり質の高い専門職養成のため参考になる大学は、なかった。

３）このプログラムために、平成 16 年度予算 449 億円、17 年度は 529 億円が投入されている。一方では､三位一体改革で厚生労働省予算は削減され､生活保護費の国庫負担は削減されようとしている。また最近、医療保険･介護保険の自己負担分が増やされた。社会の底辺には、最低限以下の生活を余儀なくされている人が増加しており（生活保護受給者増加)、認知症の高齢者は、人間らしく生きる生存権すら許されないのが今の時代である（高齢者福祉の実態)。このような社会問題を課題にあげている大学はゼロであった。

３)「木を見て森を見ない」ような教育プログラムづくりと実施に追われることは、大学のあり方としてどうなのだろうか。本来、社会や国に、これからの進路の羅針盤を示すのが大学であり、その逆であってはならない、と思う。

4.4.2. 第 2 回専門分野別教育開発セミナー『文系基礎とコア・カリキュラム』

主催　金沢大学教育開発・支援センター
日時　平成 17 年 12 月 11 日（日）　13:30～17:40
場所　　金沢大学サテライト・プラザ　（金沢市西町３番丁 16 番地）
内容とコメント（菊沢正裕・参加報告）

- 本学の教務委員長、FD委員長宛に案内があり、金沢大学サテライトキャンパスにて、学部横断で教育について議論するセミナー（参加者約50名）に参加した。本学の中期目標0次案の「教育の成果・内容に関する目標」に掲げていた、「基礎的能力」「観点」と、それを達成するためのコア・カリキュラムは、大変重要な課題であることを基調講演で確認できた。
- 13:30-13:40　開会の辞（金沢大学教育担当理事・鹿野勝彦副学長）では、この5年にわたり検討してきた共通教育、それにともなう学部から学域への改変（学生組織の改変）に言及し、今後、講座制など教員組織の改変が進むであろうことなどに言及された。
- 13:40-14:40　基調講演　「学士課程カリキュラムの在り方：専攻を超えて」（神戸大学教育研究センター川嶋太津夫教授）では、いま大学は研究から教育課程を考える時代、教育課程の再編は、講座制や教員組織をも変えることになろう。21世紀型の授業は、教員中心から学生参画の授業、知識伝授から知識をどのように獲得し使うかを教える授業が大切になる。インプットからアウトカムズへ、また専門教育から専門をどのように汎用化するかの教育への移行が必要である。高等教育とはなにかを問い直し、就職先の多様化と転職や学問の変化（知識の急増、文化、陳腐化）を踏まえてカリキュラムを再構築しなければならない。個々の授業を受講した学生のアウトカムズを見据えたカリキュラム、教育上の達成目標を掲げ、それぞれの目標がどの授業で達成されたかを証明できるカリキュラムが、いま世界的スケールで求められている。また、金沢大学での2年間の授業が、その後の富山大学での2年間、さらに北京大学大学院の2年間に、といった具合に引き継いでいくことができる、そのようなカリキュラムが求められている。
- 14:50-15:40　「専門共通科目と文学部教育」（金沢大学文学部鏡味治也教授）では、3学科16コースの共通教育として実施してきた、導入教育、コースをまたがる特定研究分野の教育（現代日本の文化と社会、日本人の思想と文化など）、学部共通の実習科目（インターンシップ、語学留学、地域交流演習を単位化）、教員配置と専門分野のズレを補正する教育、について説明。続いて、金沢大学の学部再編（法、文、経済の３学部を、人間社会学域に統合）に向けた議論を行った。
- 15:40-16:30　「導入教育としての法学概論」（金沢大学法学部東川浩二助教授）では、多岐にわたる法学の専門分野を横断する法学概論（専門科目）では、「タバコについて」といった身近なテーマをとりあげ、他学部が受講する教養科目では、「裁判員制度と陪審員制度」のテーマを取り上げる。専門と教養が一見、逆転している講義内容であるが、このことが非常に重要として、このセッションでも、またディスカッションでも大いに議論が盛り上がった。
- 16:40-17:40　ディスカッションでは、コア・カリキュラムはどうあるべきか、4年間をみすえたコア・カリキュラム、一般教育と専門教育のコア・カリキュラムを分けるかどうか、科目名の統一（「概論」と「入門」の違いを明確に）、学内の科目の分野と水準を整理（類似科目の洗い出し）の整理、法学概論に関する続き、などなど、学部再編にむけて、学部間の違いを乗り越える活発な議論が、ホットな雰囲気のなかで続いた。

5. 調査研究

5.1. 大学改革実践プログラムに関する検討

現在、本学では、大学改革と法人化の準備作業が進行中であるが、前者に係る「大学改革実践プログラム」における取組事項のうち、FD 部会が直接取り組む事項は、「大学改革実施計画書兼進行管理調書」の C-1「FD の実施」ただ一つであり、極めて順調に推移し、本報告を以て年度内計画は全て完了する予定である。一方、教務委員会が係わる 19 の取組事項は、基本的に教育主体である部局（学部や学術教養センター）が取組み、そのなかで全学的な議論、調整、および統一が必要な項目について教務委員会が関与するものと考えている。

法人化後の公立大学法人福井県立大学の中期目標・中期計画（案）を取り出しても、成績や教育評価に係わる多くの取組が基本となっている。FD 部会では、C-1 以外に、授業評価に関連する取組みとして C-7, C-19 について議論した。

中期目標	中期計画
1　教育の成果・内容に関する目標 ・教育の質を高く維持する。	・教育プログラムの水準を保証することができる成績評価を実施する。 注）現在、成績評価はブラックボックスの中で行われているが、成績評価を実施するにあたり各教員がその基準を明確にし、外部からもその妥当性を検討できるようにする。大学改革実践項目の中では以下の項目が該当する C-18 成績評価の基準設定の検討 C-19 成績評価の厳格化 GPA 制度の導入の検討 GPA を導入した多くの大学では、CAP（学期あたりの単位取得数の上限）制度を取り入れている場合も多いので、併せて導入を検討する。それ以外の、適正な成績評価を実施する方法に関して具体的に検討をお願いしたい。
	・教育プログラムの設計、実施、評価のプロセスを可能なかぎり公開し、教育プログラムの不断の改善を図る。 注）現在、生物資源学部では JABEE 取得むけて準備を進めているが、JABEE の精神である教育のオープン化を全学的に実施する。教育プログラムの評価基準、評価手法に関しては具体的な項目のリストアップが必要。なお、大学改革実践項目の中では以下の項目が該当する C-4　卒業生評価の調査 C-7　教育の成果の検証・評価体制の検討 C-12 退学、除籍、休学の現状分析と対処（２） C-13 カリキュラム改廃のルール、廃止基準の検討 具体的に、県からの提案があった以下の項目を中期計画または年度計画に入れることも考えられる。

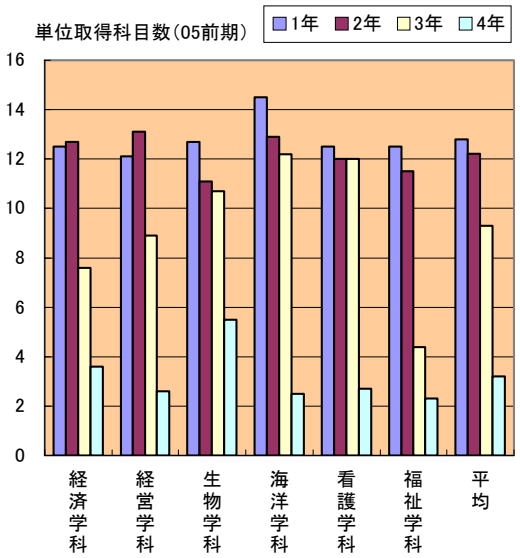
C-7「教育の成果の検証・評価体制の検討」については、今年度から本格化した FD 活動を来年度以降も経常的に実施することにより、授業改善を中心に教育の成果が向上しているかどうかをモニターしていくことが、当面 FD 部会が与る領域であることが確認されている。

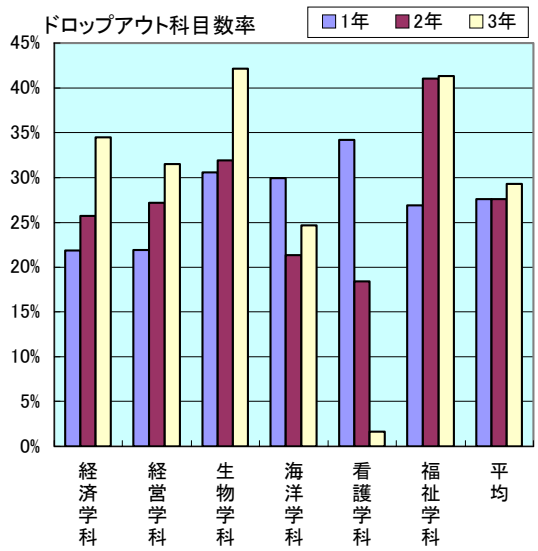
C-19 の「成績評価の厳格化」については、成績評価と授業改善の関連性が不明なため、FD 部会では担当しないことといったんされた（平成 17 年 6 月 10 日、第 2 回部会）。ただし、教育成果の検証の一環としての成績評価方法にある教員間のばらつきをどうするかに関連して、GPA 制度や CAP 制について 5.3 節の資料に基づき部会内で若干の議論が行われた（8 月 2 日、

第 3 回部会）。これとの関連でさらに突っ込んだ議論が、第 5 回の部会で行われ、学生の学期あたりの履修登録科目数と取得科目数などのデータが示された。これによると登録しながら単位取得しない率が高いことが指摘されたが、登録者が必ずしもすべて期末試験を受けるなどの成績評価の対象とはなっておらず、直ちに単位取得数に縛りを設けることが必要とは思われない、「中期計画」は無訂正としながらも、GPA や CAP に関する事項を具体的な年次計画として今回明記しないこととする、ただし、その他の方法も含めて、成績評価の厳格化、履修科目数などについては今後も FD 部会で議論することが確認された（11 月 21 日、第 5 回部会）。

5.2. 学内履修状況調査

5.1 節における GPA や CAP についての議論を行うに当たり、2005 年度前期の履修科目数と単位取得科目数についての調査を行った。その結果はつぎのようである。





■ 単位を取得する科目数
・1,2年は学科を問わず12科目程度。海洋学科1年生は例外的に14科目程度。
・3年生は、生物、海洋、看護が10～12科目、経済経営が8科目、福祉が4科目。
・4年生は、一部学生を除いて全学科ほとんど履修していない。

■ ドロップアウト率　（履修登録科目数-単位取得科目数）÷単位取得科目数×100(%)
・20～40%、12科目取得の場合、15～20科目登録することが多い。
・途中でドロップアウトする科目数、および最後まで受講したが不合格となる科目数の両者を含む。
・経済、経営、生物、福祉の 4 学科は、学年をおってドロップアウトが多くなる。3年生はとりあえず登録する傾向か。
・海洋学科は、1年だけ特別で、2,3年は同様。看護学科は、逆に1年生で過剰に登録しているが、2年生ではドロップアウトが低下し、3年生では皆無。

■ 単位取得数の多い順に、上位、中位、下位をみると次の傾向がある。
・上位10数名1年生では、上位10数名は学部を問わず、17科目以上の科目で単位を取得し、過剰登録も少ない。
・中位の学生は、学科を問わず、12,13科目で単位を取得し、17,18科目登録する。学年を追って履修科目数は減る。
・下位学生の1年生についてみると、経済学部では15%が1～9科目の単位を取得（1～19科目

登録）。生物資源学部と看護福祉学部では、各学科で10名程度が～9科目の単位しか取得しない（登録は13～22）。

■ 科目数を制限すると・・・

・シラバスをしっかり読み、目的意識をもって履修登録し、学習する。
・とりあえず登録の後、成績評価の難易情報によってドロップアウトすることが少なくなる。
・意欲的な学習者が多くなり、教室の雰囲気がよくなる。
・能力以上に履修するデメリットを回避できる。
・無駄な教務作業が減る。
・沢山履修して、すべて単位を取得できる優秀な学習者には科目数制限は弊害。
・ GPAなどの成績評価と併用すると、科目制限は弾力的に行うことができる。

取得単位数の上位5名と中位5名の単位取得科目数と履修申請科目数(2005年前期)

経済学部	1年	224名	2年	206名	3年	197名	4年	224名
科目数	取得	申請	取得	申請	取得	申請	取得	申請
上位	22	22	23	23	16	22	13	14
	21	21	23	24	16	18	13	22
	21	21	21	23	14	17	10	13
	20	20	20	22	14	16	9	12
	19	19	20	20	14	15	9	16
中位	13	21	13	19	9	10	0	0
	13	18	13	18	9	10	0	0
	13	17	13	18	9	9	0	0
	13	17	13	17	8	21	0	0
	13	17	13	17	8	19	0	0

生物資源学部	1年	86名	2年	86名	3年	91名	4年	95名
科目数	取得	申請	取得	申請	取得	申請	取得	申請
上位	22	26	16	20	18	20	13	21
	21	26	16	19	17	23	12	18
	20	23	16	19	17	20	6	9
	20	24	16	18	16	19	6	14
	20	24	16	18	16	18	4	10
中位	13	16	13	17	12	14	0	0
	13	17	12	18	12	18	0	0
	13	17	12	17	12	16	0	0
	13	17	12	17	12	14	0	0
	13	20	12	16	11	17	0	0

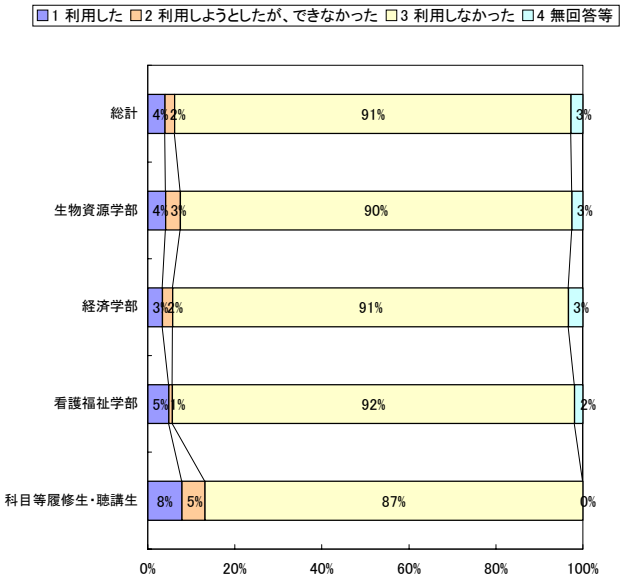
看護福祉学部	1年	83名	2年	78名	3年	84名	4年	81名
科目数	取得	申請	取得	申請	取得	申請	取得	申請
上位	27	33	15	19	14	14	13	16
	17	23	15	18	14	14	13	13
	17	22	15	22	13	13	9	9
	17	21	14	17	13	13	5	5
	16	21	14	16	13	13	4	10
中位	12	19	12	14	11	11	1	3
	12	18	12	15	11	17	0	0
	12	18	12	15	11	12	0	0
	12	21	12	16	11	12	0	0
	12	16	12	20	11	11	0	0

5.3. オフィス・アワー利用状況調査

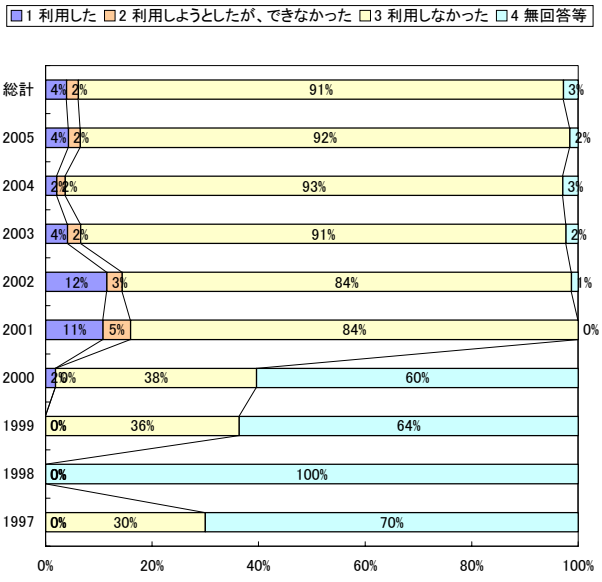
前期と後期を比較すると、オフィスアワーを利用した学生は、前期４％だったのが後期８％と２倍になっているものの、全体的に利用率はかなり低い。

利用しなかった理由としては、「質問や相談がなかった」、「授業中や直後に質問等を行っているから」、「自分の都合のよい時に質問できる（または質問したい）から」の順に回答率が高くなっている。また、本学部生に比べて科目等履修生・聴講生のオフィスアワー利用率が高くなっていることなどからも、オフィスアワーに設定されている時間が他の授業と重複するなどにより、利用困難となっている可能性が考えられる。

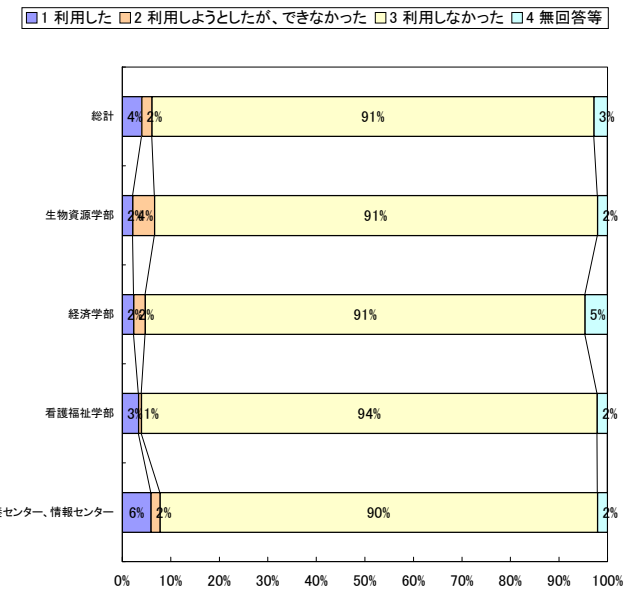
学部別の回答内容



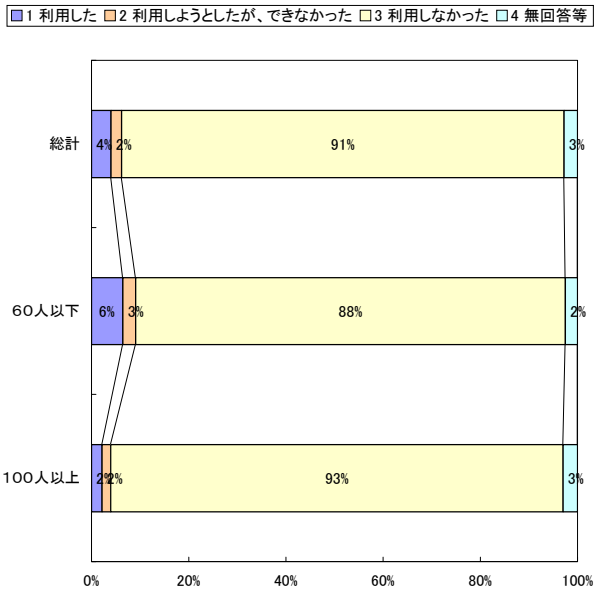
入学年度別の回答内容



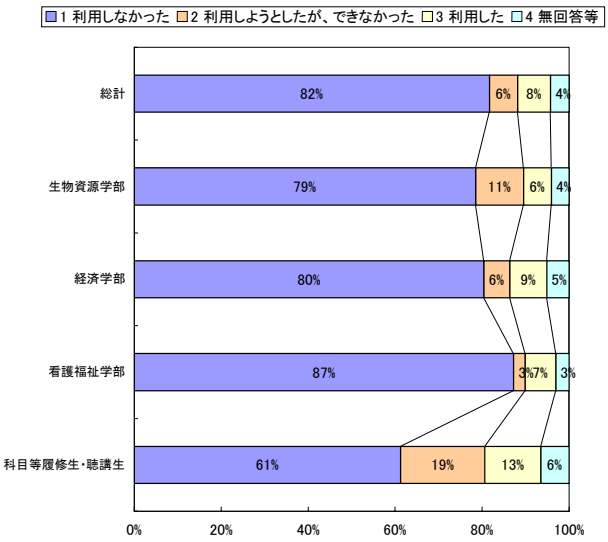
部局別の回答内容



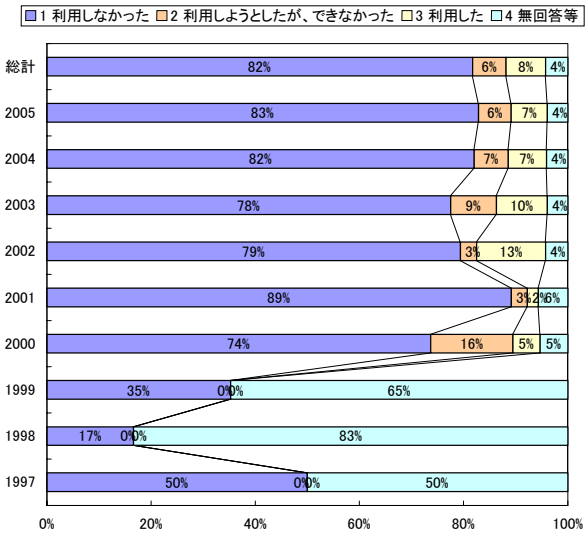
教室規模別の回答内容



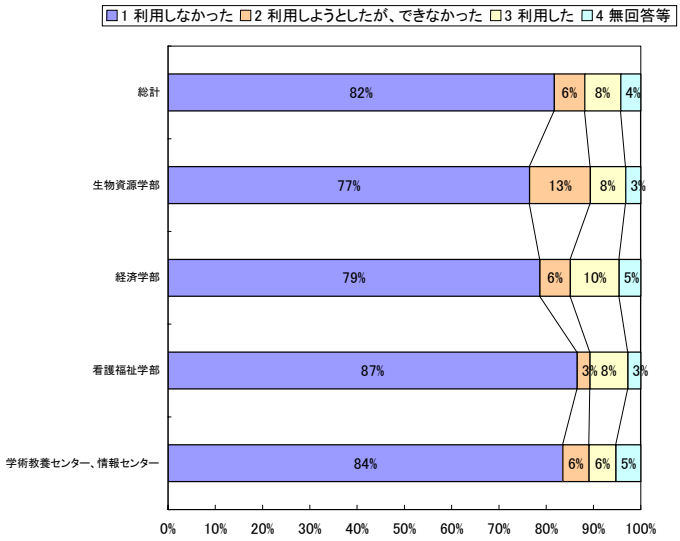
学部別の回答内容



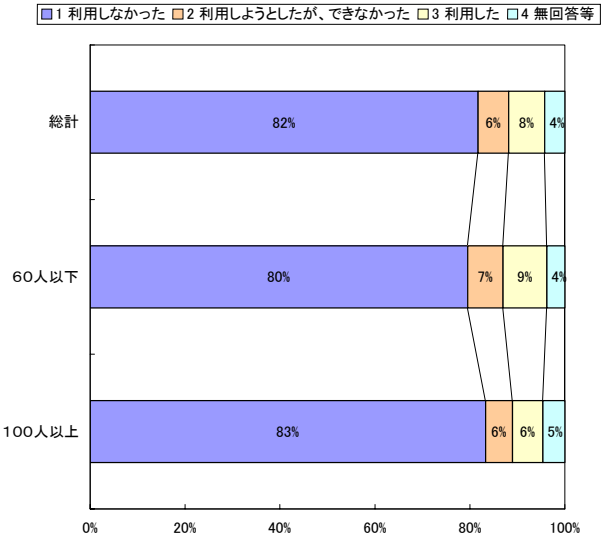
入学年度別の回答内容



部局別の回答内容



教室規模別の回答内容



5.4. 2006 年度の方針

(1)「大学改革実践プログラム

「大学改革実施計画書兼進行管理調書」の C-1 については、今年度の実績をふまえ、本報告にもあるようないくつかの改善点をふまえながら、FD 活動を経常的に遂行していくだけである。C-7 については、授業評価を中心とする活動を今後どのように授業改善に結びつけるかについての検討が必要になるものと思われる。C-19 については、大学改革進行管理調書にあるとおり、部局毎の特性や状況をふまえ今後も検討を継続していくことになる。

(2)GP

GP については学内での認識は必ずしも高いとは言えない現状であるが、学外での研修等に参加して、肯定・否定を問わず認識を新たにしている教員も増えつつある。FD 部会としては今後こうした点での継続的な情報提供を図るとともに、GP 申請にあたっては具体的な

支援を図っていくことになろう。特に、いわゆる「特色 GP」は部局なり学科なり組織単位で申請する必要があるが、「現代 GP」の方は逆にプロジェクト毎の申請が可能であるため、今後部局や学科の枠を越えたプロジェクトをサポートするために FD 部会が役割を果たすことも考えられる。

ファカルティ・ディベロップメント報告書　２００５

平成１８年3月３１日　発行

編者　福井県立大学教務委員会ファカルティ・ディベロップメント部会